

Fate/Blank Order

後菊院

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

問おう。貴方が私の英雄か？

目次

本編	
第一話	1
第二話	16
第三話	34
第四話	48
第五話	71
第六話	90
第七話	111
第八話	135
第九話	150
第十話	173
第十一話	194
第十二話	203
次回予告	
冒頭	216

本編 第一話

0

英雄になりたければなればいい。
誰もそれを邪魔したりはしない。
きみが誰かの偽物になるだけだ。

1

俺には空々空そらからくうっていうサーヴァントがよくわからない。

まさに理解不能——意味不明と言って良かった。

バーサーカーっていうわけでもなし、言語自体が通じないとか、或いは何処かしら何かしらの方向にふっ切れているって感じでもないんだけど——でもバーサーカーよりもよっぽどわけのわからない存在だった。

英霊エミヤと同じ『現代の英霊』だったのもあって、彼の残した功績が確認できない、つまり空々空という人物の輪郭が見えないことが一番大きな原因になんだろうけど、それ以上に——否。それとは一切関係なく、俺は彼を理解できなかった。

こういう相手を、「うまが合わない」とか「そりが合わない」とかいうんだらうか。

これまでの人生で彼のような人間——自分と決定的に合わない——明確な敵対こそしないものの、恒常的に何処か噛み合わない存在に出会ったことはない。だから果たしてこの解釈が正しいものなのかどうなのかは判別のしようがなかったけど、他にそれらしい推測も立たないので、いまひとつ納得いかないけど、それでこの謎を頭の奥に押しとどめている。

俺はカルデアのサーヴァント——つまりは古今東西の人間たちと良い関係を築けていた。もしかしたら冗談じゃなく世界中の人々誰とでも仲良くなれるんじゃないかなんて思ってしまったくらい自信があった。これまでの特異点で敵対した者たちとも、カルデアに喚んだ後は仲良くなっていた。だからこそこんなサーヴァントが存在することがショックだった。

他の皆はどうなんだろう。俺と同じような感想を、彼に対して抱いている者はいないだろうか。

この納得できないもやもやの原因は、空々の方にあるんじゃないか——相手側に他者との関係を崩すような何かがあって、もしかすると俺には何も問題はないのではないかと、自らの周りの者に、彼の印象を聞いてみた。

「空々さんですか？ はい、確かに彼は他のサーヴァントの方々とは少し雰囲気違いますね」

マシユ・キリエライトは俺の質問にこう答えた。

「活躍なされた時代が現代だからなのでしょう……。他のサーヴァントの皆さんと比べてみると、とても普通の感性をお持ちですよ。失礼かもしれませんが、前知識なしでは、とても英霊には見えません」
彼女の感想は、残念ながら俺にとっては期待外れだった——見当外れと言ってもいい。マシユの見立ては確かに正しくて、事実、彼の風体や言動はとても人類史に輝く英霊には見えない。打ち立てた功績も、彼自身全く語ろうとしないので、何かの間違いで一般人が召喚されたのではないか、そんな噂が半分冗談半分本気でカルデア内を流布していたりもする。

だが、違う。

俺の中の何かが、それは違うと叫んでいる。

彼は普通ではない——普通などという概念から最も遠い場所にいるのが彼だと。

「ソラカラ。彼は……不思議な方です」

少し難しい顔をしながらそう言うのは、アルトリア・ペンドラゴン。「彼の身体能力は、その、そこまで高くありません。サーヴァントとし

て——神秘の現象として顕現している以上、最低限の肉体強化はされてはいますが……。現代で英霊になるというのは、私の時代よりも遙かに難しいことであると、聖杯からの知識にあります。アーチャー——英霊エミヤは、人類意志と契約して、守護者という形で英霊の座に押し上げられたと聞きました。ソラカラはその例に組み込めない。彼は一体何をここにやって来たのでしょうか？　そこが不思議です」

名高き騎士王は彼の戦闘能力に注目していた。確かにそれは俺も非常に気になるところではあるのだが、しかしそれはいま俺が感じているものあまり関係が無い気がする。

「空々君。うん、確かに彼の人格には興味深いものがある。是非とも生前の話を聞いてみたいものなだけ——どうやら彼は私を避けているようですね。前に一度、半ば無理やり聞き出そうとした時も、小学生の頃は野球に明け暮れていた野球少年だったということしか教えてくれなかった」

名高き天才レオナルド・ダ・ヴィンチは流石に彼の異質さに気づいていたようだったが——そこに嫌悪やそれに比類する感情は見えなかった。となるとやはりこれは彼と自分の間にあるものなのか。無駄な足掻きが徒労に終わって、少しがっかりしていると、

「君からも聞いてみたらどうだい？　マスターからの質問なら、案外答えてくれるかもしれないぜ」

ダヴィンチちゃんがそんな提案をしてきた。

空々の過去を聞く？

そういえば、面と向かって彼にその手の話を聞こうとしたことはなかった。こういうことをこちらから詮索するのは違う——空々から話すのを待つべきだと、そんなセオリーをこの場合にも当て嵌めていたが、なるほど考えてみれば親睦を深めるという意味合いでそういう一歩踏み込んだ話をするのも手かもしれない。多くのサーヴァントは辛抱強く待つことで心を開いてくれる——その性質がプラスかマイナスかの違いはあれど、大抵あちら側から立香に近寄ってくる。押し強い王や皇帝達は勿論、学者だって殺人鬼だって、悪魔だって海

賊だって孤独な夜が好きなアウトローですら、その例には漏れない。それは相手側からのアプローチが無い限り関係はずっと平行線のままであるということだ。時にはこちらから最初の殻を割っていくことも必要なのではないか、待っているだけでは駄目なのではないかと、ダヴィンチの何気ない一言で気づかされた。

同時に思う。空々だって腹を割って話せば案外分かり合えるのではないか、これまでの敵対者——黒き騎士王や文明の破壊者、ケルトの女王や獄炎の魔女の様に、心を通わせることができるのではないかと……
——
そんな風に——思ってしまった。

2

空々空は普段何処にいるのだろう。

空々に割り振られた個室を訪ね、現在そこに彼がいないことがわかった時、そんなことも知らない自分を認識して、これではマスター失格ではないかと軽く自己嫌悪に陥る立香だったが、しかしカルデアに召喚されたサーヴァント全ての生活スタイルを把握している者など精々ダヴィンチとホームズくらいのもので、それは敏感に反応しすぎである。この思いの裏側には、だから空々へのどうしようもない苦手意識があるのだが、そこまでの自己分析ができる程立香は大人ではない。他の誰かに空々の居場所を聞くのも、自らの至らなさを暴露するようで気がひけたが、しかしこのままあてどなくカルデアを彷徨っているよりはと思いい切り、職員やサーヴァント達に彼の行方を尋ね始めた。

「空々君なら普段はトレーニングルームにいるよ」

その情報を手に入れた時は意外に感じたが、思い返せば彼はもともと野球少年だったという話をダヴィンチちゃんから聞いていた。印象に反して、彼はアウトドアを好むのだった。召喚したのが比較的最近である為、実際に戦っている姿を見たことはないが、ひよつとして彼は武闘派なのだろうか？ それもまた想像がつかなかった。アサ

シンというクラスの性質上、高くはないにしても、最低限の戦闘能力は備えているのだろうか。

無機質な造形にほんの少しの神々しさを加えたカルデアの白い廊下に「コン、コン」と足音を響かせながら、立香はそんなことを考える。幾つかの角を曲がり、サーヴァント達がよく利用する模擬訓練施設が密集するフロアに辿り着くと、ランプが『使用中』という表記になっている部屋を発見し、中を覗いてみる。

すると仮想空間に作られた平原の道を走る空々少年の姿が見えた。

「マスター。こんにちは」

こちらに気づいた彼は軽い会釈と共にこれといって特徴のない年相応の声で挨拶をしてくる。立香も挨拶を返した。召喚時の彼の年齢は十二、三歳くらい。サーヴァントというのは原則全盛期の姿で召喚に応じるのだが、だとすれば彼の全盛期は驚くほど幼い。今の立香の年齢よりも一回り下である。こんな小さな頃に、彼は英霊の座に招かれる程の偉業を打ち立てたのだろうか。

空々は足を一度止めると道を外れ、トレーニングルームの中核である制御盤の前まで歩き、明かりと空調を除くすべてのシステムを落とした。肩にかけた手拭いで額の汗を拭きながらこちらに向かってくるのを見ると、どうやら今日のトレーニングは終わりにするらしい。立香が来たからなのか、それともただタイミングが一致したのかはわからないが、立香の心は幾分安らいだ。

「どうやら向こうはこちらを嫌ってはいないらしい。」

「どうかしましたか？ 何か用でも？」

「ああいや、用ってほどでもないんだけどさ……ちよつと空々君と話ができないかって」

「……………」

表情の変わらない顔で立香をじつと見てくる空々——その沈黙が痛いほど長く感じたが、実際はほんの一瞬だったようで、「構いませんが」という空々の声で立香の束縛は解ける。

「でも動いた直後なので、一度シャワーを浴びてきていいですか？」

サーヴァントの身体で汗をかくほど運動していたのか。

案外レオニダスの様な筋肉系なのかもしれないなど、頭の中で空々の印象を少し砕く。

「——うん。いきなり押しかけてごめん。もしかして、まだトレーニングの途中だった？」

「……いえ」

丁度今切り上げようとしていたと、空々は言った。

3

隣のシャワー室へ消える彼の後姿を見送った後、立香は廊下の壁に背中を預けながら彼への質問をどう切り出そうか思い悩んでいた。

当初は君の生前の話を聞かせてほしいとストレートに質問をぶつけるつもりだったが、いざ彼と会話を交わした後だと現実感に引き戻されてしり込みしてしまった。婉曲にそれを伝えられるいい言い方は無いかと思案するが、そうそう都合よく名案も出ない。だが面と向かって聞くのはやはり抵抗がある。思考が堂々巡りに陥って、いよいよ最初に思い描いた聞き方すらわからなくなってきた辺りで、空々はシャワー室から出てきた。

「……ここで待っていてくれたんですか」

「あ、うん……。気にしなくていいよ？ 全然大丈夫だから」

そう言うってから一体何が大丈夫なんだよと心の中で自らに後悔のつっこみをいれる。自分は今引きつった笑みを浮かべているのだと、いちいち鏡を見なくてもわかった。濡れた髪から白い湯気を立てている空々は、怪訝そうな顔つきで立香を見ながら

「ありがとうございます」

と、礼を言った。

「……え？ あ、うん……。いいよ、そんなの……」

予想外の言葉に面食らい、困惑する——出会いがしらに罵声を浴びせられるよりもびっくりしてしまった。まさか彼の口からありがとうなんて言葉がでてくるとは。冷静に考えれば至って普通の、何でもないことなのだが、不思議なことに立香は、空々が礼を言うことにひ

どく違和感を覚えた。

そしてまた自己嫌悪。

どうしてこんな風を感じるんだ。

彼は何も悪くないっていうのに。

「どこに行きましようか。食堂は近いですけど、この時間ならエミヤさんたちが厨房にいますよね」

空々に言われて初めて話をする場所をどこにするかという問題に気づく。そうだ、話す場所なんてどこでもいいと思っていたけれど、他の人がいる場ではしない方がいいことを彼に聞く筈じゃないか。咄嗟に空々に聞かれ、立香は――

「――俺の部屋とかどう？」

少し冒険的な提案だったが、空々は特に何のリアクションもなく「いいですよ」と承諾してくれた。これは何というか、失礼にあたるのかも知れないが、予想通りの反応だった。彼はプライベートとかそういうデリケートな問題に鈍感な人間だったのだと、何となく察せられた。

「じゃあ行きましようか」

4

人理保障機関『フィニス・カルデア』は、通常時ならば今の倍以上の人員が生活できるようになっている巨大施設である。訓練室と各個人の私室は違うエリアにあり、間の距離はやはり徒歩で二、三分かかるくらいのもののだが、悲惨なことに、立香と空々が訓練室から立香の私室に到着するまで、一切の会話は無かった。

『会話が無くても一緒に居られるのが本当の友達』などと言うが、未だそんなに仲良くない――これから絆を深めようという相手と共に無言の二分を過ごすのは立香にとってかなり堪えた。コミュニケーション能力はある方だと自負していたのだが……、今まで積み重ねてきた自信を見事にへし折られた気分だった。

もつとも、ここまでの流れは『話があるので場所を移そう』という

ものなので、話をする前に話をするのもおかしいという理屈はあるのだが。

真面目な話をするなら尚更だ。世間話でお茶を濁した後でさっとシリアスなムードに切り替える自信は立香にはない——相手を選べば可能だが、今回の相手は空々空だ。

おちやらけることはできない。

だから自分の部屋に空々を通して彼に椅子を出し、自身はベッドに腰掛け、空々に対面した時、立香の中には既に一仕事終えた後の様な疲労感が溜まっていた。

「それで、何の話ですか？」

空々はまず椅子を出してきた立香に「ありがとうございます」と礼を言うと、立香の部屋をぐるりと一周見回し、差し出された椅子の背中を僅かに引いて、ゆっくりと腰掛ける。部屋を見回したということはあるか、彼も彼なりにマスターの部屋に入って緊張しているのだろうかと勝手な推測を立ててみたが、立香に質問をした後はずっとまっすぐこちらに視線を向けたままだ。流石はサーヴァント、こんなことでは動じないらしい。

「……悪い。『話をしたい』って言うのは、実はちょっと違うんだ」

立香は初め、謝る。

「どちらかというと、俺は空々君の『話を聞きたい』と思った結果が、今日の誘いなんだけれど」

それは立香自身の律儀な性格が言わせたのが半分、こちらが下手に出ることで空々の口が少しでも緩むのではないかという、立香にはあまり似合わない計算高い思惑もあった。

「無理にとは言わないよ。ただ、現代の英雄譚がどんなものなのかって、君がカルデアに来てくれた時から気になってき——思い出しただくない記憶とかだったら、無理に話さなくなつて全然いいんだけど……。君と仲良くなれるきっかけになれたらいいなって思ったんだ」嘘を語っているつもりはない。

ずっと思っていた本当のことを——本心を伝えているつもりだ。真摯に向き合わなければ、人との距離は縮まらないと立香はちゃんと

知っている。

それなのに立香は、自分の心の何処かが、じわりと黒ずむ様な感覚に襲われた——決してそんなことはない、それは自分の自意識過剰だ、自分ひとりで作った幻で、そんなものある筈がないんだと必死で自分に言い聞かせながら、空々の瞳を見つめ返す。

彼の瞳からは——何も読み取れなかった。

「……そんな」

何も読み取れないまま、彼の口は開かれる。

「僕はそんな、英雄譚とか言われるような大層な人生なんか送ってきていないですよ」

それが謙遜なのか、それとも比較的事実に沿う供述なのかどうかの判別は立香にはつかない。ずっと空々の所作を見続けているが、彼は本当のことを言っている風にも見えたし、嘘を吐いている風にも見えた。

よくわからない。

よくわからないから——更に一步、彼に踏み込む。

傷を堪えながら。

「でも、君はここに召喚されたじゃん。ってことは君は、人類を守る戦力の一人に数えられたんだよ」

——君は英雄なんだ。

そんな言葉を、立香はもののはずみのような勢いで空々に言った。言ってしまった。

「……そうですかね」

曖昧に頷く空々少年——ここで初めて彼は立香から視線を外した。視線を下に落とした。そしてそれは、立香にある種の『手ごたえ』を感じさせるものだった。よし——この線を辿っていけば、この糸を手繰っていけば、空々の内面に——『心』に、出会うことができるかもしれない。

更に一步。

「現代では『世界を救った程度じゃ英霊にはなれない』って言われているんだけど、空々君は世界を救うより凄いことをしたんだよね？ 一

体何をやったんだい？」

『生前に何をしたのか』と質問すれば、大抵のサーヴァントは「そんな大したことじゃないけど」とはいうものの、少しは話をしてくれる。武勇伝や失敗談、教訓や持論、小喃から大法螺と各自に差はあれど、彼らは魅力的な物語を聞かせてくれる。自らの生き様を教えてくれる。

だが——空々は違っていた。

「何もしてはいませんよ僕は——特に、何も」

それは明白な拒絶の意志だった。

少なくとも立香は——そう受け取った。

破ることのできない壁が、そこにあった。

「……そうか」

残念な思いは消えてくれないが、せめて空々が気分を害さないよう立香は笑顔を保つことに努める——しかし、どうしたって寂しさの色は隠しきれない。かつて味わったことのない敗北感——挫折感が心の内側をじわじわと垂れていって、立香を少しずつ塗り替えていくのがわかった。

だからここから後の展開は予定調和で、どうしようもなく失敗した藤丸立香が、どうしようもなく死産した空々空を見送るという、特に面白くないシーンがやって来るはずで、刻々と迫るその刑罰を、立香は目を伏せながら待っていたのだが——

「——マスターの方が、よっぽど英雄ですよ」

………

空々が発したその言葉は、客観的に見るのなら大したものではない。先の発言の続きの台詞——ただそれだけの意味しか持たない。目の前で急に元気をなくしたマスターを氣遣って言っただけに過ぎない。

だがそれは空々の予想以上に立香を動かした。

褒められたこと——ではなく、『空々』が『立香を褒めた』ことが、立香にとっては大きな意味を持っていた。

「……本当？」

本当に、そう思う？

いつもの立香なら、『君こそ英雄だ』とかなんとか言われれば少し照れながらもわりときっぱり否定するのだが、この時ばかりは、そう聞き返さざるを得ない。空々の真意を確かめずにはいられなかった。立香にとって空々は本当に摩訶不思議で、理解不能で、相容れなくて――

まるで――自分自身のようだったから。

「君は、本当に俺を英雄だと思ってる？」

それは自問。

あるいは――自殺だった。

カルデアにいる誰よりも『普通』という言葉に相応しく、必要な筈の戦闘能力は雀の涙ほどしか持っていないくて、それ故に『異常』の二文字に最も近い場所に立つ一般人。

正反対で――同一。

立香は、自分が知りたかった。

「英雄ですよ」

空々は調子を変えることなくそう言った。

その台詞で――とうとう立香は確信する。

空々の正体を。

或いは――自分の正体を。

5

魔術王の残響との最後の戦場が決まったのは、空々と立香が言葉を交わした時からちょうど一週間後だった。

カルデアにいる職員、サーヴァントはこの事態に多少なりとも動揺していたようだったが、立香は不思議と何の感慨も抱くことはなかった。警報が鳴って、それが遠方での特異点発生の報だとわかって「ああ、来たのか」と、その程度のリアクションしかとらなかつた。その後も特にいつもと変わらず、いつもの同じような歩調で管制室に向かう途上空々と鉢合せる――なんてこともなく、ただただ予定調和の如く、立香はシバの前に集まった。

「やあ。君も迅速だね」

ダヴィンチの挨拶もいつも通り——否、僅かではあるが、彼女の出で立ちにはこわばりがあるのが見えた。さしもの天才ダ・ヴィンチちゃんにも最後のレイシフトへの緊張は抑えられないということか

「——失礼します。状況は……?」

マシユが管制室に入ってきた。彼女はダヴィンチよりもっとわかりやすく動揺していた——否、動揺と言うよりかは、緊張と言った方が正確だろうか。

ともあれ、それでマシユやダ・ヴィンチが失態を犯すなんてこともなく、現状の把握と整理を為した後、その日は準備の為に解散の運びとなった。カルデアのマスターであり、現地潜入担当である立香が本格的に動き始めたのは翌日からである。

「——どうかしましたか? 先輩」

「……ん?」

件の翌日。

マシユは躊躇い勝ちに立香にそんな質問をした。心なしか、立香の様子が普段と違う気がしたのだ。

「どうもしないよ。どうして? マシユ」

「いえ……それならいいんです。すみません、気にしないでください」
本人がそう言うのなら何もないのでろう——私の気のせいなのだろうと、マシユは違和感を心の奥に押しとどめた。だがゼロ二モの説明を聞いている間もその後サーヴァントの皆とこれからの予定の相談をしている間も、その違和感は消えてくれることがなく——いや、どうだろう。やっぱり私の気のせいじゃないか? 一度変だと思ってしまったばかりに、ずっとその視点が消えないからなんじゃないのか?

具体的にどこが変なのかと聞かれても答えられないし——

「……すみません、ちょっといいですか?」

「何だい? マシユ。セイラムについては私よりもゼロ二モの方がよく知っていると思うから、質問なら彼にしたほうが——」

「いえ、そうではなくて——大したことじゃないんです。その、わたしの気のせいだと思うのですが………先輩の様子なんですけど、いつもと違う感じがしませんか？」

「……？」

マシユの言葉を受けて、ダヴィンチは少し遠くにいる立香の様子を眺め始める。マシユも振り返り同じ方向を見た。立香は今回セイラムにレイシフトするメンバーに選ばれて招集されたロビン・フッド、マタ・ハリ、シャルルⅡアンリⅡサンソン、空々空、メディアの五騎と作家サーヴァントであるアンデルセンとシエイクスピア、それにジェロニモとホームズを加えた計九騎のサーヴァントの輪に混じって和気あいあいと今回の対策をたてていた。

「特に変わったところはないと思うよ？」

「そうですか？」

「うん——それよりも私には、メディアの様子が少しおかしく見える気がするね」

「メディアさん……？」

そう言われて、マシユは初めてメディアの方に視線を向ける。確かに、言われてみると、いつものメディアとは何処か雰囲気が変わっている風に見える。それはマシユが立香に感じたものよりもずっとはつきりとした違和感だった。

「………」

「気になるのだったら直接聞いてみればどうだい？」

「はい、先輩にはさきほど質問してみました……でも、別に何も無さそうで」

「……ふうん」

天才はまた立香の様子をじっと見る——しかし、特におかしなところがあある風には見えなかったようで、

「私には特に変わったところが見えないな」

と、前と変わらない結論を出した。

「そうですか……」

「いや、私よりもマシユの方が普段立香君の近くにいるからね。私で

は気づけないような些細な違いに、マシユが気づいてもおかしくはないよ——そうだね、これからはもう少し観察してみることにしよう。様子が変わったというのなら、それはとても興味深い」

「興味深い……ですか？」

「そうさ。これまで幾人もの英霊と出会い、幾つもの冒険を乗り越えてきたにも関わらず、主義や思想、性格や倫理観——そういったものが何一つ変わらなかった特異な人間が君のマスター、藤丸立香だよ」

「主義、思想……」

確かに、立香は初めに会った頃から何一つ変わっていない。

炎上汚染都市でも、邪竜百年戦争でも、永続狂気帝国でも、封鎖終局四海でも、死界魔霧都市でも、北米神話大戦でも、神聖円卓領域でも、絶対魔獣戦線でも、冠位時間神殿でも、悪性隔絶魔境でも、伝承地底世界でも、屍山血河舞台でも、藤丸立香は一貫して藤丸立香であり続けた——己を一切変えることなく、立香は人理修復という偉業を成し遂げたのだった。

「藤丸立香は何者にも染められなかった。名だたる英雄達——オルレアンの聖女も、暴虐の皇帝も、自由の海賊も、皮肉な童話作家も、革新的天才科学者も、忠義の騎士も、英雄の王様も、世界一の探偵も、不屈の船長も、無敗の剣豪も、竜の魔女も、破壊の帝王も、神話の勇者も、霧中の殺人鬼も、蛮地の戦士も、聖剣の王も、原初の魔獣も、犯罪界のナポレオンも、千夜一夜の語り手も、極東の切支丹も、七十二柱の魔神達も、誰一人として変えることはなかった。寧ろ彼らの方が『変わった』。ここまで自らを維持し続ける——一般人でい続けることは、英雄になるよりも難しい」

そんな人間が——『変わる』とは。

「それはこの上ない異常事態であるとは思わないかい？ マシユ」

「……」

——よくわからない、というのがマシユの正直な感想だった。

そもそも、立香が誰の影響を受けても性格や思考回路が変わらないのは変だ、というダヴィンチの言い分が理解できない。話が文学的すぎて現実感がない。そんな立香が変わったのが異常と言われても腑

に落ちず——言葉で遊ばれている様な、馬鹿にされているような感じ
しかなかった。

いまひとつ納得いつていない顔をしているマシユを見て、ダヴィン
チは大人が子供に対する時の様な笑みを浮かべた。

「気にすることは無いよ。今のは私の戯言とでも思っけて忘れてくれた
まえ」

第二話

0

真実を知りたければまず嘘を知れ。

——貝木泥舟

1

レイシフト先は真夜中の森だった。

デミ・サーヴァントとしての能力を失った今のマシユでは、人工の明かりのない宵闇の中で辺りを見渡すことは確実に不可能だった。夜目の利くタイプでもなく——ただただ視覚以外の感覚を研ぎ澄ませて周囲の情報拾う。

「……空間内部へと到着したのでしょいか」

皆に無理を言って劇団の語り部役としてレイシフトメンバーにねじ込んでもらった手前、いつも以上に働かなければと思い、マシユは一番最初に声を上げる。

「セイレム校外の森林部……。時刻は夜明け前の深夜です——予定通りならば、ですが。けれど、真っ暗で……」

「みんな、無事？」

立香の声が響いた。

そうだ、こんな暗闇に放り出されてまず一番最初にやらなければいけないのは現状把握よりもまず点呼な筈だ。マシユはそこに思い至らなかつた自らを反省する。

「さてさて、どうつすかねえ。妙な居心地の悪さはあるがねえ……。ミストの中は真っ暗闇も覚悟していたが、どうして結構明るいじゃねえの」

まずロビンが反応した。声を出すというのは自分の位置を周りに教えるのと同義で、周到な彼が一番最初に立香に応じるのは妙な気が

したが、なるほどこの暗闇の中でも辺りを見渡せるといふのならそれもうなずける。森の義賊の名は伊達ではないということだろう。

「さすがロビンさん、夜目が利くんですね。わたしにはほとんど……周囲の警戒をお願いしたいです」

「はい、任せられましたよつと。あとで星の天測もして時間のズレもチェックしとこう——おおっと、不審者一号発見ですぜ？ こいつが噂の魔女ってやつに違いねえな。いかにも辛気くさい顔をしてる。男の魔女だが」

不審者がいると言われ、一瞬マシユは身構えるが、どうもロビンののんびりとした口調から察するに、それは彼の冗談の様だ。

「……それは僕に言っているようだな。きみこそ夜盗と間違われて撃たれないよう気をつけろ」

……サンソンへの軽口だったらしい。

「やめなさいったら、二人とも。せめて役者らしく装って。会話を聞かれても怪しまれないようにしないと」

マタ・ハリが彼らを仲介する。こういう時の要員がいるのはありがたかった——もっと言えば、現地到着早々から仲違いを始める者がいなければ最高なのだが、如何せんロビンもサンソンも代理の利かない優秀なサーヴァントであるので、そこは諦めるしかない。

「そりやそうですな——つて、お、おうっ！」

唐突にロビンが奇声をあげる。予想外の何かがいたらしい。声のする方を見遣るが、マシユの眼は未だに暗闇に慣れず——ロビンくらいの影が蠢いているのが辛うじて見える程度だった。

「……………」

「あー、びっくりした。おまえさんは……新顔の空々か。身動き一つせず突っ立つてるからロウ人形かと思っただぜ」

どうやらロビンはじつとしていた空々少年に驚いたらしい。見た目は小学生か中学生ぐらいの子供なので、初めてのレイシフトではもっと動き回るのではないかと何となく思っていたマシユは、それが少し意外に思えた。

緊張しているのだろうか。

「……ロビンさん、周りに何か変わったことなんてないですよね」

「ああ？ いや、少なくとも俺が見る限りじゃあ異常は見当たらねえぜ。少年くん」

「そうですか。ありがとうございます」

空々がロビンに礼を言うのが聞こえた。そしてロビンの影の隣で何か動いたのが見える。大きき的にあれが空々だろう。

「全員いるかい、マシユ？」

「お待ちください、先輩」

……だんだんと、暗闇に目が慣れてきた。

「そこいらっしやるのは——」

皆から少し離れた場所に、最後の影。

「メディア……さん……？ ですよね？ 今はあまり離れてはまずいです……メディアさん」

レイシフト前、ダヴィンチが言っていたことを思い出しながら、いつもより注意深く、マシユはメディアに声をかけた。

「わかっている」

メディアが答えた——この辺で、ようやく色が見えるまでになった。

「レイシフトか……魔術と科学の融合とはね。この感覚は永遠に慣れないな」

「……？」

メディアが何かを言ったらしいが、声が小さくてよく聞こえなかった。まあ独り言だろうと、マシユは思い切ってそれを無視し、全員の無事を立香に報告する。

「よし。じゃあ、村の中心へ向かおう」

と、立香が言い、マシユも皆もそれに続こうとした時——

「全員まとまって移動するんですか？」

と、空々がポツリと言った。

「……え？」

半ば無意識に、マシユは問い返す。

何だ？ 何を言っているんだ彼は。

「どういうことですか？」

「……ええつと、全員一塊で動くんじゃないかと、誰か一人ぐらい先行するか、でなければ隊列を組んだ方がいいんじゃないかと思っただけです」

そう言われて、マシユはようやく空々の発言の意味がわかる。

無警戒のまま森の中を歩いていったいいいのか？

確かにそれはナンセンスだった——というか自殺行為と言って良い。何と言っても、このセイレムは魔神柱が張った『罨』の可能性が高いのだ。そんな場所を移動するのに、警戒しすぎていけないということもない。

「確かにそうだな。斥候を撒いておいて損はねえ。じゃあちよつくら先に行かせてもらおうぜ？ マスター」

——と、ロビンは彼の宝具である『無貌の王』をかぶり、外界への視覚情報を遮断して——有体に言う『透明になって』、皆に先んじて村のあるとされる方角に歩き出す。

「ちよ——ロビンさん？」

「十五分後に帰ってこなければ、なんかあつたと思ってくれ」

マシユが呼び止めるのも聞かず、ロビンは勢いよく森の奥へと——実際は出口の方角なのだろうが——駆けていく。皆が見えなくなるころまで来ると、しかし彼はそのまま斥候を務めることはなく、こつそりと横に逸れていき、立香達一行が来るのを待った。

「……………」

勿論ロビンが実は立香達を裏切っていたとか、敵と内通していたとかそういうオチではない。サンソンのクソ真面目っぷりに辟易している彼ではあるが、彼なりの忠義はちゃんと持っている。不平不満をこぼしながらも、与えられた仕事は全うする。それが彼である。

では何故こんなことをしているのか——答えは単純。彼は未だに空々空というサーヴァントを信用していないからだだった。

あの少年は少しおかしい。

否、英霊にまでなった者ならば、人ならざる力と引き換えに大なり小なり何らかの『欠陥』を抱えているのが普通——では、あるのだが

……。

だが、あの少年はぶつちぎりだ。

カルデアにいるサーヴァントの中では、彼こそがダントツで異常であるとロビンは確信する。

『英雄』に近づけば近づくほど人間でなくなっていくのは、ある種必然ではある——しかし、だとすれば、彼は——空々空は、これまでに召喚されたサーヴァントの中で最も英雄らしい英雄と言えた。

彼は英雄の中の英雄だった。

「だからこそ、あの少年クンの怪しさが際立つつてもんなんだよなあ……」

ロビンの直感は当たっている。空々空の恐るべき経歴が——悍まじき戦績が皆に知れ渡っていれば、絶対に今回の潜入メンバーに選ばれることはなかっただろう。

「(そんなアイツが、この提案だ)」

斥候。

今回の潜入チームは、言ってみれば小隊規模のものなので、偵察係を出すよりは警戒する方角を分担してゆつくりと行軍するのがセオリーではあるのだが、サーヴァントが大部分を占める潜入チームなど、既に大隊規模の戦力になっているので、そういう意味では理にかなっている。

だが空々空の真意はそこにはない——否、そこにはあるだろうが、おそらくロビン達とは別のことを主眼においている。

空々は『斥候』の役割を、偵察や哨戒ではなく『生贄』として考えている。

先行する囃。

『全員の生存率を上げる』という考えではない、『誰かの生存率を他の者に集中させる』という考え。

「(潜入開始早々からそっちの方向でモノを考えるたあ、まずまともな人生を歩いてきてねえんだらうなあ)」

曲がりなりにも『森の義賊』に選ばれるまで至ったロビンである。それなりの修羅場を潜り抜けて来たという自負はあるが、それでもい

きなりそこまでの発想には至らない。

ぶっ飛んでいる。

或いは、ぶっ壊れている。

「——否。それはまだいい。ウチの大将（マスター）の方針からは外れるが、そこまでは理解もできるし納得もいく。セイレムがあからさまな罠だつてのは決定事項みてえなもんだからな。冷徹な判断じやあるが、それはある意味英断とも言える」

だから本当にやばいのは、少年クンが斥候に抜擢された時——
つまり、空々がロビン達全員を囚として扱う可能性が出た時だ。

「今回のメンバーで、斥候とか偵察とかそういう仕事に一番向いてるのは間違いなくこの俺なんだろうが——だが俺は『アーチャー』だ。戦闘能力の高いとされる三騎士クラス。『斥候として放つよりも、マスターの傍にいなながら周囲を警戒させる方が駒として有効なんじゃないか?』なんて言われた日にやあ、大人しく従う他無えさな。だとすると、やっぱ今回三騎もいる『アサシン』クラスの誰かが斥候を務めることになるんだろう——」

その場合、選ばれる可能性が最も高いのは空々だ。

処刑人のサンソンよりも、ハニートラップのママ・ハリよりも、正体不明にして未知数の實力を持つ空々が斥候になる。

斥候になるということは、皆の前から姿を消すということだ。

先行する危険地帯に居るのが普通だが——たとえ後方の安全地帯で皆の様子をうかがっていたとしても、それはこちらからは知り得ない。

そのうえで、こちらは斥候を放つたから移動中は比較的安全だと思ひ込みながら森の中を進む。

それは不味い。

五騎のサーヴァントで守りを固める以上、如何なる敵が待ち受けていても全滅はありえないだろうが、開始早々人員が削れるという未来は避けたい。

では、空々の危険性を皆に説くか?

証拠も無いのに?

そもそもこれはあくまで可能性の話であって、これを裏づけるようなものは何もない。言ってしまうえばロビンの勘、ただそれだけである。こんなことを皆にぶちまければ仲間割れが起きるのは必至だろう。

だからといって、空々を信用することはロビンにはできなかった。

ただの勘ではあるが——この己の何の根拠も無い勘を信じるこそそが生存の秘訣だと、ロビンは知っている。

故に、そもそも空々に斥候役をやらせなければいいと、ロビンはやりたくもない斥候役を空々に先んじて買って出たのだった。

2

勿論今までの全てはロビンの主観なので、実際とはだいぶ食い違う箇所が存在する。空々空と行動を共にすることの危険性に——『敵よりも味方を多く殺す戦士』と呼ばれた英雄の表層を見破ったロビンのその慧眼は賞賛に値するが、しかしいくら空々でも『斥候役になつて姿を消し、逆に他の者を囿にする』なんてことは考えていない。必要とあれば考えるのだろうか、しかしそんな戦術は今回無意味だと——無効だと、今の彼は思っている。

自分が生き残っても、立香が死ねば意味が無い。

……無論、空々が立香に対して何か特別な感情を抱いているわけではない。そんなことはありえない。これはただ単に、『魔力供給源』が無くなれば自身も強制的に消滅するということを空々も知っているからだった。

実際の魔力源はカルデア本陣からのモノらしいので、立香はあくまで經由回路でしかないが、しかしそれこそがこの身体にとっては重要らしい。

ならば自分ひとりが生き残っても意味は無い。

最低でも二人——その為には勿論、他の者達も生きて立香を守護していてくれる方が生存率は上がる。

だから彼は、もし斥候を任された時も、自分から提案した手前、真

面目に取り組むつもりだったし、ロビンがそれをやってくれるというのなら、それでも全然構わなかった。

そもそも、斥候に出ていようが取り巻きに守られていようが関係なく死ぬ時は死ぬと思っっているのが空々である。ロビンの心配が杞憂に終わるのは、ある意味必然だった。

「空々——さん？」

ロビンがいない中での行軍中——皆より二歩ほど後ろを歩くメデアから、更に横に四人分くらい離れたところを歩いている少年を気にかけて、マシユは声をかけた。

「歩調は大丈夫ですか？ 皆さんと歩幅が違うので、少し辛いと思うのですが……」

「——はい。大丈夫です。ありがとうございます」

特に不自由は無いようだった。まあサーヴァントの身体に、体格差なんてあつてないようなものだ。こんな心配、するだけ無駄というものではあるのだが——

マシユが空々に声をかけたのは、彼がずっと皆の会話の輪に入つてこないから、というのが大きい気がする。

マシユらしい気遣いである——ただそれを言うのなら、彼と同じくらい後方にいるメデアだって会話には参加してこないのだが、彼女はもともとそういう気質だし、何より出発前のダヴィンチの台詞が、未だにマシユの中に残っていたので、何となく声がかげづらかった。

「……キラエライトさんこそ、ペースはきつくありませんか？」

するとマシユを気遣う言葉が返ってきた。既にデミサーヴァントとしての力を失っている今のマシユは、確かに空々なんかよりよっぽど虚弱である。これまで数々の特異点を渡り歩いてきた立香はもうこの程度の行軍など散歩のようなものだが、一切のステータスが初期化されたマシユは、正直少し疲れ始めていた。

いや、まだ全然歩けるけれど。

「はい。大丈夫です」

「そうですか」

特に何の感慨もなさそうに空々は言った。それが温度の無い社交

辞令にしかマシユには聞こえなかったもので、彼女は不安になり、「あの、キリエライトなんて畏まらず、普通にマシユって呼んでいただいて構わないですから」と、空々との距離を詰めようと呼び方なんかを変えてくれるよう彼に頼む。

「……わかりました」

少し間を置いてから空々の返答がやって来る。

その間が、マシユには何故かすごく怖く思えた。

「——よっ」

それ以後は特に会話もなく、黙々と深夜の森の中を歩いていたら——突如樹上からロビンが舞い降りてきた。森の義賊の隠密技能に、一瞬敵襲かと身構えたマシユだったが、しかし他のサーヴァント達は斥候に出た彼のことを忘れてはいなかったようで、突然の登場にも殺気立つことなくロビンを迎える。

「どうだった?」

マタ・ハリが聞く。

「どーもこーも無えさ。向こう3km先まで真つ暗な森、んでそつから開けて村がある——……つてえ報告をしたかったんだがねえ」

何やら回りくどい言い方をするロビン。どうやら問題があったらしいが、しかし彼の口調や表情を見る限り、そこまで深刻な障害でもなさそうだ。

「ここから少し行ったところで、村娘の集団が焚き火を囲んで妙なことをやっている」

『『妙なこと』……?』

立香がロビンの言った言葉を反芻した。

「俺には何かの儀式を執り行ってる風に見えましたがねえ。専門的なことはわからねえ。その魔女サマの意見を聞かないことには——案外ただの子供の遊びかもしれないねえ」

ロビンの視線を送られ注目を浴びたメディアは、少し不機嫌そうにロビンを睨み返す。

「——わかったわ。連れて行きなさい」

「——向こうが機材を設置するまでは通信不能……わかっていたことだけど、到着報告が無いっていうのは、やはり不安になってしまっ
ねえ。ホームズ君」

カルデアの管制室。

『通信不能』の文字が躍るディスプレイを前にして、二人のサーバー
ントが並んで椅子に座っていた。

そのうち一方は、おそらく世界一有名な人物画の中の人間が、その
まま抜け出てきたような精巧な美を持つ女性——レオナルド・ダ
ヴィンチと、

その内一方は、おそらく世界一有名な推理小説の主人公が、そのま
ま抜け出てきた様な機知に富んだ風体の青年——シャーロック
ホームズ。

「ふむ、ただでさえ今回のレイシフトは不安要素の塊だからね。敵陣
の体勢は万全だろうし、これまでは考えなくてもよかつた外部への対
策も必要だ。更に問題なのは、今回レイシフトに選ばれたメンバー——
……」

おっと、ここで言うのは不味かつたかなと、特に焦った素振りもな
く探偵は言う。

「それは誰のことを言っているのかな？」

芸術家の質問は、まるで独り言の様だった。

「答えを知っている者に態々手ほどきをするなんて間抜けな行い、僕
はしないよ」

探偵の応答も、何処か他人事の様である。

「どうかな？ 案外僕と君の注視している相手は全く違うヤツかもし
れないぜ？ 解答の答え合わせではなく、回答の擦り合わせをする意
味はちゃんとあると思うけれど」

「……」

ホームズはちらりとダヴィンチの方を見遣るが、すぐにまた何も映
らない液晶画面に視線を戻す。目の前の机に肘を置き、祈る様に手を

組むと——

『初歩的なことだ、友よ』と、言った。

ダヴィンチは彼の推理が始まるのを見越して、自らの仮説をもう一度頭の中で整理し、明白な箇所とそうでない部分をより分けて、ホームズの推理を捕捉する上で重要な質問を準備する。天才レオナルド・ダ・ヴィンチを助手役に据えるなどノックスも真つ青のキャステイングではあるが、この場合、彼女（彼女）以外にホームズの助手を務められる人材はいなかった。

ダヴィンチは待つ——しかし、いくら待ってもホームズの推理が始まることはなかった。

「……どうしたんだい？」

ホームズはただ、下を向いて黙っている。

「……『初歩的なことだ、友よ』——」

少しの沈黙の後、もう一度ホームズお決まりの台詞を言った彼だったが、しかしそれに連なる推理はいくら待っても出てこない。いよいよ不審に思うダヴィンチ——どうしたんだろう、ホームズに限って今回の最重要人物を見抜いていないなんてあり得ない筈だが……。するとまた少しの間を置いて彼は喋り始めた。

ただしそれは推理ではなく——

「——いや、やはりこの段階で話すのはやめておこう。まだ仮説だからね。犯人が確定するまでは謎解きはするべきではない。君との知恵比べは楽しそうだが、またの機会にしておこう」

「……ふうん？」

ホームズは席を立つと、パイプを取り出しながら管制室の出口の方へ去っていく。妙な引つ掛かりを覚えたダヴィンチだったが、ここで彼を引きとめようとも彼に真意を吐き出させられないことはこれまでの付き合いで知っているので、あえて引き止めずにホームズの後ろ姿を見送った。

確かに彼の言う通り、今の段階で『内部の不安要素』を語り合う必要はない。それはまだ早すぎる——或いは遅すぎる。意味のない種明かしだ。彼の言葉は正しい。

しかし——違う。

ホームズはそれとは別の理由であそこから先を話さなかったのだと、ダヴィンチは確信できた。

4

確かにロビンの言っている通りそれは何らかの魔術的儀式のようにも見えたし、ただの子供の遊びにも見えた。

少なくとも——マシユには判別がつかない。

「——みんな、ホワイトアツシユの杖は持った？　これは魔法の杖よ！　扉を叩くわ！」

幼気な少女達が焚き火を囲んで遊んでいる——雰囲気は間違いなく牧歌的だが、いかんせん場所と時間が異質過ぎる。和やかな雰囲気が却って妙な不気味さを引き立てていた。

「——大地を三回、見えない扉を三回！　とんとんとん！」

「……どうでしょうか、メディアさん」

遠目で焚き火の方を窺いながら、マシユはすぐ横にいる魔術の専門家の意見を仰ぐ。

「どうかしらね……魔力的な気配は特に感じられないのだけれど——いえ、でも、これは——」

「これは？」

メディアは難しい顔をしながら口を閉ざす。じれったくなって、マシユは少し詰め寄る様に彼女の言葉の続きを促した。

「これは……まずいわね。とても」

「まずい？」

「一体何が？　まさか本当に魔術の儀式なのか……？」

「……どうされました？」

「……何も感じないのよ」

メディアの口からポツリと出てきたその言葉は、マシユが立てていた予想のどれとも違ったものだった。

「ここへ来た時からずっとね——魔術的な知覚が極端に鈍っている。

決定的なのは……」

メディアは皆の方を向いて言った。

「ロビン、サンソン。それにその貴方も。霊体化はできる？」

それを聞いてサンソンが霊体化してみようとする。サーヴァントとしての機能の一つ——霊体化は、言わばゴーストモードとでも言うべき姿で、不可視化や壁抜け、魔力の消費を抑えることができる姿だ。

「……いや……出来ない！ なぜだ……？ これはいったい？」

「まさか……『受肉』されているんですか!? いつのまにかサーヴァントでなくなつて——」

「ちげーな」

焦るマシユを、ロビンが制する。

「受肉じゃない。こいつは——仮初めの肉の器に押し込められているような感覚だ。レイシフトの後も、いやに霊子化の違和感が残るとは思ったが……ちつ、こいつはやりづらいぜ」

それを聞いて少し安堵するマシユ——いや、状況は全然よくないのだが、それでもサーヴァントがサーヴァントとして戦力となることがわかつて少し気を緩めてしまう。

その時。

「——あれ、空々さんは……？」

空々が見当たらなかった。

「なんだ……？ あいつ、どこに消えやがった——」

「こっちです」

空々少年の声が聞こえた。

あまり大きくなかった上にロビンの声と被ってしまいよく聞こえなかったが、それは何とかマシユの耳まで届いた。察するに、あまり離れた場所からではない——何処か、低い位置から発されたのではないかと、マシユは辺りの地面を見渡す。

すると後方の茂みの裏で寝っ転がっている空々少年を捉えた。最初は何でそんな体勢をとっているのかわからなかったが、近づくにつれてそれも明らかになる。

彼は、一人の少女を拘束していたのだった。

「——っ！——っ！」

空々の着ていた服によって塞がれた口で叫び声を上げようとして
いる彼女——珍しいことに、アルビノだった。激しく暴れているが、
空々の拘束が固いのかそれとも彼女が非力なのか、抜け出すのは難し
そうだ。少女の見た目から判断するに、年齢は空々とあまり変わらな
い——小中学生といった感じ。少年が少女を押さえつけているとだ
け書けばいかにも犯罪的だが、その絵面は寧ろ野生動物の狩りか何か
をマシユに連想させた。

「——えつと……」

マシユは絶句する。

気が動転しかけたマシユは、慌てふためきながら茂みのすぐ向こう
にいる立香達を呼ぼうと首を捻るが——

「少し落ち着いて」

と、空々に制止された。

「お、落ち着くって——」

「今から僕は君を解放する。だけど逃げ出したり、大声を上げたりは
しないほしい」

一瞬自分に言っているのかとマシユは思ったが、どうやらそれは拘
束している少女に向けての言葉であるらしかった。

「——もし逃げ出そうとしたり声を上げたりすれば、僕はもう一度君
を捕らえて首を折ろう。謂わば君達の命と僕らの秘密を天秤にかけ
た取引だ。もし自分の命が——友達の命が惜しくないのならこの取
引に応じないのも手ではあるけど、それはどちらにとつても不利益だ
と僕は思う。こちらとしても、人殺しはあまりしたくないからね」

何てことない風に言つてのける空々。

そんな彼に——マシユは戦慄した。

初めに希望を見せてから徐々に選択肢を奪つていくところとか、首
を折ることに言及する辺りで彼女の首元を触るところとか、向こうで
焚き火を囲んでいる少女達をさり気なく判断材料に巻き込んでいる
ところとか、完全な脅迫を取引と言い換えて念を押ししているところと
か、こちらが殺人を犯すこと以外にデメリットがないという風と言つ

ているところとか、情報を一気に聞かせた上で微妙に考える時間を与えるところとか——

そういうことを眉一つ動かさずにやってのけるこの少年にこそ、マシユは戦慄した。

「そ……空々、さん……?」

空々は少女の口を覆っていた布を解く。次いで腕の拘束を、絡ませていた脚を、うつ伏せの状態を——そして最後に彼女の首から手を離す。

「……………」

少女はゆつくりと立ち上がった。

そして空々の顔を見る。

「……ありがとう」

空々は、彼女に向かって礼を言った。

少女は怯えているらしく(当然か)、びくびくとしながら空々を敵意満々の眼で見ながらも、大声を出して逃げるとか、そういうことはしなかった。

「キリエライトさんは皆さんへの報告をお願いしますか? こっちはもう大丈夫だと」

「え——あ、はい……」

空々に声をかけられたことで、マシユは呆然としていた意識を取り直す。

報告——そうか。そうだ。振り返れば、立香達が怪訝そうな顔をしてこちらを見ている。

「じゃあ、行ってきますね——」

マシユは、なるべくそつと皆がいる方へ歩いていく。少女の様子が気にかかったが——『空々に逆らってはいけない』と、妙な強迫観念が今のマシユの中にできていたので、彼女から視線を背けて、マシユは皆のいる方へ来た道を戻る。

「いくつか質問していいかな。とりあえずは名前を教えてください。あ、これはただ単に何て呼べばいいのかわからないだけだから、偽名でも何でも構わないよ——」

そんな言葉が、マシユの背中に響いた。

「マシユ? どうしたの?」

「ああ……先輩……」

マシユは口を開くが、咄嗟に何を言えればいいのかわからなくなってしまい、言葉が出てこなくなる。パクパクと口を動かすが、意味のある音は鳴らず——不思議そうにマシユの眼を見つめ返す立香の視線が痛くなって、マシユは視線だけで空々の方を指し示す。

「えっと——そ、空々さんが……その、女の子を——ほ、」

マシユの台詞が最後まで言い切られることはなかった。

「——狼だ!」

鋭く響く、端的な言葉。

ロビンの声だった。

「囲まれている!? 拙い、彼女達がやられる……!」

サンソンが剣を具現化させ、焚き火の方へ飛び出す。ロビンとマタ・ハリもそれに続いた。立香はサーヴァント達を支援する為にマシユの前で振り返り、戦場を視界に入れられるポジションへと走り出す。一瞬何が起こったのかわからなかったマシユだったが、しかしそれでもすぐに状況を把握して焚き火の方へと駆け出す。

「私が彼女達を保護します!」

辺りに聞こえるよう叫ぶ。ふと、空々とあのアルビノの少女の行方が気になって、マシユは走りながら後ろを向いた。

——空々はマシユに追従していた。

少女の手を引き、彼はマシユのすぐ後ろを走っていた。

「っ!」

予想以上に近い距離にいた空々を見て仰天するマシユ——冷静になつて考えれば、狼が襲つてきているのにも関わらず、皆が固まっているあんな位置に少女を抱えながら空々が留まっているわけがないので、マシユと共に焚き火の方へ走る彼の行動は何もおかしなものではないのだが、そんなことを冷静に分析できるほど状況はのんびりとしていなかったし、それがわかつててもマシユは単純に驚いた。マシユは前を見ていなかったの、バランスを崩してよろける。

「うわっ——」

暗くて足元が見えないまま、マシユは勢いそのまま転んでしまった。

手を地面につく——接地した箇所には燃える様な感覚が走る。

「大丈夫ですか？」

空々は手を引いていた少女と共に足を止めると、倒れ込んだマシユに駆け寄って来る——なんてことはせずに、一応安否を問う声はかけるものの、マシユを追い抜いて焚き火の元へ一目散に駆け抜けていった。

少女を安全地帯に送り届けるのを優先したのだろうか——彼はスピードを緩めすらしなかった。

「はい、大丈夫です！」

とはいえこんな状況でも自分より先に少女の方を助けてあげてほしいと願うことのできるマシユである。空々の行動に文句なんて無く——心の何処かでまた少し彼に対する印象は変わったが——彼女もまたすぐに顔を上げ、身体を起こそうとする。

そこへ、猛然と迫りくる影があった。

狼。

種としてはタイリクオオカミ——かの魔獣、『狼王ロボ』の種族である。強靱な身体能力に加え、時には『狡猾』とまで評される高い知能を併せ持つ彼らと一般人が戦うには、徒手ではいささか分が悪い。

今のマシユは、ただの餌だった。

「——！」

やばい。

こちらへ突進してくる狼めがけて、マシユは寝転がったままキックを繰り返す。が、そんな攻撃は狼にとってあくびが出るほど鈍いものだったらしく、優雅にジャンプで躲される。そのまま飛び乗ってくるらしい狼を見て、咄嗟にマシユは腕で顔を守る。ギヤラハツドの力もないマシユの細腕では、ガードするどころか逆に噛み千切られそうなものだったが、背に腹は代えられない——腕に首は代えられない。というかそんな計算なんかする前に、反射的に、マシユは腕を前に出し

ていた。

咬まれる——その寸前。

跳躍して空中にいた狼の軌道が——変わった。

「……？」

マシユがそれを疑問に思う頃には、狼はマシユの左横50cmに着地していた。着地した後も、どうも狼の様子は不審で、よろりとバランスを崩したかと思えば、ぶるぶると頭を振る。そしてマシユの方を振り向くことなく、彼（彼女かもしれない）は何処か他の場所へ走り去っていった。

「……」

目の前で起きた不可解な現象が何なのかわからず、マシユは少しの間そこでぼうっとしていた——しかし今はそれを考えている場合じゃないと我に返り、ばね仕掛けの様に立ち上がる。

自らの足元に転がっていた、先ほどまではそこになかった一個の石礫にマシユが気づくことはなかった。

第三話

0

この世には不思議な事など何もないのだよ、関口君

——京極堂

1

狼達は全滅するまでその場に残ってサーヴァント達と交戦するほど馬鹿ではなかったらしく、最初に襲い掛かった三、四頭がロビンとサンソンによつて返り討ちにされた辺りで、群れのリーダーらしき狼が一声鳴くと、全ての狼は退却を始めた。少女達を保護しながら村の方へじりじりと後退する撤退戦——逃げながら、守りながらの戦いを覚悟していたサンソンだったが、ここは向こうの引き際の良さにある意味では救われた。

最高に近い勝利をものにしたサンソンは——しかし、あまり晴れやかな表情ではなかった。

動物を斬り殺したからというわけではない。それは彼に限って絶対でありえない。本職の戦士でこそないものの、純粹に人を殺した数だけを計るのなら、それこそ切り裂きジャックもビリーザキッドも、アーサー王やアツティラ王だつて彼の足元にも及ばない——伝説の処刑人、『ムツシュ・ド・パリ』のメンタルはそんなことでは揺るがない。

だからそれは過去からの不快ではなく、未来への不安だった。

「……これは」

弱体化している。

自らの戦闘能力が、明らかに弱まっていた。

サーヴァントとして召喚されるにつけて、サンソンの肉体には生前のそれに加えて幾つかの特権的な特徴が見られた。

「神秘を纏わない兵器の一切が通じない」こと、「生前より数段身体能力が優れている」こと、「気配を消して活動する技能が使える」こと、「自らの死後から二十一世紀初頭までの知識、特に歴史的な偉業を達成した人物の情報を抜け目なく得ている」こと——等。

しかし狼達を相手にして剣を振るった感覚は、サーヴァントとして召喚されてから久しく経験していない「人間」としての感覚だった。

処刑人の一族に生まれた以上、家業を継ぐ以外の選択肢はほとんどなく——自らも処刑人として働く上での必須技能の一つとして、剣術の手ほどきを受けていたサンソンは、剣があれば狼とも危なげなく戦えるが、しかし此度の黒幕は人智を超える魔神柱である。そんな強大な存在に、自らの人としての剣術一本で渡り合える自信はない。

そもそも、サンソンの剣術はあまり実戦向きではない。『正義の剣』と呼ばれるサンソンの剣は、その名の通り、死刑宣告を受けた悪人を断罪する為のものであって、相手が絶対に逃げないことを前提に振られる剣である。つまり切先が尖っていない。剣を持って戦う時の選択肢の一つである『刺突』が使えないのだ。罪人を苦しみを与えない、一切の痛みを感じさせずにあの世へ送る術をひたすらに磨き続け、ラ・バル騎士斬首の折りには騎士が立ったままでの執行にも関わらず「斬った首が落ちなかった」という伝説を残すサンソンは、斬撃の精度、練度においてはカルデアにいる名だたる剣士達の中でも最上位だろう——しかし、攻撃手段の一つを失っている状況は、やはり大きなハンデとなる。

殺すことに特化した彼は——戦うことに長けていない。

「……」

先行きは不安だ。

——しかし、このまま行くしかない。

特にこれといった救済策も無いが、サンソンは意識を切り替える。弱体化はこれ以上なく痛い、今ここであれこれと考えていても仕方がないと考え直した。

特典を持って異世界に飛ばされたと思ったら特典が無かったというレベルにはショックなできごとなのだが——サンソンはここから

立ち直る。殺人犯を殺し、強盗を殺し、国王暗殺未遂の重犯罪人を殺し、王族に反逆した思想家を殺し、王族に睨まれた思想家を殺し、王族に疎まれた思想家を殺し、敬愛していた国王と王妃を殺し、民衆に吊るしあげられた貴族を殺し、革命の指導者の敵対勢力を殺し、革命の指導者の元同志を殺し、革命の指導者を殺し、年端も行かない少女を殺し、弱者としか言いようのない老人を殺し、男を殺し、女を殺し、あらゆる身分の人間を、あらゆる役職の人間を、あらゆる人間を殺して殺して殺して殺して殺しても尚崩れなかった彼の精神は、やはり並大抵ではなかった。

奪われた戦力はあまりにも大きすぎる。だがこんなことでへこたれていては駄目だ。逆境でも何でも諦めてはいけない。そんなことじゃ英霊として失格だ――

「――やっぱり駄目でしたか」

拾った宝くじが外れだった程度の口調で空々が呟いた。

「パワーアップした分が消えています……。まあさすがにそう上手くはいきませんね。サンソンさんも同じですか？」

特に何の感慨もなさそうな表情のまま、空々はサンソンに質問する。それは本当にただの事務的な確認で――何の葛藤も、何の絶望も見当たらなかった。

「……あ、ああ」

一応は肯定する。しかし同調や共感は全くできない。

サーヴァントの能力が得られたことを、「パワーアップ」？

能力が消えたことを、「まあさすがにそう上手くはいかない」で済ましてしまうのか？

「……………」

しばし絶句するサンソン。

目の前で突っ立っている十二、十三歳ぐらいの少年に驚愕していた――否。

震撼していた。

何だ。

何だ、この子は。

この子は——一体何を考えている？

2

「空々空は一体何を考えているのか」というサンソンの疑問に対する答えは、二つある。

一つは先ほどの台詞を口にした時、『サンソンさん』という呼び方が何だか変だと思い、これからは『ミスターサンソン』、或いは『ムツシュサンソン』と呼ぼうと決めたこと。

もう一つは、「何でサンソンは自分のことを変な目で見ているのだろう」というものだった。

お互いがお互いの頭の中で何を考えているのだろうかと考えているこの図は、傍から見ればコミカルに思えたが、本人たちは至って真面目である。だが、サンソンと違い空々にはある程度サンソンの頭の中がわかった——見当がつかない過ぎて半ば思考を放棄しつつあるサンソンと違い、空々には正解に繋がるヒントが与えられていた。

今の台詞は、どうもサンソンにとっては重大な内容があったらしい

——
そんな風に察する。

そして、今現在空々達サーヴァントの身体に起きている「弱体化」という現象が、サンソンには大いに重大だったのだと気づく。

なるほど、確かに今回の特異点は空々にとっては初陣であり、サーヴァントとしての能力を得てから日が浅く、今まで実戦で使う機会がなかったために、それが失われたとしても絶対調がいつも通りに戻っただけという印象しかなかったが、サンソンは違う。彼はこれまでずっとサーヴァントの能力に頼って戦ってきたのだ。それが無くなったといわれれば、そりゃ慌てるだろう。

丸腰でジャングルに放り投げられたのと同じだ。

……空々の方もサンソンに一切共感できていなかったが、しかしこちららあちらを一応は理解していた。まるで他人事のような理解ではあるが——それでも理解は理解だ。

「でも……確かに、ここから先は慎重にいかなければいけないですね」
だから空々は内容の無い言葉を、とても深刻な顔をして言う。
弱体化を受けて絶望しているかのよう。

別にカルデアに英雄として召喚されてまで自分を取り繕う必要はないと思っている彼ではあるが、仲間内から嫌われる——遠ざけられるのは拙い。裏切られるなんてことは流石にないだろうが、生存に必要な情報を貰えなかったりする可能性が出てくる。味方から命を狙われるのには——まあ、ある意味慣れてはいるが、好き好んでそんな立場にいたくはない。先ほどあった、振り返ったマッシュが自分を見て驚いて転んだエピソードを思い出しながら空々は慎重に自分を偽る。既にバレバレであるとはわかっていない。

「メディアさんはどう感じましたか？」

ついでに他の者に話を振る。

とは言っても、メディアは戦闘にはまったく参加していなかったの
で、あまり生産性のある話が聞けるとは、空々本人も思っていなかつ
たが。

「……戦闘への影響だけで……済むとは……」

独り言の様に吐き出されたそれは、しかし意外にも空々と発想が似
ていた。

すなわち、『戦闘能力が下がった』のではなく、『戦闘能力以外の能
力は無事だった』と考えるスタイル。

破滅的なプラス思考。

そういう考えを持つ者が、自らの他にいたとは。

サンソンに妙な目で見られていたから、空々にも少し疎外感のよう
なものができあがっていたのだろうか——孤独を紛らわせるために
自らの同類を探すなんて最も空々少年らしからぬ心理なので、それだ
けでこの状況を解釈してしまうのは間違いな気もするが、しかしこれ
までのやり取り——会話の流れの中で、空々はメディアの言葉の意味
をそういう風にとった。

特に違和感を抱くこともなく——そうとってしまった。

彼女の発言から読み取れる別の意味——別の心理——『まるで彼女

が皆を弱体化させたような口ぶりだ』という方向に、空々の思考が傾くことはなかった。

「……それより、ソラカラ。あなたさつき茂みの奥で何をしていたの？」

と、今度はメディアが空々に質問する。

彼女もまた、疑わしげな眼付きで空々を見ていた。

「あれ、キリエライトさんから聞いてませんか？ 僕らの姿を女の子に見られたので、取り押さえていたんですけど」

と言いなから、そういえば狼の襲撃どころでマシユも報告どころではなかったのだなと空々は思いなおす。

「女の子？ 焚き火を囲んでいた少女達の中で、我々に気づいた者はいなかったと思うが……」

サンソンが横から更なる疑問を空々にぶつける。心なしか、その口調には僅かに疑いの念が紛れていた。

「それとは別の子でした。白い髪の少女です——見かけてませんか？ キリエライトさん達と一緒に逃げていった……」

現在この場に残っているのはサンソン、メディア、空々の三人のみ——先ほどまではロビンもいたのだが、彼は立香達を追って立ち去って行った。当然マシユも白髪の少女もここにはいない。

「白い髪の少女……」

サンソンにはそんな少女に見覚えは無かった。が、さつきは狼に集中していて逃げていく少女達など気にしていられなかった。自分が見ていないだけで、そんな子がいたのだろうか。

空々が嘘を吐いているんじゃないかと一瞬思ったが、そんなマシユ達と合流するだけですぐにばれる嘘を吐く意味も見当たらない。

「……なるほど」

鵜呑みにするわけではないが——この時点では、サンソンは空々の言葉を信じることにした。

サンソンや他のサーヴァントが気づかなかった少女に、何故彼だけが気づけたのかという疑問を持つことはなかった。

「僕は焚き火の処理をした後で、万が一逃げ遅れた子がいないか辺り

を周ってみるからまだここに残るが、メディアとソラカラはどうしますか？」

「私はこの獣をもう少し調べるわ。これらからは魔力が感じられる」「？ ただの獣ではなかったということですか？」

「ええ。詳しいことは調べないとわからないけど、おそろくはね」

サンソンはそれを聞き、やけに獣たちが強かったのを思い出して納得する。そうか、あの違和感は自分の弱体化によるものだけではなかったのか。

「——ムツシユサンソン、見回りは僕がやりましょうか？」

空々がそう申し出る。

それは空々が自分も何かやったほうがいいんじゃないだろうかと思ったが故の、彼にしては珍しく気を利かせた提案だったが、サンソンはそれに何か別の意図があるんじゃないだろうかと穿った捉え方をしてしまった。

「いや……大丈夫です。ソラカラ。君はマスター達に合流してほしい。あちらはあちらで心配だ」

ロビンとマタ・ハリがいるとはいえ、向こうは少女達を連れた大所帯だ。可能性は薄いだろうが、もしかた狼の襲撃があれば今度こそ危ない。

だから空々を送るのだ——と、自分に言い聞かせながら、サンソンは言った。

3

ラヴィニア・ウエイトリーは他の少女達やマシユ、マタ・ハリとは別のルートを通って町への帰り道を辿っていた。

狼の襲撃を受けた後に一人で夜の森を歩くのはとても怖かったが、自分を知っている他の少女達と会うのは抵抗があった。

嫌だった。

自分があの場にいたことがばれるのは——嫌だった。

あの妙な東洋人の少年と眼鏡の女の人に顔を見られているので、ラ

ヴィニアが別行動をしようが「白い髪の女の子がいない」という事實は露見してしまうのだが——その可能性に辿り着けるほど、今のラヴィニアは成熟していなかった上、冷静でもなかった。

『——少し落ち着いて』

身体を拘束され、生殺与奪の選択権を全て奪われた末に聞かされた、温度の無いあの言葉。

風邪をひいて熱が出たからといって、氷水をぶっかけて体温を戻そうとする様な、暴力的な鎮静方法。

今思い出しても背筋が凍る。

生存本能が裸に剥かれ、死にたくない——殺さないでと、哀れな叫び声を上げそうになる。

「っ……。」

嫌な汗が喉元をつたつて服にしみる。

実際のところ、ラヴィニアが皆と行動を共にしなかったのは、アビーがいたからではなく、あの少年がいたからなのかもしれない。

あいつは——怖い。

ある意味では、『自らが現在置かれている立ち位置』よりも遥かに恐れるべき対象だった。

だが——と、同時に考える。

混乱するラヴィニアの中でも微かに残っていた理性が、あの少年の「有用性」について思考する。

いや、おそらくそんな未来はほとんどない筈だが、それでも或いは——と、こんなどうしようもない状況に置かれたラヴィニアは、その可能性について考えざるを得ない。そこにはどうしたって希望的観測がついてまわってしまうが、そうだとしても、現状を打開するきっかけに——否。彼は「切り札」として使えるのではないかとラヴィニアは推測した。

彼のあの精神性は。

おそらく、この町で最も強い武器となる。

カルデア内部を貫く——純白の廊下。

ホームズはいつもとあまり変わらない表情のまま、パイプを弄びながらゆつくりとした歩調で自らのねぐらへと移動していた。

「……」

彼の頭にあるのは勿論、あの少年のこと。

ホームズにしたってダ・ヴィンチと同じく、彼の精神性——異常性は看破している。彼の真名の搜索こそ、カルデアから出ることのできないホームズの立場上調べきえることはできていないが、それでもあそこまで露骨に際立っていれば、わざわざ素性調査をすることもなく、という人間の輪郭ははつきりと見える。いくら上手く隠そうとも、ホームズを前に隠蔽は不可能だ。

「……」

そこまでわかっていながらにして、しかしホームズは何の行動も起こしてはいない。

基本的にはあまり他人に興味を持たないダ・ヴィンチでさえ、彼に対してはアプローチを仕掛けていたのだが、ホームズは徹底して彼に近づかないでいた。

それは何故か。何故ホームズは彼を探ろうとしないのか——いや、実は一度だけホームズは彼に接触したことがあった。

廊下で偶然すれ違った風を演出して、彼に声をかけた。そこで彼に対する自らの『推理』を披露し、彼に突きつけ、そしてこの施設で生活する上での制約を幾つか彼に言い渡そうとした時。

その時、ホームズの推理は崩壊した。

ばらばらに——土台からぶっ壊された。

逆上して襲い掛かってくるのなら良かった——その恐るべき冷静さで、ホームズでも見過ごした着眼点から反論してくるのでもまだましだった。

それならば、ホームズもここまでの致命傷を負うことはなかったのだから。

ホームズによつて追い詰められた彼は、冷静さを失つて逆上して行くのではなくニヤリと笑いながら反論するのでもなかつた——驚くほど静かな口調で、彼はただこう言った。

『——その台詞が貴方の口から聞けて光栄です。ホームズさん』

5

空々空という少年のことを、「いまいち英雄という感じがしない」「前以て聞いていなければサーヴァントだとわからない」などと評したマシユだったが——しかしそれは間違いだつたと思ひ直す。さきほど彼が見せたあの行動は、限られた人間にしかできないそれだつた。誰にもできない——物理的にではなく、精神的、心理的に抵抗感が生まれてしまうが故にこなすことができない偉業。力があるからできるというわけではない、勇気があるからできる英断。本当のヒーローとはああいう者のことを言うのだろう。

……そんなことを考えている自分があまりにも空々しくなつてきた辺りで、マシユは思考を一度断絶させる。なんだろう、確かにさつき彼がやったことは最適解と言つて差し支えない動きだつたのに、それが全く実感できない。

あの時ロビンやサンソンが交わしていた会話が、もしあの白髪の少女に聞かれていたとすれば、彼女をそのまま帰してしまうのは得策ではなく——口封じ……とはいかずとも、口止めを頼むのは必須だつたし、その後狼の襲撃があつてマシユが転んでしまった時も、少女をまず安全地帯に送るといふ行動は正しい。あのままあそこで空々が足を止めたとしても、マシユは「私のことは構いませんから、その子を安全な場所へ！」と叫ぶに決まっていた。その行程を飛ばしたのは、寧ろ時間が短縮されて喜ぶべきことなのだ。

それなのに、何故。

何故私は、こんなにも——

「……」

子供たちと共に森の中を歩きながら、マシユは俯いて延々と思考の

海に浸かっていた。渦潮の様にぐるぐると、海流の様に延々と流れ続ける慙愧と悔悟、自罰の念。壊れた映写機さながら、先ほどの映像が頭の中でずつと繰り返され、そのたびにマシユは傷を負う。

彼は何も悪いことをしていない。少女に怪我を負わせてもないし、見殺しにもしていない。彼は何も悪くなくて、正しくて、最良の行動をとっていて――

そんな空々が――怖い。

「――っ！」

何かの拍子に思考がずれ、そんな場所に結論を持ってきてしまう。いけないいけないと、マシユは激しく頭を振った。そんな結論は出しでは駄目だ。彼は何も悪くない。何も悪くない彼を怖がるなんて、それじゃあ私が空々さんを一方的に嫌っているようなものじゃないか。

そんなことはマシユの良識が許さなかった。

つまるところ、マシユは空々の印象が頭と心で一致していないのだ。持つべき筈の感情と、実際に持っている感情が食い違う。これが悪人やどこにでもいる普通の脆弱な一般人ならば、頭で考えた理論を忘れて、自身の直感を優先して相手への印象を決める。相手が正しかろうが尊かろうが関係なく、人は人を嫌う。それができないマシユは、だから模範とされるべき善人であり、矛盾しない強固な芯を持つ者なのだが――この場合は、そうであることがマイナスに働いてしまっていた。

強さが弱さへと転じていた。

自らに生まれた矛盾を上手く解消できず、戸惑っている。

どれだけの理論で押しとどめようとも、濁流のようにあふれ出る理屈以外の感情に、マシユは未だかつて出会ったことがなかった。

「……」

「どうしたの、マシユ」

名前を呼ばれて顔を上げる――そこには怪訝な表情でこちらの顔を覗き込む立香の姿があった。

「……いえ」

別に何でもないです――と、マシユは答える。

「……本当に？」

立香はいまいち納得していないようで、更にもう一度マシユに念を押ししてきた。マシユは笑顔を作り、「はい。大丈夫です」と、朗らかに――それでいてきつぱりと、立香の質問を跳ね返す。

「なら、いいけど――」

あまり納得はしていなさそうだったが、それでも立香はそこでマシユへの追求を止めてくれた。気を遣ったのとは少し違うだろうが、何にせよ、マシユはほっと安堵する。

白髪の少女の不在には未だ気づかない。

「――」

ふと、先頭を歩いていたマタ・ハリがマシユの方を振り向いた。一瞬ドキリとしたマシユだったが、しかしマタ・ハリはマシユではなく、更にその後ろに視線を向けている。

振り返った直後は体中に緊張を走らせていたが、しかしすぐに彼女は臨戦態勢を解く。

「よおつと。悪いなマスター、少し遅れた」

マシユの背後から現れたロビンは、かぶっていたマントを取りながら立香の肩にポンと手を置く。

「お帰りロビン。他の皆は？」

「サンソン達は焚き火の片付けやら何やらをやつて、こつちに合流するのはもうちょっとかかる。俺だけ先に来たのは、マスター側の戦闘要員が心もとないと思ったからだ」

「あら、私は戦闘要員には数えてくれないのかしら？」

マタ・ハリが軽口を気取って言う。

「本来なら頭数に入れるところだが――この状況じゃあ、な」

「ふうん？」

『サーヴァントが弱体化している』という含みを持った言葉に、マタ・ハリは曖昧に頷く。

まあ、仮にマタ・ハリが満足な戦闘能力を持っていても戦闘要員が一人という状況はやはりリスクだ。他のサーヴァントとの戦闘や、先ほどの狼の様な襲撃者が来た場合、この場にいる全員を彼女一人で

守り切るのは困難だろう。それはマタ・ハリもわかっていて、特に深く追求することはなかった。

「……あの、」

ふと、先ほど「アビー」と呼ばれていた少女が立香におずおずと声をかけた。立香はくるりと彼女の方に向き直る——すると少女は「ありがとうございます」と、素直な人間性が溢れ出る仕草で礼を言う。「おかげで森の獣から逃げられました。皆さんは、私たちの命の恩人よ?」

「どういたしましたよ。怪我が無くてよかったですよ」

立香はいつもと同じ人懐っこい笑顔で言う。

「俺は藤丸立香。君は?」

「はい。私は、アビゲイル。このセイレムで暮らしているの」

アビゲイル。

その名が指し示す意味は明白で、彼女の名前を聞いた瞬間から彼女はこのセイレムにおける最重要人物としてマークするべきだったのだが、この時不思議なことに、マシユもロビンもマタ・ハリも、そして立香も彼女の名前を気に留めることはなかった。

「皆さんはいつたい……? 船乗りでも、物売りでもないみたいだし

……。この村には巡礼者や旅の方はめったに——それに、とても不思議な格好だわ」

これは予想出来ていた質問だったので、マシユはよどみなく用意していた答えをアビゲイルに出す。

「私たちは旅の劇団です。座長はこちら——まだお若いですが。セイレムに行く途中道に迷ってしまって、森に入り込んでしまいました」
ついでに、自分たちが森の中にいた理由も言ってしまう。別行動中のサーヴァントとも予め示し合わせておいた言い訳なので、彼らが問い詰められたとしても矛盾は起きない。

もともと、アビゲイルは『劇団』という単語に反応して後の方はあまり耳に入っていないようなので、そこらへんの話は適当なことを言ったところでぼろは出なかっただろうが。

「劇団? わあ、わああ……! でしたら、わざわざボストンから来て

くれたの？　なんて素敵なの！　本当の職人のお芝居なんてはじめて！　みんなとっても喜ぶわ！」

少女の喜ぶ姿は微笑ましく、こちらまで嬉しくなってくるようだったが、何せ嘘をついているので、マシユの心はチクリと痛んだ。

「……ところで今日は何日だっけ？　アビゲイル？」

我がマスターに隠蔽工作その他の才能は全く無いらしく、立香はドストレートに日付を聞いた。一瞬焦るサーヴァント達だったが、アビゲイルはそこにあまり疑問を持たなかったようで、親切にも日付のみならず西暦まで教えてくれた。

それによると、本日は1692年4月21日。昨日が安息日だったということ、アビゲイルの記憶を疑う必要も無さそうである。

しかし、1692年。

半ば予想出来ていたことだったが、よりによつてこの年かとマシユは心の中で嘆く。やはり今回の難関は狂気の魔女裁判で間違いないらしい。

「——アビゲイル。その方々は？」

マシユがこれからどう動こうか考え始めて、周囲の警戒に意識をまわし損ねた時、狙いすましたかのようなタイミングでこちらに声をかけてくる影が現れた。

「伯父様」

アビゲイルが彼をそう呼んだ後も、ロビンとマタ・ハリの警戒は緩まなかった。相手に気取られない程度ではあるが、彼らはいつでも戦闘に移れる体勢で待機する。

「子供たちばかり連れ立って、真夜中に家を抜け出して、森で何をしていたのか——それはあとで尋ねよう」

それはとても理性的な所作の男性だった。おでこが広いが、決して歳を重ねている風には見えない——ここはアメリカ大陸だが、全体的なイメージは英国紳士を想起させる。そんな男性の前で、アビゲイルはしおらしく俯き、「はい……」と弱弱しく返事をした。

「伯父様、この方々は——」

第四話

0

賢い人は木の葉をどこへ隠す？ そう、森の中だ。森がない時は自分で森をつくる。一枚の枯れ葉を隠したいと願う者は、枯れ葉の林をこしらえあげるだろう。死体を隠したいと思う者は、死体の山をこしらえてそれを隠すだろう。

――ブラウ

ン神父

1

セイレムでの生活もようやく一日目の朝を迎えようとしていた。今まで見ていた夢とこれからの現実、そんな曖昧なことに何となくの区別をつけながら立香はぼんやりと目を覚ました。

まず濃い茶色をした時代錯誤な木製の天井が見える。次いで横に目を向けてみるが、そこには誰もいない。サーヴァント達は、もうとつくの昔に起き出しているらしい。

「起きます」なんて言葉は吐かずに、黙って白い毛布を剥ぐ。靴を履かなくてはいけないことを思い出し、自分が寝ていた位置の反対側に置いておいた自分の靴と、代えの靴下を拾い上げる。そうしてまた毛布の上をごろりと往復。往復せずに、靴の置いてあった側で履いてしまえばいいんじゃないかと気づいたのは、靴紐を結び終わった後だった。

すぐ階下に降りようかとも思ったが、ちらりと映った窓の外で何かが動いたような気がしたのでそちらに近寄る。そこから見えるのはこの家の庭。昨夜は暗くて何も見えなかったが、庭には一軒の小屋が建っていた。その小屋の手前でアビゲイルともう一人、大きな桶を持った女性がにこやかに立ち話をしていた。

肌が黒いので黒人だろう。ということとは使用人か——或いは奴隷だろうか。昨日会ったカーター氏と、頭の中にある『奴隷を酷使する悪い白人』のイメージが一致せず、少し奇妙な感覚に囚われる。

『——アア？　ンなのはわかってんよ。だがそれは、今のこの時代ではそうなってる、ってだけだろオ？　だが、俺はそれが良しとされる時代に生きて、今でもその価値観に基づいて動いてるってだけだ。だいたい、ギリシヤ人もローマ人もアラブ人も。つまりは、お前らんトコにいる名高い英霊達も！　生前は澄まし顔で奴隷を使つてたに決まってるだぜ！？　ローマ皇帝もファラオもその筆頭だろうが！

『今の世はそうなのか、じゃああえて肯定して使うのは止めておこう』——と考える英霊と。『今の世はそうなのか、でも便利で価値あるものなのが変わらないから続けよう』——と考える英霊。そこにどんな差がある？　誰が善悪を計る？　だって俺は最初から、自然に、それが当たり前なんだぜ？』

史上最大の開拓者の言葉が立香の頭の中で響く。あの男は立香の持ち得る反論を奪っていった。

勿論あの男に何を言われても、奴隷制を唾棄すべき悪だと思ふ気持ちは揺らがない。立香の優しさがそうさせるのか、それとも現代日本の義務教育を受けたが故の考え方なのかはわからないが、しかしそこは、そこだけは譲れない。

難しい話はわからない。善悪なんて本当は無いのかもしれない。あの男の時代は「それが当たり前」だったのも本当だろう。

でも、それは誰かの笑顔を奪っていい理由にはならない。それが彼に振りかざした、立香の精いっぱい反旗だった。

そんな立香の言葉も、彼には何も響いていかなかったようだが——しかし、彼が今の考えに理解を示すまで絶対に諦めない。

諦めないことが肝心だと教えてくれたのは、他ならぬ彼自身なのでから——

「マスター」
と。

窓の外の景色を眺めていた立香の背中に声がかかった。

「空々君……」

「おはようございます」

朝の挨拶をしてきた空々に対し、立香も挨拶を返す。朝食の時間になったので呼びに来たとのことだ。そんな風に話す彼は相変わらずの調子で、相変わらずの空々空だった。こんな場所に来て、彼は彼のままであり続けるらしい。

ふと、空々なら奴隷制をどのように考えているのだろうかと思いつた。現代を生きた彼ならば立香と同じような意見を言うだろうか――或いは逆に、現代において英雄と呼ばれるような存在だからこそ、奴隷制の様な『非人道的』と言われるものも何の躊躇いもなく肯定してしまうのだろうか。

……しかし実際に質問するのは憚られた。

というか、彼の答えは聞かない方がいいと思った。

彼の口から奴隷制を容認する意見が出た時、立香は、自分が容易くその主張に乗ってしまうような気がしたのだ。

彼がそんな子供のようなことを言う筈がないとはわかっているのだが。

多分だが、特に面白みもなく当たり障りもない無難な否定意見を、彼は表情を変えることもなく述べるのだろう。空々は未だ立香に心を許していない。本心で何を思っていたとしても、それを口にすることはない――ああいや、違う。

同じなんだ。

「それはいけないことだと思う」とか「それはあつてはならない悪だと思う」とか、そんなことしか言わないんだ。

彼はそういう人間なのだろう。

だって彼は、本当は――

「どうしました?」

空々の言葉で立香は思考世界から現実に戻される。どうやら随分長い間ぼーっとしていたらしい。彼は怪訝そうにこちらを見ていた。

「――ううん、ごめん。何でもないよ」

適当に誤魔化し、支度をするから先に降りていと空々に言う。彼は「はい」と頷くと、後ろ手でドアを閉めながら部屋から出ていった。

2

食堂の真ん中に置かれているテーブルの上には既にパンとミルクが置かれて、立香と空々を除くカルデアのメンバーが勢ぞろいしていたが、誰もまだ料理に手をつけていなかった。

「先輩、おはようございます」

一番入口に近い位置——お誕生日席の対面とでも言うべき位置に座って各員にミルクをまわしていたマシユが、上半身だけ振り向いて立香に挨拶をしてくる。次いで入口に近い位置にいるのが空々で、その向かいがメディア。メディアの隣がマタ・ハリ、彼女の向かいがロビン、その隣がサンソンで、その向かいが空席。そこが現代日本でいう上座にあたる席なのは偶然だろうか。

「おはよう。皆よく眠れた？」

「ぐっすりとはいきませんが、休息としては十分です」

マシユはそう言った——メディアもマタ・ハリもすっきりとした顔をしていた。サンソンとロビンもまた然り。

空々も普通の表情をしていた。

「それよか早く飯にしましょーや」

立香も椅子に座り、皆で『いただきます』と手を合わせる——なんてことはせずに、ここはキリスト教式で神に祈りを捧げた。音頭を取るのにはマタ・ハリである。

何となく、紅の豚のワンシーンを思い出した。

ホームアローンのワンシーンも思い出した。

料理の味は上々だった（さつき見かけた召使いが作ったらしい）。昨日の夜、歩きどおしで疲れていたので立香はミルクも含めて全て完食した。空腹は最高のスパイスとはよく言ったものである。サーヴァント達の中にも、出された料理を残す者はいなかった。

食後、マシユとマタ・ハリが自然に皿洗いを始めたので立香もそれ

に加わる———とか引き受ける。寝坊した罪滅ぼしのつもりだったので一人でやろうとしたのだが、マシユは頑なに台所から立ち去ろうとしなかった。

「一緒にやらせてください、先輩」

献身な彼女の申し出は断り辛く、結局は二人がかりで洗いモノを片付ける。その間、サーヴァント達は二階に戻って各々の準備を整えていた。

準備と言っても大体のことは既に終えているので、実際はロビンが持ち込んだ櫛の実を磨り潰して粉にする作業をしていて、他の者はそれを眺めているだけだった。男部屋だが、マタ・ハリもメディアもいる。準備の支度というよりは、本日の打ち合わせをするのが主な目的だ。

「——座長の方針を聞いてからでないとは本来意味は無いのだけれど、今日やるべきことは決まっているわ。この町の探索——情報収集ね」
マタ・ハリがまず本日の目標を定めることを言う。『情報収集』という大目標に異を唱える者はおらず、皆は黙ってそれを肯定した。

「ならばひと塊になって動くのではなく、散開して別々に行動するのが良いだろう。その方が効率的だ」

そう提案したのはサンソンだった。彼は右手に櫛の種が入った袋を持って、時折それをロビンの手元に置かれた播鉢に零している。毒薬の調合を手伝っていた。

「敵陣のど真ん中で一人は危険じゃねえか？　せめて二人以上で行動するべきだ———ああ、それじゃ多すぎる。もつと柔らかく手首を振れないもんかねえ」

「仕方ないだろう、こういう手法には慣れてないんだ」

『多すぎる』というのは人数のことではなく、サンソンが一度に零した種子の量を言っているらしい。

「二人ですか……すると組み分けはどうしますか？」

空々が誰ともなく呟いた質問を拾ったのはメディアだった。

もつとも、それが答えと言えるかは微妙だが。

「私は家に残りたいわ。この家の住人が少し気になるの」

「それはカーター氏かい？」

「ええ……それ以外にも、あの黒人の召使い——ティテユバといったかしら、彼女が私の懸案事項よ。」

「そうか。じゃあメディアは家に残って——」
「いえ」

サンソンの言葉を遮ったのは、空々だった。

「メディアさんは探索に出てもらいたいです」

「……あら、何故？」

少し気温が下がった気がした。

「探索というか、この屋敷以外の拠点を作ってはもらえませんか？
人目に触れることのない——そうですね、例えば森の中なんか」

「どうしてかしら」

皆の注目が空々に集まる。

「今、メディアさんがこの家の住人が怪しいと仰いましたが、実は僕も同感です。この家の住人はどこかおかしい。皆さんはどうですか？」

「——ええ」

サーヴァント達は視線を交換し合い、一瞬のタイムラグの後、マタ・ハリがこくりと頷く。

「具体的な言葉にはできないけれど、違和感はあるわ。そこにおいては貴方にも、メディアにも同意できる」

それを受けて、空々は説明を続ける。

「この屋敷は安全とは言えません。すぐに移動するのは不自然ですが、この家の外部にも安全地帯を作っておくべきです」

ここは敵の根城かもしれない。

確かにそれは、空々以外のサーヴァント達も懸念していた事態ではある。

何となく——根拠があるわけではないが直感的に、この家には『何か』があると確信している。

空々の提案は、その『何か』こそが敵であった場合、敵の根城であるこの屋敷以外のセーフポイントがないのは危険だから、別の場所にも拠点として使える場所が必要である——というものだ。

筋は通っている。金言と言ってよかった。サーヴァント達は自分の勘を信じる者が多い。その勘に則った策ならば否定する理由はない。

無いのだが――

「……そうか、確かにな。もしカーターあたりが魔神柱だったとかいう展開が来た日にやあ、俺達はドアウエーで戦うことになる。戦いだけじゃねえ。日々の活動すら、向こうに主導権が握られちまう。それは何としても避けたいところだ――だが」

だが、問題はそれを提案したのが空々で実行するのがメディアであるという点だ。

「だが、魔女様だけじゃテント張ったり洞穴見つけたりできねえっしょ。森の隠れ家を作るなら俺もついて行く方がいいだろう」

ロビンが手伝いを申し出る。

「そう。じゃあロビンとメディアでペアを組んで拠点作成をお願いしますわ。クウは探索組に入ってくれるかしら？　できれば私とペアを組んでくれると嬉しいのだけれど」

「――はい。ではお願いします」

マタ・ハリが空々にコンビ結成を申し込み、空々もそれを許諾する。

「では僕はマシユとマスターに付いて行こう。マスターに一人もサーヴァントが付いていないのは、やはり危険だからね」

サンソンは立香に追従することに決めた。

「ちよつと、私は外の拠点づくりをやるとは一言も――」

「この家の住人を観察するたって、昼間はほとんど無理なんじゃねえの？　カーターは出かけるか、書斎に籠るかだろうし。客人として動くなら尚更だ」

「それは……そうだけれど……」

メディアは未だ菌痒そうな表情をしていたが、ロビン達に対抗できる反論がとうとう浮かばなかったようで、

「……わかったわ。確かに、外に陣を張るのも有効な策ではある」

と、折れてくれた。

「じゃあマスターの了承を得に行きましょう。そろそろ後片付けも終

わった頃じゃないかしら」

そう言つてマタ・ハリが立ち上がろうとした時、部屋の扉がガチャリと開いた。

「お待たせ皆」

ドアノブを握つて開けたのは立香で、その後ろからマシユも顔を覗かせる。手の水気は取れていたが袖口が僅かに濡れていた。

「ああマスター。今ちようど今日の方針を決めていたところで——」

3

海へと続く、町はずれの平原。

少し前を歩くサンソンの背中を追いながら、マシユは隣の立香に話しかけた。

「先輩」

「ん？」

短い髪を揺らしながらこちらに顔を向けてくる立香は、ここが敵地のど真ん中であることなど知らないような平常通りの笑顔だった。

勿論セイレムが危険地帯であることはわかっているのだろう。だがそれを感ぜさせない空気——雰囲気、立香という人物は身にとつている。

常に周りを明るく照らす、太陽の様なマスター——というわけでは決していないのだが。

立香自身が輝いているというよりは、光を跳ね返しているという感じ。ならば太陽よりも月の方が似合っているのかと考えるが、それもまた微妙だ。かの神聖なる静寂と狂気の大地からは庶民的な立香を連想しづらい。無論、一抹の寂しさ——哀愁の様なものを感じる時はあるのだけれど、それはあくまで側面でしかなく……、鬼神の様に怒る時があれば、聖母の様に慈愛に満ちる時もある、一見して矛盾の起る現象を全て内包していて、しかしそれによる不快感も芽生えない不思議な人間性。

敢えて星に例えるとするならば、そう——

——地球だろうか。

「あの……私の思い過ぎかもしれませんが」

この人を守らなくてはいけない。

そんな思いに、自然と駆られる。

マシユはレイシフト前よりダ・ヴィンチが指摘していた不安要素を立香に報告する。

「メディアさんのことなのですが……」

すると今まで少し前を歩いていたサンソンがこちらを振り返る。メディアの名前に反応したらしかった。

「君も気づいていたのか」

君も、ということとはサンソンも今のメディアに不自然な感じを覚えたのだろうか。いや、『気づいていた』という言葉の裏にはそんな漠然とした違和感ではなく、もつと具体的な——マシユが辿り着けていない何かに、彼はまさしく『気づいた』のだろう。それはつまりサンソンは（少なくともマシユより）深くメディアの謎に踏み込んでいることになる。ならば自分からではなく、彼の口から説明してもらった方がいいのでは？

「いえ、明白に『気づいた』とまで言える場所に私はいないのですが……」

メディアに対して何らかの違和感、あるいはそれよりももつと確かなものを感じている者同士にしか通じないであろう言葉の濁し方で以てマシユはサンソンに答える。頼む様な視線と共に言外に置いたのは『わかっていることを教えてほしい』というお願いだが、それを受け取るには卓越した空気の読解力が必要とされるレベルにまで薄められたメッセージなので、サンソンに伝わるかどうかは（自分で出しておいてなんだが）自信がなかった。

「——そうか。彼女の言動に違和感を感じる——ぐらいかな？」

『違和感を感じる』という言い回しにこそ違和感を感じるのだが、いちいち突っ込むことでもないかな、と指摘するのを堪える。そもそもサンソンはフランス人——それも、フランス革命時代の人間だ。立香がいる手前、自然と日本語で物事を考える癖がついてしまっているマ

シユにとっては奇妙に思えるだけのことなのだろう。

マシユは気にしないことにした。

「はい。サンソンさんはどう思いますか？」

するとサンソンは渋い顔をして腕を組む。顔立ちの整った長身のフランス人には、これ以上なく様になるポーズだった。

「……彼女は偽物かもしれない」

彼の口からぼろりと出た言葉は、マシユにとっては衝撃的だった——が、その一方で納得してしまうような、パズルのピースがカチリと嵌まったような奇妙な感覚があった。マシユの無意識下ではそんな予想がたてられていたからなのだろうか。

ただ立香は本当に驚いたようので、

「ええ!?」と素っ頓狂な声をあげた。

「メディアが偽物？ 何で」

「……決定的な証拠はありません。ですが、少なくとも僕はそう断言します。彼女はメディアじゃない」

あんぐりと口を開けている立香。いつも通りの先輩だと、少し呆れながらもマシユはそれを見て安心する。

メディアはともかく、立香におかしなところはない。出発前の心配は杞憂だったのだ——

『——いかなる状況においても、藤丸立香は藤丸立香であり続ける』
心の中の暗雲を吹き飛ばす風に紛れて、そんな言葉が聞こえた気がした。

言うまでもなく、それはダ・ヴィンチの言葉だった——何気なく発された、彼女の視点に依るちよつとした立香の考察。別に気にするほどのことではないし、彼女自身も忘れてくれと言っていた、ただの戯言。

「じゃあ、彼女は誰なの？」

「現状ではわかりません。ただ一つ言えることは、彼女がもし僕達に害を為そうと思えば、これまでいくらでもその機会があった——ということです」

「……つまり、彼女は敵ではないってこと？」

「断言はできませんが」

サンソンの応答を受けて、立香は難しい顔をしながら腕を組み、ふーんと唸る。

「彼女は今、ロビンと一緒にいるんだよね」

「はい——朝話した通りです。万が一の為に、第二の拠点を作っておこうということで。大丈夫、ロビンなら万が一のことがあっても対処できるでしょう」

サンソンは心配そうな顔になったマシユの方を向いて言った。

だが、寧ろマシユの抱える不安の雲は先ほどより大きくなった気がした。

「マスターもマシユも、彼女の動きには注視しておいてください。彼女が『偽物』であるということは、サーヴァントの間では満場一致です」

立香は黙ったまま何も言わなかった。

——メデイアが偽物？

そう言われてみれば確かに昨日のメデイアには違和感があった。具体的にどこが変なんだと問われてしまうと困るが、それでも何とていうか、漠然とした雰囲気の様なものが出ていたのは、今になって振り返ると見えてくる。

だが——そうなると深刻な事態に直面してしまう。

「サンソン……」

まずい。

「彼女は、いつから『偽物』だった？」

サンソンは反射的に口を開き、そこで初めてことの重大さに気づいたかのように硬直すると、次いであきつぱなしになっていた口をまたつぐむ。

そうだ、こちらにやってきてから誰かと入れ替わったのならまだしも、もし彼女がカルデアに居た時から偽物だとするのなら——

「かなり拙い事態ですね」

カルデア内部が、危険地帯に変わる。

「……彼女には、本当に敵意が無いのかな」

念を押して立香がサンソンに聞く。サンソンはさきほどより幾分自信なさげに「おそらくは」と答えた。

「……あの、もし本当にそうなら、一度彼女と話し合ってみた方がいいのでは」

マシユが提案する。

ロビンやサンソン、マタ・ハリや空々は、敢えて黙って彼女を泳がせているのだろう。現状、明確にこちらと敵対しているわけではない彼女なので、それは一つの選択として正しいのだろうが、しかし何かが起こるより前にこちらが先手を打つ方がいいのではないだろうか。そんな考えからの提案だった。

「先輩はどう思いますか？」

話を振られた立香は、しかしマシユの方を一瞥することもなく目線を足元に落として顎に手で触れたまま沈黙する。何かを考えているのだということはその様子から見て取れたが、そうやって考えた後いったいどんな結論に達するのか、マシユには全くわからなかった。

「……メディアは今、森の方にいるんだよね」

「ええ。村の南西に使えそうな地形があったと、ロビンが連れて行ったので」

「……」

じゃあ、行こう。

今にも立香が口を開き、そんなことを言おうとした時、その視線が正面から右方に揺れ動いた。

その眼の動きに「泳いでいる」という表現は似合わず——もつとはつきり、何かを「追っている」ような感じ。

「あれは」

マシユは振り向く。サンソンも後方に視線を遣った。

「……アビゲイル？」

かなり距離があるので、マシユにはほぼ点にしか見えないが、雰囲気というか背丈というか歩き方というか、確かにカーター家の少女に見えた。

あちらはこちらに全く気づいていないようだ。

「どうします？　声をかけますか？」

「……」

立香は少しの間沈黙し、そこで急にマシユの方に向き直ると、「マシユ、行つてくれない？」と頼み込んだ。

「行くつて……メディアさんのところにですか？」

「いや、アビゲイルのところに。情報収集が今日の目的でしょ。俺はメディアの方に行くから」

「それだと僕がどちらか片方にしかついていけない。単独行動は危険です」

サンソンの言葉に「ああそっか……」と頭に手をやる立香。それを受けて今度はマシユが口を開く。

「——昼間の内なら大丈夫だと思います。サンソンさんは先輩についていってもらえないでしょうか」

……確かに、海際で見渡しのいいこの場所なら、魔物や敵の脅威が現れる心配も薄いか……町との距離だって200メートルもない。

瞬間的に辺りを見回して、一応ここは安全であるとの判断を下したサンソンは——しかしそれでも苦々しく「……何か危険が迫ればすぐに逃げてください——町に向かって真つすぐに。港の方にはマタ・ハリとソラカラが行っているのです、そちらの方向に」と、非常事態の対応をマシユに教える。決して素人ではないマシユは、そんなこと言われなくともわかっていている筈だが、それでも言っておかなければ気が済まなかったのだろう。マシユは素直に「わかりました」と答えた。

「ではまた、屋敷で会いましょう」

4

「情報収集といつても、まさか『魔神柱はどこにいるか知りませんか？』なんて聞いてまわるわけにもいかないですね。具体的にはどうしましょうか」

町の中心から一本道を外れた場所。

隣を歩く空々からでたそんな質問に、マタ・ハリはにこりと微笑ん

で答える。

「そうね。私たちは今、自分たちが知りたい情報が何なのかさえもわかっていない状態ですもの。こういう零からの出発は私もあまり経験したことがないから、それほど頼りにしてほしくはないのだけれど」と前置きしてから、

「クウ、貴方RPGってやったことあるかしら？」と空々に尋ねた。

空々はキョトンとした顔になり、「テレビゲームですか？ 一応やったことはありますけど、でもあまり得意ではないです」と言う。

「そうか、時代も時代ね。二十一世紀では遊戯(ゲーム)も電子空間でやるのが普通になるのね。いえ、違うのよ。そうじゃなくて——日本じゃあTRPGっていうのかしら？ テーブルの上で、参加者間の会話を主体に進めていくゲームのことなのだけれど」

「テーブル？」

ゲームというのは画面の前でやるものではないのかとでも言いたげな、怪訝な顔つきをしている空々を見て、これは挙げる例を間違えたかなとマタ・ハりは軽く後悔しつつも、笑顔は失わずに説明を続ける。

「ええ。そうは言っても私も生前からやってるわけじゃないから、そこは何とも言えないのだけれど……。最近、カルデアでこつそり流り行ってるのよ。サーヴァントと職員が数人集まって遊んでるの。そうだ、よかつたらクウも一緒にやらない？」

「……生きて帰れたら」

曖昧に頷く空々。

「——ダンジョンを攻略したり、怪物を倒したり、或いは閉じ込められた部屋から脱出したりする『シナリオ』が用意されていて、プレイヤーはそのシナリオに登場するキャラクターとしてシナリオクリアを目指す。ゲームマスターという管理者の進行に沿ってね。それで——まあ種類にもよるんだけど、ゲームの序盤には大体『これがどういうシナリオなのか』『敵は誰で、クリア条件は何なのか』を探るのがセオリーなの。今の私たちの状況に似ていると思わない？」

敵は誰で、どこに居るのか。

自分達は何をすればいいのか。

まさに、カルデア陣営はそれが知りたかった。

「こういう時、普通は『いつもと違うこと』を探せばいいのよ。或いは聞けばいいの。変わり映えしないこの町にも、何かがきつと起こっている筈だから」

「……なるほど」

今度の領きは曖昧ではなかった。

「外からきた私たちからすれば、この町は全てが異常に見えてしまうのだけれど——でも、必ず何かがある筈。決定的な何か、何処かに」

「……」

——と。

二人は歩き続けるにつれて段々近づいてきた角を折れ、右に曲がる。路地に入った形だった。少し歩調を速め、また一番近い角を曲がる。そこでマタ・ハりは止まり、反対に空々は駆け出した。数十秒が経ち、砂漠のような静寂にノイズが混じり始める。ザツザツという足音。建物の影に身を寄せ、マタ・ハりは全神経を集中させて音の主の位置を測る。

来た。

「——」

姿を見せたのは少女だった。アビゲイルと同じくらい——だが、この子はあの快活そうな少女とは対照的な雰囲気身をまとっている。一言で言うなら——病弱。色素を持たないアルビノだった。人とは思えない幻想的な風貌のその少女は、しかしとても人間らしい驚愕の表情をマタ・ハリに見せている。とうとう万引きがばれた優等生のような、衝撃九割絶望一割の顔。身体が硬直していて、咄嗟に言葉も出ないようだった。

マタ・ハりは笑顔で話しかける。

「こんにちは」

「……」

返事はない。合っていた視線さえ外れてしまった。眼球が動かせるようになった程度には衝撃から立ち直ったか。俯き加減に後ろを

——つまりは退路に目を遣る少女だったが、そちらからは空々が回り込んできていた。その東洋人の少年を目にした時、「あ」と少女の口から声が出る。おや、とマタ・ハリは抜け目なくそのリアクションを拾い取った。一瞬の声。意味のある言葉にすらなっていないが、そこには絶望と恐怖の色ではなく——勿論そういった感情が大部分を占めていたが——その音階からは意外なことに、僅かながらある種の安堵感が垣間見えた。

目当ては空々だったのだろうか。

彼女の所作を更に注意深く観察しながら、そんな推測を組み立てるマタ・ハリ。

少女は空々とマタ・ハリの足元を交互に見ていた。

「昨日の子だ」

空々が短く言った。それを受けて、マタ・ハリはこの子が昨晚空々に助けられた(殺されかけた)アルビノの少女であることを確信する。「あの後は大丈夫だった？ 僕が追いついた時には、皆解散してしまっていたみたいだけれど」

「……？」

少女の視線がおずおずと空々の目の高さまで持ち上がり——すぐにまた足元に落ちる。口が開きかかったが、またすぐに閉じてしまった。ひどく怯えているのか、元々内気な性格なのか、もしくはその両方か。こんな路地で囲んだのは逆効果だったかなとマタ・ハリは思った。

「僕らに何か用かな」

沈黙を答えと受け取ったらしい空々は、次なる質問を彼女にぶつける。少女は、今度はマタ・ハリの方にちらりと視線を遣り、次いで空々の方を向くと、とても小さな声でぼそぼそと何か言葉を発したが、マタ・ハリには彼女が年相応の可愛らしい声をしていることしかわからなかった。

少女はどちらかというとき空々に向かって喋っている。空々なら聞き取れたかもしれないが、彼も黙ったままだった。少女が放った言葉を指し示す推理材料は皆無である。

「……」

空々は動かない。何かをするでもなく、黙って少女を見つめている。どうしたんだろう。沈黙が続いていくにつれて、次第にマタ・ハリの疑念は深まっていった。何か会話があったのだろうか？ 少女が何かを言っていた風には見えたのだが……、ならば何故空々は何も答えない？

「——わかった」

いよいよマタ・ハリが口を開いて何か喋ろうとした時、マタ・ハリの心を読んだのではないかと思われるほどドンピシャのタイムニングで空々が言った。すんでのところで口を閉じさせられたマタ・ハリの機嫌は僅かに曇ったが、それを表に出す彼女でもない。あくまでも冷静に——空々が何を了承したのか理解する為に、少女のその後の言動に注視する。

マタ・ハリが見たところ、少女は空々の応答に驚いているようだった。彼女の表情に恐怖の色があるかどうか丹念に確認してみるが、それに準ずる類いの感情は見えない。単純に仰天しているらしい。しかし一体何に驚いているのだろうか。空々に向かって無理な注文でもしたのだろうか？ その条件を意外にも空々がすんなり呑んでしまったが故の驚きか。

それ以外に順当な予想を思いつけなかったマタ・ハリは、とりあえずその路線で思考を辿っていくことにする。

——この時、マタ・ハリは空々のことをほとんど敵同然——或いは重要参考人の如く扱っていて、最早彼の肩書が何なのかなんて全く頭になかったのだが、しかしそれは非常に惜しいミスだった。もしも彼が一体どういう存在なのか、かつてどういう存在だったのかわかっていれば——いや、それでも答えには辿り着けない。

空々空は『英雄』である。

為した功績だけで——結果のみで偉大さを決めるとすれば、それこそギリシヤに名だたる半神の戦士達や円卓の騎士、果ては黄金の英雄王さえ凌ぐ恐るべき大英雄。それが空々空という少年だった。

ヒーローが了承すべき——うんと頷いて然るべき歎願は、いつ

だって同じ。

「助けてください」

少女の心の悲鳴を、英雄はしかと聞き届けた。

5

一口に『森』と言ってもそれは極めて広大であり、ロビンとメデイアを探すのは一見して不可能に思えたが、出発前に大まかな拠点づくりの位置をロビンが教えてくれたので、それを指標として搜索すればあまり苦勞せずには彼らを見つけられるだろう——というのが立香とサンソンの見解だった。

「ロビンは今朝の時点で既にこの町の周辺を見回っていましたから、その時の記憶の中で拠点をつくる座標の大方の目星はつけていたのでしょう」

サンソンの言うことは当たっていると立香も思う。それにしても、サーヴァント達がそうやって動いていた時間に惰眠を貪っていたことがひどく悔やまれる。これではただの嫌な主ではないかと自己嫌悪に陥るが、「休息も立派なマスターの仕事ですよ」というサンソンの言葉に救われる。

「我々はサーヴァントですから、魔力の供給さえあれば睡眠も食事も必要ありません。もともと、今の状況は例外ですが……」

台詞が終わるに連れて顔を曇らせるサンソン。

「サーヴァントは食べなくても大丈夫って、あんまり実感ないな。カルデアじゃあ普通に皆ご飯食べてたし」

「食料問題はあまりありませんでしたからね。食べるという行為は精神の安定を保つ意味でも重要ですので、あれは英断だったと言えるでしょう」

食は精神の安定にも重要。へえ、そうなのかと立香は頷きながら目の前の茂みを手に持っている木の枝で払いのける。なるべく開けた場所を歩くよう心掛けてはいるのだが、森に道などある筈も無く（あるとすればそれは高い確率で獣道だ）、どうしてもこういう場所を通

ることになる時がある。当然視界は最悪で、人探しなどできそうにもない悪条件がそろっていたが、別段ロビン達は森に隠れているわけでもないなので、ガサガサと音を立てて移動していれば向こうが見つけてくれるだろうと、半ばヤケクソ気味な予定を組んでロビン達を探していた。

「マスター、メディアに会ってどうするつもりですか？」

「話をするつもりだよ。まず『貴女は一体誰ですか』って聞く」

サンソンは不安げな顔をした。彼の心の内は容易に推測できたので、立香は自身が考え無しではないことを説明する。

「メディアさんが偽物だっていうのは皆同じ意見だけど、偽メディアさんは俺たちに敵意を持っていないっていうところも同じ見解なんでしょう？」

「しかし……」

「俺は皆を信じるよ。ついでに言えばその偽メディアさんも信じる。だって、彼女と話しても悪い感じしなかったから」

大丈夫だよ。

何が大丈夫なのか、説明はできない。

でも確信を持って言える。

彼女は敵じゃない。

そこだけは確実だった。

「まあ……そうですか」

曖昧な反応をするサンソンだったが、しかし彼自身もあまりメディア(偽)に対して悪印象を抱いていないのも事実なので、内心ではもつとはつきり立香に同意していた。ただ、立香ほど自分の直感に自信を持つことは危険であるとサンソンは考えているので、それは偽メディアが敵である可能性を立香に代って持ち続ようという、役割分担の意識からくる微妙な返答だった。

立香にはそのまま穢れの無い人間でいてほしい。

だがそれだけで生き残れるほど、魔神柱との戦いは優しくないのだ——そうサンソンは思う。

そんな会話を交わしながら森の中を歩き続けていると、唐突に自分

達以外の気配を近くに感じる瞬間があった。立香とサンソンはそこで立ち止まり、念のためサンソンは剣を構えて立香の前に躍り出る。が、それは杞憂だったようで、木の上から飛び降りてきたのはロビンだった。

「よお、どうした。おたくらは街で情報収集って手筈じゃなかったかい?」

弓をマントの裏に仕舞いながらロビンが言う。

それに対してサンソンが何かを言う前に、立香が口を開いた。

「メディアと話がしたいんだ」

メディアの名前が出て、ロビンの顔が曇る。彼はサンソンに「言ったのか?」というニュアンスの視線を送ってきた。サンソンは観念して首を縦に振る。

「メディアはどっ?」

見たところロビンは一人のようだ。誰かが近づいてきたので、拠点づくりは一旦メディアに任せて一騎だけで闖入者の確認に来たのは何となく推測できるが、では拠点はどこにあるのだろうか?

「メディアはいないぜ」

ロビンの台詞は、意識していなければ聞き逃してしまっただろうと思われる程さらりとしていた。

「……え?」

思わず聞き返す立香。

「体調が悪くなったとか言って、かなり初めの方に屋敷に帰った」

「帰ったって……君はそれを黙って見送ったのか!」

軽い憤りを込めてサンソンが言う。

「そんなことするわけないっしょ。こんな時に『体調が悪い』なんてあまりに嘘くさいしな。ちゃんと送り狼したっつーの。どこにも寄らず屋敷に入ってたぜ。その後しばらく様子を見ていたが、特に外に出るようなことも無し、それ以外の妙な動きも無し」

「中には入らなかったの?」

「メディアが一人で帰れるって言い張るもんだから、『俺は第二拠点の設営を片付けておく』って言っちゃいましたね。『やっぱり心配だか

ら様子を見に来た』なんて言わずに上がることもできましたけど、どうもリスクとリターンが見合わなくてなア」

リスクとリターン。

万が一戦闘に発展した場合、戦場は狭い室内になる。そうになると、予め仕掛けられた罠と弓によるゲリラ戦を得意とするロビンの長所は潰れる。祈りの弓による不浄の爆発が決まれば良いが、それが可能なのはあくまでメディアの具合が本当に悪かった場合に限られる。

偽メディアの正体がいかなるものであるにしろ、それは「魔術師」に属する存在だろう。魔術師が自身のホームグラウンドで戦う場合は、時に最優のクラス「セイバー」——或いは「バーサーカー」をも凌駕する戦闘能力を發揮できる。地形的には明らかにロビンが不利だった。戦力で劣れば、それは戦闘以外の交渉にも響く。

加えて、現在のあの屋敷の状態である。

もしあの場に立香が一人残っていたとしたら、地形的なハンデを背負いながらも、何かがあつてはいけないとロビンは迷わず屋敷に乗り込んでいただろう。しかし今、あそこにカルデア陣営の者は誰もいない。

皆、この町の調査活動で出払っている。屋敷にいるのはカーター氏と召使のティテュバのみ。彼らがメディアの術中に置かれるのではないかという心配もあるが、しかしそれはロビンにも簡単に予想できる手である。帰宅後は間違いなくその二人を注視するだろうから、滅多な動きをさせることはできない。一般人なので戦力にもならない。

そういつた諸々を考慮した結果、ロビンは屋敷に入ることを止めて外からの監視に専念し、二時間程待ったが動きはないので、当初の目的である第二拠点の設営に戻ったというのである。

「……いや、やはり屋敷に向かうべきだ。外から何の動きが無いように見えても、中で何をやっているのかはわからない。それを把握しなければ」

「だからこそ第二拠点を完成させる為に俺は頑張ってたんだよ。メディアがあそこを工房化したとしても、こっちの第二拠点に籠つちまえばむぎむぎ向こうのホームグラウンドでやりあわなくて済む」

「第二拠点の場所はメディアに把握されているのではないのか？」

「場所を移したに決まってるでしょ。それくらい考えられないもんかねえ」

「今は状況が変わった。こちらには僕とロビン、そしてマスターがいる。工房に立てこもる魔術師を相手にまわしても形勢は不利にはならない筈だ！」

「向こうはこっちのステータスから戦法から全て把握している。俺達は向こうの正体は愚か、どんな魔術を使うのかすらわかっていねえ。何の情報もわかってないのに加えて、俺達が能力の『下方修正』を食らってることを忘れてんのかよ。そこまでシビアな大勝負を、こんな序盤でする意味はねえだろ！」

「屋敷の中にカルデアのメンバーがないから中に入らない？ カーター氏とティテユバさんはどうなってもいいということか——君はそれでも義賊ロビン・フッドか！」

「待って、一度落ち着こう」

今にも得物を抜いて乱闘に発展しそうだったサンソンとロビンの間に入り、立香が冷静に言う。二人は臨戦態勢を解き、ぼつの悪そうにお互いから視線を外した。

「……メディアは悪い人じゃないよ」

立香がぼつりと言った。

「戦闘になることはない。俺が保証するから。ロビン、屋敷まで案内してくれ」

「いや、だけどなあマスター——」

「頼むよ」

珍しく怒気を帯びた立香の言葉に遮られ、ロビンは黙らざるを得なくなる。弓をマントの裏にしまうと、無言のまま立香達が付いてこられるゆつくりとしたペースで歩き出した。

「ロビンだって、本当はメディアが敵だって思っていないじゃん」

「——」

沈黙による回答の意味は、立香には伝わってしまったっているようだ。

「俺は、メディアが偽物だってことにも気づかなかった鈍感で駄目な

マスターだよ。戦力の計算とか、状況の把握とか、そういうのと
できないし、作戦なんかも立てられない」

「……」

「俺は皆を信じることしかできない。だから俺は皆を信じる。精一杯
信じるよ。サンソンよりもサンソンを信じるし、ロビンよりもロビン
を信じる。皆が疑ってる皆の直感を、俺は命懸けで信じ続ける」

それは、生前ロビンに与えられなかったものだった。

そうか——もう少し、あともう少しだけ、ロビンを信頼してくれ
人がどこかにいれば。

もう少しだけ凄い奴になれていたかもしれない。

もう少しだけあの村を守っていたかもしれない。

もう少しだけ、もう少しだけ強くなれたかもしれない。

そしてロビン・フッドではなく——偽りの英雄としてではなく、

本当の名——■■■■として、あの老騎士の隣に立てたかもしれない。
い。

第五話

0

それこそ果てのない存在と自己の〈一にして全〉、〈全にして一〉の状態にほかならなかった。単に一つの時空連続体に属するものではなく、存在の全的な無限の領域―制限をもたず空想も数学もともに凌駕する最果の絶対領域―その窮極的な生氣汪溢する本質に結びつくものだった。おそらく地球のある種の秘密教団がヨグⅡソトースと囁いていたものがそれだろう。これは他の名前を数多くもつ神性であり、ユゴス星の甲殻種族が〈彼方なるもの〉として崇拜し、渦状銀河の薄靄めいた頭脳が表現しようのない印でもって知っている神性である―しかしカーターは瞬時のうちに、こうした考えがいかに浅薄皮相なものであるかを悟った。

―ランドルフ・カーター―

1

「私はこの町の外に出たことがないの」

無邪気な子供には似つかわしくない、かといって成熟した大人なら絶対にしないであろう寂しげな表情を浮かべるアビゲイルは、消え入るような声でそう言った。それは救いを求める言葉なのだろうが、マシユにはどうすることもできなかった。ボストンから来たなんてのは嘘なのだから。アビゲイルと同じで、マシユも外に出たことなんて一度もないのだから。外の世界は知識でしか知らない。七つの特異点を渡り歩いたマシユではあるが、あの経験を上手く誤魔化しながらアビゲイルに説明することは、マシユにはできなかった。

立香がいてくれたら。

一人でも大丈夫だと言ったマシユだが、立香が近くに居てほしいと

思ってしまう。そんな自分が情けなくなる。一人で立つこともできないのかと自己嫌悪に陥る。それでもやっぱり、あの頼りになるマスターが自分の隣にいてほしいと願わずにはいられない。

「外に出たいのですか？」

ぎこちなくそんな質問をしてみる。

マシユ自身なら間違いなくうんと頷く問いだったのだが、アビゲイルは悲しそうな顔を俯かせるだけだった。だから少し驚いた。

「出たくないのですか？ 何故？」

アビゲイルは顔をあげ、マシユを見つめ返す。しかしすぐに視線は逸れてしまい、東に広がる海の方を向く。海の底には深淵の青が佇んでいた。

「出てはいけないの」

僅かに声が震えていた。マシユはそこから恐怖の感情を見て取った。そうか、この年端も行かない少女は、外の世界に対して好奇心を抱くとともに、大いなる不安を予期しているのだ——と。

「無理に出ることはありませんよ」

怖いのなら怖くなくなる時が来るまで待てば良い。怖気づく子供を無理に冒険させる必要はないのだから。

親身になってアドバイスしたつもりだったが、しかしアビゲイルの表情は依然として曇ったままだった。俯く角度が少しきつくなつた気もする。もしかして、なにかまずいことを言ってしまったかなと不安になるマシユだったが、「そうね」というアビゲイルの同意が、マシユの中に生まれた妙な罪悪感を消した。

2

メデアはどこにもいなかった。

立香、サンソン、ロビンの三人は十分に警戒しながらカーターの屋敷へと入り、できるだけ静かに二階へ上がった。彼女は『体調が悪い』から家に帰ったとのこと、だったら普通はベッドで横になっているのではないかというロビンの予想により、女子部屋にあるメデアの

ベッドに近づいてみたが、そこには誰もいなかった。

ただ一つ、奇妙なことにメディアアのベッドの脇にガラス片——おそらく割れたコップが落ちていた。その反対側には簡易的な丸いテーブルがあり、一リットルほどの容量がある瓶が乗っつけられていて、その半分くらいまで透明な液体が注がれている。ただの水だろうと立香は思った。

「こいつは……どういふことなんでしようねえ」

誰にともなくロビンが呟く。

「外に出ていったのか？　だが、これは——」

サンソンはベッドに手を置く。勿論温かみは感じられない。

テーブルにある瓶といい、すぐそばで割られたコップといい、ただ出ていったにしては説明のつかない奇怪な痕跡が立香達の目の前に立ちはだかる。

「コップを落としたのかな」

ベッドの脇を見下ろしながら立香が言った。

「わざとコップを割る意味があるとは思えませんからねえ。しかし何で——」ロビンはいきなり黙り、テーブルに乗せられている水に近づくと、薬品を扱う時のように手で扇いで臭いを嗅いだ。彼が何故そんなことをするのか立香には最初わからなかったが、「無臭……」というロビンの呟きでようやくその意図を察する。

「シャルル、成分はわかるか？」

「すぐにはわからない。ここには設備も無い——が、何とかしよう」

サンソンは苦々し気な顔をしながらそう答えた。

「割れたコップがある床も調べた方がいいんじゃない？」

立香の提案に二人は振り返る。

「水が蒸発して成分が残ってるとか、ないかな」

サンソンはもう一度破片群の散らばる床を見る。

「確かにそうですね」

慎重に破片を取り除いていくサンソン。粉状に割れている部位もあるので、ガラス片と結晶をどうより分けるかが問題ではあるが、挑戦すべき問題であることは明白だった。

「これからどうするよマスター」

ロビンに聞かれて立香が真っ先に思い至ったのは、現在外に出ている空々とマタ・ハリ、そしてアビゲイルと一緒にいるであろうマシユの安否だった。

「皆で集まろう。心配だし、情報を共有したい」

頼りがいのある指示を出してくれる。世界を救った功績は伊達ではないと、ロビンは心の中に流れる安堵感を享受しながら思う。不測の事態に取り乱さないのは流石と言ってよかった。

皆で集まる。その要望は一時間程経ったカーター家の二階で叶えられた。

初夏の日差しが差し込む男子部屋にはロビン、空々、マシユ、マタ・ハリがいる。立香とサンソンは女子部屋で化学的な調査を行っていた。

「メディアさんの失踪ですか……」

ロビンの説明を聞いてマシユは深刻そうに呟く。椅子が無いので、彼女は床に座っていた。

「ティテユバさんやカーターさんは彼女の姿を目撃してはいないんですか?」

空々の質問に「まだ聞いていない」と答えるロビン。「慎重に行こうって話になった」

「慎重?」

「あの二人はいまひとつ信用できないんでね」

ロビンは窓側の壁にもたれかかっていた。

「女子部屋の状態がどうも『死体の無い殺人現場』臭えのき。横に置かれた水差しといい、近くに広がったコップの破片といい、誰かがあの場でもがいたような形跡が見て取れる」

毒でも盛られたみてえに。

ロビンの言葉は周囲の気温を少し下げた。

「毒でサーヴァントが死ぬんですか?」

空々が聞く。

「死ぬぜ。ちつとは頑健になるけどな。でなきや俺が聖杯戦争で勝ち

抜いていけたわけがない。耐毒系のスキルを持っていれば別だが、メディアにはそれもない」

「で、でも魔術を使えば解毒だって可能なのでは——」
「遅効性のなら問題なく祓えるでしょうけど、即効性の毒なら詠唱する暇も無く消滅してしまうでしょうね」

マシユの反論もマタ・ハリが潰してしまった。その後しばらく重苦しい沈黙が続く。

男子部屋の扉が開きサンソンと立香が入ってきたのは、そんなタイミングだった。

「よお、どうだった」

ロビンの問いかけにサンソンは苦々しく「ああ……」とだけ答えた。要領を得ない彼の態度を訝しんだロビンは、「なんだ、何かあったのか」とサンソンに詰め寄る。彼はそれでも何も答えようとせず、ロビンと目を合わせないよう床に視線を落とす。ロビンは立香の方を見た。他の者も注目する。立香は非常に言い辛そうに口を開いた。

「ガラス片が散らばっていた床から人体に有害な化学物質が検出されたんだ」

マシユが息を呑んだ。他の者達も一様に殺気立つ。

「そうか。じゃあメディアは既に消滅しているのかもしれないな」

「うん……」

言葉に妙な含みを持たせる立香にロビンは「どうした？」と聞く。

「ああ……その、毒の成分なんだけれど」

「ああ、何だった？ 即効性の高い毒なんだろうが——」

「——タキシンド」

「え？」

唐突にサンソンの口から放たれた単語を上手く聞き取れず、ロビンは彼の方を振り向いて聞き直した。

「あれは櫛の種子を磨り潰したものだだった」

「無論、確實ではない。マスターの魔術に頼らせては貰ったが、ここにまともな器具は無いから、おおよそこの状況で調達できるであろう薬物をまず挙げて、その中から該当する物質を拾い上げただけだ。確実な証拠は何もない」

何かを弁解するようにサンソンは何度もそう念を押しした。決定ではない、確定ではない、絶対ではない。繰り返して言うサンソンは――しかし、一度もロビンと視線を合わせることはなかった。

「おい……。もしかして俺を疑ってんのか」

ロビンは冗談めかして言おうとしたのだろうが、それにしては少々笑みが渴き過ぎていた。

「……櫟はこの町でも十分調達できる」

「だから何だよ。カーターにもティテュバにも毒殺は可能だったってか？ 当たり前だろうが」

「彼らはメディアの帰宅を知る機会があった」

「そりやそうだ。この家に居たんだからな。カーターは書齋でティテュバは一階だ」

「メディアが死んだかどうかは未だに不明だ」

「そうだな。『体調を崩した』なんてすぐばれる嘘を吐いて家に戻った時点で怪しすぎる。何か別の意図があった筈だ」

「……」

サンソンは悲しみの籠った表情を一瞬作った後、すつと感情の無い平然の色に戻る。それは生前彼が仕事に臨む時の顔だった。あらゆる情を廃し、法と秩序、『正義』を執行する剣の仮面。

『メディアがこの家に帰った』というのは、ロビン。君から聞いただけの情報だ」

いつもと変わらない声色。

いつもと変わらない表情。

何一つ変わらない彼の様子こそが、この時は異質だった。

「……冗談じゃねえぞ」

ロビンはサンソンから視線を離し、焦燥の瞳で周囲を見回す。皆、彼を見ていた。驚愕、困惑、不安――疑念。完全にロビンを黒と見て

いる者は誰もいなかったが、その逆もまた誰一人としていなかった。「ちよつと待つて、ロビンがそんなことをする意味がわからないわ——いえ、メディアを殺すところまでは、『メディアが怪しかったから念の為にロビンは彼女を始末した』という理屈がもしかすると通るかもしれないけれど、ロビンがそれを隠す意味は無いじゃない。だってそれは、曲がりなりに私たちがカルデアの為でしょう？」

マタ・ハリが冷静に疑問を呈する。それはロビンだけでなく他のメンバーにとつても救いとなる言葉だったが、サンソンと、そして空々の表情は晴れなかった。

「ああ。その通りだ」とサンソン。

「櫟の毒を見つけた時——ロビンがメディアを殺したのではないかと思つた時、僕達はその疑問にぶつかる。メディアは本当に死んだのか、殺したのはロビンなのか、それとも他の誰かなのか。殺したのがロビンだったとすれば、真つ先に自分が疑われるであろう櫟を使うとは思えない。本当は他の誰かがロビンに罪を着せようとして櫟を使ったんじゃないか？ 或いはメディアがまだ死んでいなくて、ロビンを陥れようとあんな痕跡を残していったのではないか？ そんな思考に陥る筈だ——というか事実、そうなっている」

マタ・ハリはサンソンの次なる言葉を待つ。彼の真意を読めた者は現時点で空々一人だった。

「ど、どういうことですか？」

マシユが問う。この雰囲気は苦しくてたまらなかった。

「一度その思考に嵌つてしまえば、『メディアがロビンを殺した』可能性に辿り着くのは至難の業だ」

サンソンの言葉はこれまで目にしたどの宝具よりも鮮烈な衝撃を立香に与えた。

「え……？」とマシユは未だサンソンの言葉の意味を理解できていないようで、マタ・ハリや立香に視線を送る。空々とマタ・ハリはじつとロビンを見つめていた。部屋の入口付近に立つサンソンを睨むロビンは、色を失つた表情をしていた。

「変装」

マタ・ハリが呟く。そこでようやくマシユも得心がいったらしく、改めて驚愕の眼でロビンを見た。
「メディアに扮していた者がロビンに化けることができないう道理はないだろう」

4

昼食は朝と打って変わり、通夜のような静寂の中で粛々と摂られた。ロビンは居心地の悪さを隠そうと極めて普通に過ごしているが、口数の少なさは露骨だった。ティテユバはそんな『旅の芸人』達の様子を不思議そうに眺めていたが、敢えて話しかけることはせず、マシユやマタ・ハリと一緒に料理を作った後はまたすぐ何処かへ行ってしまった。

マタ・ハリは料理の準備の手伝いで一緒だったティテユバに向けてさりげなくメディアの話題を振っていた。「二時間程前に具合が悪くなって帰ってきたことは知っていますけど……」と、彼女は答えた。それは収穫だったが、彼女の言うことを鵜呑みにするのも迂闊である。進展とは言えなかった。

皆と一緒に味のわからない昼食を食べ終わり、立香がまた朝のように皿洗いをしようとした時、「マスター」と空々に声をかけられた。

振り向く立香。

「ちよつと話したいことがあるんですけど」

空々は声を潜めていた。他の皆には知られたくない相談のようだと感じた立香は、「うん、わかった。これが終わったら聞くよ」と手に持った皿を見せて空々に言う。

「そうですね。ありがとうございます」

もしかしたら手伝ってくれるのかなあと思っていた立香だったが、この小さな英雄にそんな甲斐性は期待するだけ無駄だった。彼は一番キツチンに近い椅子を引いて、ちよこんと座る。そこで待つ腹積もりらしい。

「ああ、僕がやりましょう」

二人の様子を見ていたサンソンがキッチンに歩いてきて、立香から皿を優しく奪い取る。サンソンにマシユもついて来た。手持無沙汰になった立香は、椅子から立ち上がった空々と顔を見合わせる。

「どこで話す？」

「裏の森ででも」

既に考えてあったらしい。確かに森の中なら他の誰かに盗み聞きされる心配は少ない。わかったと頷きかけた立香だったが、

「さっきの女の子の話？」と、半ば強引に割って入ってきたマタ・ハリによつて言葉を掻き消される。

「はい」

空々はマタ・ハリに頷いた。何のことかわからないが、二人の間では通じたらしい。『さっきの女の子』ということは、先ほど二人で出かけた時に誰かと出会ったのだろうか。

「私もついていっちゃ駄目？」

マタ・ハリはどちらかと言うと立香の方を向いて聞いた。了承したのは山々だったが、それを決めるのは空々だと思ったので、立香は彼の指示を仰ぐように空々の顔を見る。

「……はいですよ」

少しの間があった後、空々はオーケーを出した。笑顔になるマタ・ハリ。

そこでようやくやくサンソンは皿を水桶につけた。

5

あまり深く分け入っていないにも関わらず、森の中は外とはまるで別世界だった。気温が違うし明るさが違う。何処かから襲撃されてもすぐには気づけない薄暗さだった。マタ・ハリがついてきたのは、護衛の思惑もあったのかなと立香は思う。

「昨日、狼の襲撃があった時に見つけた白髪の女の子とさつき会ったんです」

空々はどこか手近な樹に寄りかかるともなく、ただそこに立って

話を始めた。

「つてことは無事だったんだ」

「はい。で、どうやら向こうも僕達を探していたみたいで」

少女の方もカルデア側を探していた？

それを疑問に感じた立香だったが、まあ自分を助けてくれた恩人を探し求めるといふのは自然な行為なのかもしれないと思いなおす。

「彼女は私たちに助けを求めてきたのよ」

マタ・ハリの言葉は、立香の頭から消えかかっていたはてなマークを鮮明に戻してしまった。

「助け？」

「ええ……正確には、クウ個人に」

立香は空々の方を見る。こんな状況にあっても、彼の様子は普段と全く変わっていない。それはとても頼もしかったが、ある種不気味でもあった。

「助けを求めてきたって、具体的にはどういうこと？」

「……それが、詳しいことは僕と二人きりにしてくれなければ話したくないらしいんです」

「会った時、二人きりにはならなかったの？」

「招集がかかったので」

「ああ」

思わず頷いてしまったが、それは納得からくる同意というよりも、ある種の罪悪感による追求の遠慮によるものだった。

「それで、こんな状況なのはわかっていのですが、僕に単独行動を許してはもらえませんか」

「ああ——そうか。うん、えっと……」

立香は言葉に詰まってしまう。

OKのサインを出したのは山々だったが、空々の言うように今は特殊な状況なのだ。カルデアとの連絡は未だ取れず、メディアが偽物かと思ったら忽然と姿を消し、仲間達は少しづつお互いを疑い始めている。ここで空々が一人で動くとなれば、彼に対する疑念が強くなるだろう。

「皆の意見を聞いてみない？」

苦し紛れに言う空々は困った顔をした。自分でも名案とは思えなかったが、しかし空々の出立を決めるにはこれ以外の選択肢はありえない気がする。立香は助けを乞うようにマタ・ハリを見た。

「私はクウに話を聞きに行ってもらうべきだと思うわ」

意外にもマタ・ハリは空々の提案を是とした。

「リスクは勿論ある……でもこれは、状況が良い方向に向くチャンスでもあると思うの」

確かにこのままではずると悪い方向に皆が傾いていってしまうようなヴィジョンが立香の視界にもちらつく。どうにかここから脱却せねば、この特異点を修正することは不可能だ。

「でも、他の皆はこれに反対すると思うわ」

マタ・ハリはそう付け加えた。一瞬「何故？」と聞きそうになったが、彼女の表情から何となく察してその質問は差し控える。

「クウ、貴方はだからマスター一人に相談したのでしよう？ ロビンやサンソンがいれば間違いなく貴方の自由な行動を抑制しようとするから。メディアがいなくなった今は、特に」

「そうですね。彼らはまだ僕を信用してくれていないみたいなので」
そうだったのかと意外に思う反面、心の何処かで立香は空々が皆から信用されていないという事実には納得していた。嫌な事実ではあったが、しかしそれは確かにその通りなのだ、パズルのピースが嵌るように立香の心に馴染んだ。

「でも、それだけじゃない」

空々は静かに呟いた。彼の言葉に引き寄せられるようにマタ・ハリは「どういうこと？」と質問をする。立香の耳も空々に傾けられた。空々はここで初めて周りをくるりと見回す。誰も聞いていないことを確認した空々は、しかし理屈無き不安に駆られることはなく、至って普通の音量で

『地球陣』ちぎゆうじんって知ってますか？」

と、二人に聞いた。

「——地球、人？」

立香は空々の言葉を反芻する。

「そりゃ勿論知ってるけど……」

「ああ、すみません。ジンの字が違うんです。人じゃなくて陣営の陣。地球人じゃなくて地球陣」

地球陣？

何だそれは、初めて聞いた名前だと立香の顔に書いてあったのだろう。空々は「まあ知りませんよね」と、立香の答えを待つことなく話を先に進める。

「厳密なことを話すと長い上に、実は僕自身もよく知らないので大雑把な説明になりますが、要するに人類の敵です。人間に仇為す『怪人』とでも思ってもらえればいいんですけど」

怪人というワードを聞いて、立香の頭には小さいころ見ていた特撮ヒーローものの敵のようなヴィジュアルが浮かんだが、どうもそういう直接的な『怪人』と『地球陣』は違うらしい。いずれにせよ、サーヴァントやら聖杯戦争やらとはまた違うベクトルで浮世離れた話題に立香はいまいち実感を持つことができなかつたが、「——それが、いるのね？」というマタ・ハリの台詞によって一気に現実を引き戻される。

「おそろくは」

空々が頷いた。それは立香にとって死刑宣告のような重みを持つ返事だった。

と、同時に何かが腑に落ちる感覚もあった。今までの特異点とは違う、敵の姿が全くつかめない、本当の意味での『正体不明』であった理由はそれによるものだったのか。

「彼らは人間に擬態します。それもある日突然、普通に生活している者に入れ替わって社会に溶け込む」

「それは『化ける』のかしらっ？」

マタ・ハリは立香なんかよりもよっぽど理解力が高いらしい。

「はい。人間の姿になるというよりは、周りの人間に自分の姿を『人間』に錯覚させる——という方が正確でしょうか」

「なるほど。見破る方法は何かしら？」

「一つは彼らの行動観察です。基本的に普通の人間と何ら変わりない生活を送っていますが、大なり小なり、地球陣は人類を絶滅させる為の行動をとります」

人類の絶滅。

立香は堪えきれず「ゲーティアの手先ってこと？」と空々に質問する。

「ゲーティアってソロモン王の魔神でしたっけ？ 多分違います。それとは別の勢力です」

第三勢力？

ここへきて新たな敵の存在が発覚したことに少なからず立香はショックを受ける。空々の言葉が正しければ、人類史存続の戦いはまだ終わっていないということだ。

「大丈夫よりツカ。敵が何者だったとしても、私たちはこれから先もあなたに力を貸すし——何より、クウ。その『地球陣』との戦いは、あなたが決着をつけたんじゃないかしら？」

マタ・ハリの言葉に反応する空々。

「人類滅亡の危機を救ったことで、あなたは英霊の座に招かれたのでしょう？」

「……僕が死んだ後も戦いは続いていますけどね」

空々は少しの哀愁も感じさせない表情のままそう言った。

「それで、他の見破り方は何かしら。人類を絶滅させる為の行動をとるって、相当長いスパンで見ないとわからないわよね。もっと直接的に擬態——『変身』を見破るには、どうすればいいの？」

空々は右手を広げて前に出した。するとそこに妙な形のゴーグルが現れる。

「僕の宝具です。これをつけて地球陣を見ると彼らの本当の姿が見えます」

立香はまじまじとそのゴーグルを見る。ただのゴーグルには見え

ない。電気製品だろうか？

「本来なら充電が必要な電気製品だったんですけど、宝具になったので魔力で代用できます」

「なるほど——地球陣の擬態能力は魔術的なものではなく、科学的なものなのね」

ならば魔術的な千里眼などによる看破はできないと見るべきか？

マタ・ハリの質問に、しかし空々は頷きあぐねている様子だった。

「どうでしょう、科学的って感じでもないと思いますけど——でも、だからって試しに魔術的な見破りをするのはやめてください」

「どうして？」

「眼が潰れます」

何気なく発された空々の言葉は、しかしかなりの衝撃を以て立香の身体を貫いた。

「眼が、潰れる？」

「はい。ですので不用意に見るのはおすすめしません。っていうか絶対やめてください」

「待ってクウ。それはトラップ？ 地球陣を見るには正しい手順をこなさなければならぬとか、そういうこと？」

驚く立香の隣に立つマタ・ハリは落ち着いて空々に質問をする。

「トラップ——そうですね。彼らのそれは初見殺しなんて生易しいものじゃないですけど。地球陣の姿が『美しすぎる』ために、普通の人々が彼らの姿を見ると眼が潰れ、精神にも修復不可能なダメージが行きます」

「……ディルムツドの黒子のような能力？」

ぽつりと呟いてみた立香。

「そう……ですね。でも能力というよりは体質——或いはただ単に『外見』って感じですよ。魔術的な耐性を持っていても関係なく効果を発揮すると思います」

空々の説明を聞いてマタ・ハリは黙り込む。何かを考えている風だった。

「美しさによる精神攻撃……。じゃあクウのゴーグルはモザイク機能

でもついているの?」

「いや、別に。これはただ、地球陣の姿を見ることのできるゴーグルです」

「……? じゃあ何でそれで見ると眼が潰れないの?」

理解が追いついていないという顔で立香が聞く。

「これで見ても眼は潰れます。だから僕が見なくちやいけない。僕の眼は潰れないので」

「……つまり、その『美しさ』を見ても、あなただけは動じることがないということかしら? クウ」

マタ・ハリの補足を聞いてようやく立香は空々の言っていることを理解する。耐性があるのはゴーグルではなくて、空々個人の眼なのだ。だから他の者がゴーグルを使って地球陣を見ると普通にダメージを食らう——眼が潰れる。

「僕が軍にスカウトされた理由です。地球陣を目視できる人間はとても珍しいので」

空々が所属していた組織が軍隊の体を為しているという新情報を抜け目なく頭にインプットしながら、マタ・ハリは「ふうん」と頷く。

「——で、ロビンは地球陣なのかしら?」

マタ・ハリが聞く。そうだ。それが問題なのだ。立香はどんな回答が来たとしても対応できるように身構える。

空々が口を開いた。

「——」

7

『魔神』には勝てない。

それはラヴィニアの大前提だった。

自分達の家族をこの町に連れてきた魔神。あれと直接対峙して勝利する見込みは不可能——武力での制圧は絶対にできない。

では、ラヴィニアには何もできないのだろうか。あの魔神が為す降臨の儀を、ただ黙って見ていることしかできないのだろうか。

外なる神の降臨は確かにウエイトリ一家の悲願だ。一族はそのためにはぐれ者と罵られながらも魔術を、錬金術を研究してきた。だが、あの魔神に、降臨した神を好きにさせて良いのか。あの魔神の思い通りにことを運ばせて良いのだろうか。

アビゲイル・ウイリアムズを好きにさせて良いのだろうか。

美しい金髪をたなびかせる少女。自分を親友と呼び慕い、接してくれる。儀式の失敗により醜く変貌した私を、あの子は「美しい」と言ってくれた。彼女を好きにさせて、我らが神を呼び寄せて、魔神の目的のために神をまんまと利用させて良いのか。

駄目だ。魔神には勝てない。何をどうやったところで、ラヴィニアの持ちうる全てを賭しても、あれには勝てない。

——あの少年ならどうだろうか。

森の中で出会ったあの少年ならどうなる。彼ならば、もしかすると魔神を——ああいや、駄目だ。たとえあの少年が人智を超えた超人だったところで、この町の中ではあの魔神には勝てない。ここは魔神の庭なのだから。

勝てない……あれには絶対に勝てない。勝つことはできないが——しかし、あの少年なら、魔神の思惑を断ち切れるのでは？

狂気を以て狂気を制す。あの少年なら、きつと全てを台無しにしてくれる。降臨の儀を、禁忌の町を、魔神の計画を——一切合切全部巻き込んでぐしゃぐしゃにしてくれる。

我らが神、異端にして異界の神、『門にして鍵』を閉じることができ
る。

彼ならおそらく、それができる。

だが——

「同じ箒星の年にこの町で生まれて、一緒に鯨を観に行ったでしょう？」

アビゲイル。

美しい金髪をたなびかせる少女。自分を親友と呼び慕い、接してくれる。儀式の失敗により醜く変貌した私を、あの子は「美しい」と言ってくれた。

……偽りだ。

そんなもの嘘だ。彼女とはただ、自分が生き残る為に付き合っていたにすぎない。私はこの町の生まれじゃないし、一緒に遊んだ記憶は全部まやかした。あの魔神が見せる幻覚だ。本物じゃない。ウェイトリーの悲願は外なる神の召喚で、私の使命は神をあの魔神から守ることだ。彼女なんてどうだっていい。どうだっていいんだ。

殺せ。

門を閉ざせ。憑代を折れ。そうすれば神は召喚されない。あの魔神に、二度と我らが神を使役するチャンスは来ない。

殺せ。

アビゲイルを殺してくれ。

私は鯨なんてみていない。

8

セイレムの町の路地裏。

段々と伸びてきた日陰に隠れながら、ラヴィニアは表通りを見張っていた。

道を通り過ぎる人々の流れを目で追っている。誰かを探しているようだった。段々と肌寒くなってくる四月の夕風にもめげず、彼女はじっと待っている。

空々が現れたのは、それから二十分ほど経った後だった。

「

するりと裏路地に入った空々は、ラヴィニアに向かって声をかける。ラヴィニアは無言のまま、ぎこちない動作で頷いた。

「助けてほしいってことだけど……僕は具体的に何をやればいいのかな」

特に前置きも無く単刀直入に切り込む空々にラヴィニアは少々面食らうが、それでも慣れない挨拶の言葉を述べなくていいのは、彼女にとっても好都合だった。

だが、何から説明すべきか。

今のラヴィニアが置かれている立ち位置は非常に複雑なのだ。その上自分でもよくわかっていない部分も沢山ある。こんがらがったこの状況をいかに解きほぐすか、ラヴィニアは頭を捻る。

「わ、私ね、ここの生まれじゃないの」

さんざん悩んだ結果、もう自分の体験を全て洗いざらい話してしまうことにした。

「引越して来たのよ。ほんの少し前に——」

「ほんの少しって、どれくらい？」

「わ、わからないわ」

空々から視線を逸らしながらラヴィニアは答える。

声が小さくなった。

「記憶がぐちゃぐちゃなの」

ちよつと躊躇い、自分が幾分か落ち着いたのを見計らってからそう呟く。

「おかしいの。おかしいのよ。ここの生まれじゃないのに、ここで過ごした記憶が、あ、頭の中にあるの。入ってくるのよ。偽物の記憶が、ほ、本物を塗りつぶして——……」

次の言葉が出てこなかった。ラヴィニアは無意識に空々の顔色を窺う。彼は何も変わらず、ともすれば退屈そうにも見える表情で彼女の話の聞いていた。何を考えているのか全く読み取れない。はつきり言って不気味だった。

だが——だからこそ私はこの少年に助けを求めたのだ。

「……アビーは私を親友だと言ったわ」

空々は何も言わない。

ただラヴィニアの話の聞いている。

「か、鍵はあの娘よ。彼女が全てを握ってる」

「鍵？」

それは奇しくも真実の一端を掠める言葉だったが、ラヴィニア本人はともかく、空々は『彼女が全てを握っている』というような一種の比喩表現と受け取った。

「……」

ラヴィニアは口を閉ざす。眼は何か言いたげだったが、どうしても言葉にできない——何かに怯えているようだった。まあいい、十分情報を得たと空々が立香達の下へ取って返すべく、僅かに足のつま先を回転させた時、突然というかとうとうというか、ラヴィニアは声をあげた。

「殺して」

と。

無色の感情が籠った声だった。

「彼女を殺して。お願い。それで全て終わるから」

空々は改めてラヴィニアの顔を見る。彼女は人の気持ちに疎い彼ですら簡単に読み取れる程に悲痛な表情をしていた。

「良いのかい」

空々は念を押す。

「殺して」

三度、ラヴィニアは言った。

言い切った。

「あ、あなたにはそれができるわ」

空々は——彼女の頼みを聞き届けた後、しばらくの間沈黙した。それが怯えからくる静寂だとはラヴィニアも思っていないが、では彼は一体何を考えているのだろうか。

やるかやらないかはともかく。

空々にそれが可能か不可能かについての答えは、ラヴィニアの言う通り、これ以上なく明白だった。

「彼女に外なる神が降臨しようとしている」

第六話

0

そうするのが一番自然だと思ったから

——貴宮むいみ

1

「——どうするの」

日が落ちて、空が濃い青で覆われた時間帯。

屋敷に帰るまでの道、あまり強くはないものの決して暖かくはない風をやり過ぎしながらマタ・ハりは呟いた。

それは勿論隣を歩く空々に向けての言葉だった。空々はマタ・ハリの方を一瞥すると、また視線を前に戻す。

「マスターに判断を仰ぎますよ」

言うまでもなく、先の『お願い』についての話だ。

ラヴィニアと空々が出会った時、マタ・ハリは近くの建物の屋根にいた。二人の会話を聞いていたのだ。現状空々がカルデアのメンバーにいまひとつ信用されていないが故の措置である。思考はともかく、行動として仲間を疑うような真似は正直あまりしたくない（生前の記憶も手伝って）のだが、結果的にいついて良かったとマタ・ハリは思っていた。さっきの話を空々が皆に伝えても、信用されるかどうかはわからなかっただろう。

「カーターさんは胡散臭かったですけど、まさかあの少女の方が恐ろしい存在だったとは思いませんでした」

「まだ決まったわけじゃないわよ」

ウエイトリー家はこの町の嫌われ者だという。

聞けば怪しげな異教の儀式——『魔術』を執り行っているとか。道行く人々から集めた情報では、あまり良い印象を受けなかった。

「でもそれこそが、彼らがこの町へ呼ばれた理由なのだとすれば辻褄は合います」

ウエイトリー家は『何者か』に脅され、彼らの崇拜する神の降臨を執り行っているらしい。これはラヴィニアから直接聞いた情報だ。

「異教の神……『外なる神』と彼女は言っていたわね。その者の召喚こそが魔神柱の目的……」

「マタ・ハリさん、『外なる神』の存在に聞き覚えはありますか？」
「ない——筈なのだけれど」

マタ・ハリは躊躇うように言葉を区切る。

「どこかで聞いたことがあるような……最近どこかで聞いたような気がするのよね。これ、もしかしてラヴィニアちゃんにも起こっている認識阻害なのかしら。クウはどう？ 『外なる神』に聞き覚えは？」

「僕はありません」

「ふうん……。だとすれば、これまでの特異点で『外なる神』に出会ったのかしら」

自分で言っておきながら釈然としない理由付けだったが、今のマタ・ハリにそれ以外の解釈を見つけることはできなかった。

「いずれにせよ、僕らの行動指針ははつきりしました。まずはさっきの少女の言っていたことが正しいのか裏をとる。あの情報が正しいとわかれば、魔神柱による『外なる神』召喚の妨害、及び魔神柱の捜索——ですが魔神柱の捜索はともかく、召喚の妨害はマスターが首を縦に振るかどうかわかりませんね」

外なる神召喚の妨害。

それが具体的には何を指しているのか——マタ・ハリはふうとため息を吐いた。

「リツカは決してそれを良しとしないわ」

マタ・ハリの声は夜風に溶ける。

そこに悲痛は無かった。

二人は少しの間、何も言わずに歩いた。踏み固められた土の道になるべく音を立てずに進んでゆく。既に町の中心からは遠く離れ、道のわきに建っている家の間隔も広がってきていた。微かに残る夕

焼けを目指し、既に青くなりつつある空を背負う。空の半分程が雲に覆われていた。今夜は満足に星をみることはできないだろうとマタ・ハリは思った。

風が吹く。ここが切り取られた空間であるなら、この風はどこからやって来てどこへ向かってゆくのだろうか。空も海も森も同じだ。あの遠き空は果たして本物なのだろうか。ふと出た疑いを確かめたくなった。マタ・ハリは右手を暗い青に伸ばしてみる。当然、手は宇宙を切るだけに終わった。「どうしたんですか？」空々に聞かれる。訝し気な顔をしていた。

「何でもないわ」

マタ・ハリは笑って言う。真面目に質問してきた空々がおかしかった。

「あれは金星かしら」

一度下げた手をもう一度上げて、紺色のグラデーションにポツリと光る小さな星を指さす。宵の明星、金星。マタ・ハリに天文学の知識は無く、そう思ったのはただ「一番星は金星」だと知っていたから。あの知識はどこで得たのだろう。子供の頃だった気がするが……まだ家が裕福だった頃。学校で習ったか、父か母が教えてくれたのだろう。

レーワルデンの空も青かった。

空々もまたマタ・ハリの指さす星を見上げていた。こうしてみると、彼はとても人類史に名を遺した英雄には見えない。どこにでもいる十三歳の少年だった。

「貴方はいつから英雄だったの？」

何となく聞いてみたくなった。

子供時代を思い出したからだろうか。

「十三歳からです」

空々はマタ・ハリの質問に答えてくれた。

視線は空から戻り、彼女に向いていた。

「十三歳から……。大変だったでしょうね」

マタ・ハリの人生が狂い出したのも、思えば十三歳からだった。父

の事業があのまま上手くいってれば、自分はこんな場所にいなかっただろう。空々はさして表情を変えずに「そうですね」と頷いた。空々空は今の調子で、顔色一つ変えることなく世界を救ったのだから。

それ以上の質問はしなかったが、マタ・ハリは何故か、そう確信できた。

2

「クウを完全に信用してはだめよ」

空々が白髪の少女に会いに行くべく町の中心へと出立した後、マタ・ハリは立香にそう釘を刺してきた。そうだ。とてもいきなり信じられる話ではない。直に話を聞いていたマタ・ハリですら半信半疑というところなのだ。空々のあの雰囲気——まるで鏡の奥の自分自身が喋っているような感覚は、立香だけにしかわからないのだろう。彼を疑うことは立香を疑うことなのだと言っても、皆は意味がわからないに違いない。

「先輩？ どうしましたか？」

マシユが立香の顔を覗きこんでくる。彼女の純粋な視線は今の立香にとつて猛毒よりも耐え難いものであり、「な、なんでもないよ」と言って明後日の方向に顔を向ける。

現在時刻は午後四時二十分。カーター氏の屋敷のリヴィングルームにて、立香とマシユは幾つかある長椅子の一つに座っていた。

「大丈夫ですか先輩？ 顔色が優れないようですが……」

「そ、そうかな？ 俺は至って元気だけど」

焦って取り繕うが、依然としてマシユの瞳にかかった心配の雲は晴れない。が、ロビンのことを話すわけにもいかない。困っていると、誰かが階段を降りてくる音が聞こえてきた。

ロビンとサンソンだった。

「……」

彼らはリヴィングには来ず、そのまま廊下の奥の角を折れていつ

た。トイレだろうと立香は思った。あの二人の仲で連れションはあり得ないが、今は状況が状況である。ロビンの監視の為にサンソンがついていったと見るのが自然だろう。

「……メディアさんは、具合が悪いと言って屋敷に戻られたとのことですが」

マシユがポツリポツリと語り始めた。

これらの問題を無視するのは不可能だった。

「メディアさんなら——いえ、メディアさんに限らず一定以上の実力がある魔術師なら、多少の体調不良なんて自力で治癒できます。『具合が悪くなったから屋敷に戻る』なんて理由はあり得ない筈なんです」

「……彼女が屋敷に帰ったのには、何か別の理由があった」

そこまでは立香にもわかる。メディアに変化できるような魔術師が身体を壊すというのは不自然だ。だが、それでは何故彼女はそんな嘘を吐いてまでこの屋敷に戻って来たのか、それがわからない。

「……色々考えてみたんです」

静かに呟くマシユは、どうも自分の見解を持っているらしい。ホームズさんのようにはいきませんがと前置いた後、またゆっくりと語り出す。

「彼女は、この屋敷を工房化しようとしたのではないでしょうか」

「工房化？」

予想外の方向からのアイデアだった。

「メディアさんは——偽メディアさんは、元々この屋敷を工房化しようとしていたと、先ほどマタ・ハリさんから聞きました。ロビンさんについていったのは偽メディアさんの提案より空々さんの提案が採択されたからで、森の中の第二拠点設営というのに、彼女はあまり乗り気ではなかったようです」

「なんで彼女は抜け駆けしてまでこの屋敷を工房化しようとしたんだ？」

「それは、はっきりとはわかりませんが、おそらく——」

マシユが全て言い終える前にリビングの扉が開いた。二人は強

張った顔を入口へ向ける。そこにはティテユバがいた。

「あら」

特に驚いた風でもなく声をもらすティテユバ。

「お邪魔でしたか？」

「あ、いえ……！ 決してそんなことは」

「そうですか」

ふふつと、何故かティテユバは微笑む。

その後キッチンへ移動するティテユバに対し、マシユは椅子から立ち上がって何か手伝えることはないかと聞いた——が、優しく断られてしまう。彼女が働いている前では会話がしにくいと思つた二人はその場から失礼して、リヴィングを出て二階に引き上げることにした。

「おう、マスター……じゃねえ、座長」

廊下でロビンとサンソンに出くわす。ロビンがいつもの調子で手を挙げて立香を呼んだ。

「二階に上がんのかい」

「うん」

立香も普段通りの口調から外れないよう意識しながら応答する。

上には四つの部屋がある。北から南へと廊下が伸びており、西側にある左手前の一つはアビゲイルの部屋で、東側の二部屋が客室。アビゲイルの部屋の隣は空き部屋になっている。そこは伽藍洞で、何も置かれていなかった。

「おたくらは女子部屋を使うと良い」

階段の一段目に足をかけながらロビンが言った。にやりとした笑顔で顔に貼り付けていたが、それが虚勢であるのは立香にもわかった。

彼はいつになく疲弊している。

ロビンの胸中を慮りつつ、彼に次いで階段を昇るサンソンの背中を追って一段目に足をかけた時——

一瞬。

それはまさに一瞬の出来事だった。

前にいたサンソンが突如としてバランスを崩し、後ろに倒れ込んできたのだ。

迫りくるサンソンの背中——彼の白いシャツが、くつきりとスローモーションで見えた。

落ちてくる。

受け止めなければ。

頭で考えるより早く、立香は両手を前に突き出していた——が、転がり落ちてくる大の男を不安定な足場で受け止められるほどの力はなく、サンソンに巻き込まれる形で立香もまた後ろに倒れ込んだ。

天地がひっくり返った。

マシユが何か叫んだ。視界が暗転した。胸に衝撃が来る。木の天井が見えた。首の力で頭を起こす。また胸に衝撃。サンソンが飛び起きたらしい。何が起こっているのか把握しようと思ふと黒目を動かす。サンソンの剣が視界に入った。「ロビンっ！」階段を駆け上ろうとしている？ 少し遠くに目を遣る。ロビンが階下を見ていた。何かを構えている。サンソンが邪魔で見えない。何か空気を切る音が聞こえた。サンソンの動きが止まる。マシユの悲鳴。サンソンが前のめりに倒れる。もう一度風切り音。サンソンの剣が派手な音を立てて吹っ飛ぶ。ロビンが階段を降りてくる。彼の足に縋りつくサンソンをロビンは文字通り一蹴する。早く立ち上がらねば。うまく力が入らず腕が床を滑る。マシユがロビンと立香の間に立ちはだかった。ロビンはマシユと立香を見比べる。マシユは両手を目一杯広げた。震えていた。

怯えた眼でロビンを睨んでいた。

ロビンは何も言わなかった。敵対を意味するマシユの視線に何も感じないということはないだろうが、彼はそれを決して表に出さなかった。

「どうかしました？」

リヴィングの方からティテユバの声がした。立香は一瞬そちらに気をとられる。ロビンが動いた。目の前に立つマシユの腕を掴み、屋敷の出口に向かって風のように走り出す。ティテユバの声を聞いて

マシユもその時は気が緩んだらしく、ロビンの為すがまま、彼と共に出口へと消えていった。

「マシユ！」

自身を慕ってくれる後輩の名前を呼ぶが、もう遅い。

「何ですか？ 何があつたんですか？」

ティテユバが駆けつけてきた。彼女が来た時にはもう全てが終わっていた。

「ぐっ……」

「サンソンさん!?! 大丈夫ですか!?!」

階段に突っ伏すサンソンを見咎めてティテユバが駆け寄る。剣は消していた。

「血が出ているじゃないですか！ どうしたんですか？」

見ると確かにサンソンは左太腿から血を流していた。そこには矢が刺さっていた。黒いズボンにどくどくと染み出る赤い液体と対照的に、サンソンの顔色は蒼白になっている。

「僕は……大丈夫です、っ。は、はやく、ソラカラとマタ・ハリに連絡を……!」

「何が大丈夫なんですか！ 早く血を止めないと。座長さんも手伝ってください!」

「え、ああ……」

混乱状態に陥っていた立香はティテユバの声で幾分か落ち着きを取り戻す。ロビンが本気で走って逃げたとすれば、例え彼がマシユという荷物を抱えていたとしても、立香が彼に追いつくのは無理だろう——いや、だが……。

「座長——」

苦しそうな顔で、サンソンが立香を見ていた。「行くな」と、必死で訴えているのがわかった。

「でも……」

「座長さんっ！ しっかりしてください!」

ティテユバが叱咤する。彼女がその言葉に籠めた意味と、立香がその言葉から見出した意味は微妙に違った。

行^ゆけ。

立香は駆け出していた。

3

空々とマタ・ハリが後方から自分達の後をつけてくる集団の気配を感じ取ったのはほぼ同時だった。最初は敵襲かと思ったが、足音の立て方があまりに素人臭いので、そういった手合いではなさそうだと判断する。

「どうしますか?」

空々が聞いた。マタ・ハリは数瞬の間を置いた後、

「アプローチしましょう」と答えた。

かくして二人は——正しく表記するのなら、二騎のサーヴァントは極端に歩みを緩め、集団の姿が見えるまで待った。

奇妙な集団だった。人数はそれほど多くなく、四人ほど。内三人が守衛や憲兵が着るような制服を纏っており、残りの一人は裁判官の黒いローブに身を包んでいた。彼らはマタ・ハリたちに気づくと、少し狼狽した態度を見せたが、踵を返して逃げ出すような真似はせず、憲兵の一人が威厳と威嚇と多少の恐怖を織り交ぜた声で「何だお前らは」と言ってきた。

「はい。旅の劇団『フジマル一座』の者です」とマタ・ハリ。

「この先の御屋敷に泊めていただいております」

憲兵は怪訝な顔をしていた——どうもマタ・ハリたちのことを知らなかったらしい。隣の憲兵は『フジマル一座』の噂を聞いていたようで、質問してきた方に何事かを耳打ちする。

「そうか。ではカーターの屋敷まで案内しろ」

「はい」

彼らの素性を聞くタイミングを推し量っていたマタ・ハリは、現状彼らの神経を逆撫でないよう迎合の姿勢をとることにした。空々も彼女の意図を理解したらしく、黙って彼女の横について歩く。

マタ・ハリは籠絡のプロだった。背中を向けた歩き方一つとって

も、自然に見えるギリギリのラインで男たちの本能を突く。彼らが抱いていた不審の念が徐々に解きほぐれていくのが空々にもわかった。それにしてもこの男達、服装から察するに、まず間違いなく「裁判」の被告を連行する為に動いているようだが、だとすればあの屋敷の誰を連れ去ろうとしているのだろうか。

フジマル一座の者は標的から外される。憲兵の内、少なくとも一人、セイレムに突如現れたこの奇妙な劇団の存在を知らなかった。連行する相手が所属する団体の名を憲兵が知らないというのは不自然だ。だからこの場合は、元からあの屋敷に住んでいるカーター、ティテュバ、アビゲイルの誰かということになるが……。

「……ん」

マタ・ハリは前から誰かが歩いてくるのに気づいた。程無く空々や他の者達もそれがわかったようで、場の雰囲気張りつめる。

カーターが姿を現した。

「君達は？」

「ランドルフ・カーターかね」

カーターの質問には答えず、判事が彼に問うた。

「そうだが……これは何だ？ 君達が呼んだのかね？」と、カーターはマタ・ハリと空々に目を向けた。

いいえ違いますと首を横に振る。カーターの視線は判事に戻された。

「あなたの召使いに『魔女』の嫌疑がかかっている」

感情の無い声で判事が通告した。

これにはカーターだけでなく、マタ・ハリと空々も驚いた。魔女？

よりによって、ティテュバに？

何故このタイミングで？

「ついてはその者の身柄の引き渡しを要求する。魔女は裁かなくてはならない」

「その容疑は確定しているのだろうか。確たる証拠に基づく容疑なのか？」

「あの女が渡した人形のせいで、子供が悪霊にとり憑かれた。異教の

呪術であろう。それが証拠だ——屋敷に案内しろ。女を捕らえるのが先だ」

憲兵が殺気立つ。カーターは閉口し、くるりと背中を向けた。少なくとも現時点では大人しく従うことにしたらしい。

夜道は不気味だった。

4

両手を締め付ける縄は、マシユの力ではどうやってもほどけなかった。

大樹の幹の低い位置に括りつけられたマシユの手縄は、ロビン自前のロープらしい。罨や移動手段として使うのだろうか、かなり年季の入った植物製の縄であるが、驚くほど頑丈にできている。どう引つ張っても千切れることはなく、緩みもしなかった。

「やめとけ」

さきほどマシユを置いて森の奥へ消えたロビンが、いつの間にか戻ってきて、中腰で手首をガンガンと振り回すマシユに言った。赤い痣がマシユの手首にできていた。

「そんなことやってもほどけねえよ。少なくとも生身の人間じゃあな」

ロビンの声は冷静で、いつもと何ら変わりなかった。

「ロビンさん……！ まさか、本当にメディアさんを殺したんですか！？」

「馬鹿言え。俺はやってねえ」

何やら怪しげな小袋を取り出しながらマシユの言を否定するロビン。小袋からはどろりとした灰色の液体が出てきた。それを手に移し、封じられているマシユの両手に近づける。マシユは本能的に暴れた。

「おいおい違うって。塗り薬だよ」

ロビンは半ば強引にマシユの手を取り、赤くなっている部分に灰色の液体を塗り込む。激しい痛みを予想していたマシユだったが、刺激

はいつまで経ってもやってこなかった。

「俺は無実だ」

マシユの前にどかりと座り、ロビンは懽然と言いつつ。

「その証拠に、ほら。猿ぐつわも噛ませてねえっしょ?」

胡散臭い物言いだった。マシユは沈黙を以て自身の意を伝える。

ロビンは「参ったねえ」と頭をかいた。

「本当に俺がやったと思うのか?」

今度もマシユは黙ったままだったが、その沈黙は先ほどとは別の意味を持っていた。

中腰が辛くなり、座る。

「……わかりません」

マシユは立香との会話を思い出していた。

「メディアさんは偽物だったと思いますか?」

「ああ」

「……彼女に、私たちへの敵意はあった……?」

「いいや。無かったね。これは俺の私見になるが——あの変装は悪意や敵意に依るものじゃない。どうしてもそうせざるを得ない状況に陥ったから仕方なく正体を隠した……って印象だ」

「それは何故——」

「さあてね、生憎俺は名探偵じゃない。ただのしがないゲリラなもんでねえ——だからこそ、ゲリラの処世術で生き残らせてもらう。大人しく殺されてやるつもりはない」

ゲリラの処世術。

それが意味するものが、マシユには何となく理解できた。

『「汝は人狼なりや?」ってな。おそらくは同士討ちやら仲間割れやらを誘う策なんだろうが——無効化してやる」

「……あれは、仲間割れを狙う魔神柱の作戦だったと?」

「他に何かある?」

肩に下げている大袋を降ろし、そこに頭を置いて寝っ転がりながらロビンは言う。

「メディアの撃破が可能だったのは、俺とカーター家の人間だけだ。

あいつがカーター家に帰ったことを、あの時点で知りおさせた者は、当時あの家にいた者と当時メディアと一緒に行動していた者に限られる。それ以外の奴らは、そもそもメディアがあの時どこにいたのか知る手段が無い」

「……そうでしょうか」

マシユは俯きながらポツリと呟く。「？」——ロビンの前髪が揺れた。「どういうことだ」

「メディアさんとあの屋敷で予め出会う約束をしていれば、犯行は可能です」

立香にとうとう言えなかったことを、この場でマシユはロビンに話した。

『「犯行」ねえ……。まるでホームズみたいな口ぶりだな』

「茶化さないでください。真面目な話です。おかしいと思いませんか？　メディアさんが急に屋敷に戻ると言い出すなんて」

「確かに変じゃあるがね、一体いつそんな約束がされたんだ？　こつちに着いてから、俺とシャルルとマタ・ハリはかなり早い段階であの女をマークしていたんだ。カルデア組も含め、あいつが特定の誰かと会話した姿を俺は見えていない。怪しげな合言葉なんかも聞いた覚えは無いぜ」

「夜中ならどうですか？　或いは、初日の森の中とか」

「それは——」と言いかけたロビンはそこで口を噤んだ。

最初の森で、ロビンはメディアより一足先に立香達に合流したのでその時の彼女の様子は知らない。夜中もだ。ロビンは男子部屋で寝ていたので、女子部屋にいたメディアの動向は知る術がない。ロビンが目をつけていらなかった時、森ではサンソンが、夜はマタ・ハリが近くにいたため、彼女が不審な行動を起こしてもすぐに鎮圧できると思っていたのだが、当のサンソンやマタ・ハリとメディアが密約を交わした可能性を否定することはできない。味方だと妄信していた彼らの中にも裏切り者がいたとすれば——

「——いや、それこそあり得ねえ。あの二人にはアリバイがある」

立ち込め始めた暗雲を振り払うようにロビンは上体を起こす。

「マタ・ハリは空々と一緒だったし、サンソンはリツカと居た。あの時アライが無かったのは俺と、屋敷の連中——そしてリツカ達と別れて行動したという、マシユ、アンタだ」

マシユは息が詰まるような緊張感に包まれた。心臓が一段と高鳴り、身体が熱くなる。推理小説に出てくる容疑者はこんな感覚なのだろうかと頭の何処かで考えた。

「俺はメディアを殺していない。それは俺が一番よく知っている。だから俺から見れば、メディアを殺したのは屋敷の連中か、さもなきやアンタ以外には考えられない——」

「私はやっていませんっ！」

無意識に叫んでいた。

自分でもこんな大きな声が出るとは思わず、はっとマシユは口を手で覆う。

「……まあ、今までの話は、全てメディアが本当に殺されていた場合の話だ。あの場の痕跡は全て偽装で、あいつがまだ何処かで生きているって可能性も全然ある……。アンタはメディアを偽物だと見抜いていなかったらしいから、そもそもあいつを殺す動機もない。疑うべきはメディアか、さもなきやあの屋敷の住人だ」

その目的が大方がこちらの仲違い、分断を誘うものであることは明白だ——と、ロビンは続けた。

「今回の特異点はいまひとつやり辛え。力押しが出来ないのがもどかしいな。こと軍事力に限れば、カルデアはもうぶつちぎりで世界最強の組織だから、それができりゃあ楽なんだがねえ」

「ぶつちぎりで世界最強……ですか」

「サーヴァントが山ほどいるんだ。死徒二十七祖が総出で襲ってきて、普通に戦えると思うぜ」

もつとも、あの吸血鬼連中がそんなバカな真似をする未来はどうあってもやってこない。無意味な仮定だった。

「アンタにはすまないと思っっている」

マシユの方を見ずに、ロビンは呟いた。

「無理やり連れてきちゃった。だがわかってくれ。あのまま固まって

いるのは危険だった。身内で疑い合って吊るしあげるのは一番避けたいケースだ。こうして外側に逃れちまえば自由に動ける」

「……私は人質ですか？」

「表面的にはな。実際は外側からの援護役として俺と一緒に動いてもらいたい」

どうやらロビンは自身が疑われている状況に耐えかねて無策で屋敷を飛び出したわけではないようだった。このまま殺されるかもしれないと思っていたマシユはほっと一息つくが、しかし今はまだ気を緩めてはいけない局面であることを思い出してすぐに意識を切り替える。

「どうすればいいですか？」

5

遅い。

やはり立香を行かせるべきではなかったか。サンソンは落ち着きなく廊下の方を窺う。太腿を射抜かれていなければ、きっと貧乏ゆすりをしていただろう。

「痛いのか？」

アビゲイルが心配そうに顔を覗きこんできた。「ああ、いや。大丈夫だよ」と誤魔化すサンソン。笑って見せるが、今の自分の笑顔に自信はなかった。こんな男と一人で泣き出してしまわないだろうか——流石にそんな事態はやってこなかったが、彼女の表情は曇っていた。

大人のような表情をしていた。

サンソンは改めてアビゲイルという少女を観察してみる。(偽)メデアの失踪——もし彼女が何者かに殺害されて消失したのだとすれば、犯人はこの屋敷の住人である可能性が高い。そこには彼女も含まれているのだ。もしサンソンが先ほど言った通り、犯行に使われた凶器が毒物であったのなら、腕つぶしの強さは必要ない。寧ろ害の無さそうな人物が運んできた水にこそ被害者は口をつけるだろう。

が、あのメデイアがそんな初歩的なミスを犯すだろうか？

危うい考えをサンソンは一度短く首を左右に振って掻き消す。

「……？」

アビゲイルはこちらを不思議そうな目で見つめ返した。その視線に耐えられず、サンソンは一度顔をそむける。だが、ただ黙っているのも変化と思い、

「君は今日、海の見える丘にいたね」

と声をかける。

アビゲイルは少し驚いたようだった。あの時彼女はサンソン達に気づいていなかったらしい。それなりに距離があったからだろうか。

「ええ、居たわ。マシユ——キリエライトさんから聞いたのかしら？」

サンソンは少し考え、「ああ」とアビゲイルの予想を肯定する。有体に言って嘘だったが、実は物陰から君の様子をしばらく観察していたんだと暴露するよりはましだと思った。

「あの場所にはよく行くのかい？」

サンソンにしてみれば会話を続けるための緩衝材程度に考えていた質問だったのだが、アビゲイルは何故か落ち込んだ素振りを見せた。「ええ」と言っただけ黙り込んでしまう。彼女にとってあの場所は、あまり愉快的な場所ではないのだろうか。

では何故あそこへ行く？

「海が好きなのかな」

アビゲイルは僅かに顔を上げた。サンソンの方を窺っていた。何かを逡巡しているような表情だった。どう答えれば良いのか悩んでいるのではなく、この男に自分の内面を教えて良いものだろうか躊躇っている感じ。僕はあまり信頼されていないのだろうか、サンソンは心の中で苦笑する。子供は鋭い。僕から滲み出る処刑人の臭いをしつかり嗅ぎとっている。今更悲しくなどならないが、一つ溜息を吐きたくなった。

「僕は好きだよ、海」

海が好きというよりは、海が象徴する『自由』という概念に、サンソンは憧れを持っていた。海に生きる人は皆気持ちが良い。金に汚

い商人も多いが、彼らは彼らで潔く開き直っているところに好感が持てた。少なくとも、都市の影で英雄の仮面を被り、正義を免罪符に使い、弱者を虐げる『善人』よりはずっと。欧州の大都市でひたすらに正義の剣としての職務を全うしてきたサンソンである——正義だ悪だと拘らず、自らの欲するままに堂々と、臆することなく生きて死ぬ。そんな人生を歩んでみたいと思ったことは一度や二度ではなかった。「海は良い。見渡す限り、行く手を阻むものは何処にもないから」

無論、実際はそんな理想が通じないであろうことも重々承知している。海で生きるのは困難である。それは何も技能や実力だけの話ではない。いかなる武勇を誇る戦士でも嵐に遭えば死んでしまう。雄大な海は世界で最もお手軽で、尚且つ最も険しき試練の場なのだから。

ともあれこのタイミングでそんな暗くなる説明をする必要はない。落ち込んだアビゲイルに追い打ちをかけてまで海の恐ろしさを語る意味はなかった。

これは彼女を励ます為の話なのだ。

「……サンソンさんは、フランスから来たのでしょうか？」

少し距離が縮まったような手応えがあった。

「ああ。僕はパリ出身だよ」

「パリ！ ロンドンと並ぶ、欧州一の都市ね!？」

『ロンドンと並ぶ』というところに生粋のパリジャンであるサンソンは引っ掛かる感じがしたが、この際スルーしてこくりと頷く。

「良いところではあるよ。迷路みたいな街だから色々ゴミゴミしているけどね。ノートルダム寺院は、たとえ清教徒でも一見の価値ありだ」

未来の情報を漏らさないよう注意しながら、サンソンはパリの話をアビゲイルに聞かせた。オスマン伯爵の区画整理以後の建造物に関しては、サンソンの死後の話なので選り分けは容易なのだが、生前の記憶に基づいて考え無しにべらべらと喋ってしまうとタイムパラドックスが起こりそうな勢いで未来情報を出してしまいそうになる。妙なところに神経を使う会話だった。

それにしてもアビゲイルはとても良い聞き手だった。目を輝かせながら、興味津々でサンソンの話に耳を傾けてくれるし、この歳にしては基礎知識が豊富なので一から十まで説明しなくて済む。サンソン自身の体験談や失敗談を語るのに時間を割けた。リアクションも上々で、お役人——それも首斬り役人のつまらない冗句にも可愛い声をあげて笑ってしてくれる。途中からアビゲイルが聞きたいからサンソンが喋っているのか、サンソンが喋りたいからアビゲイルが聞いているのかわからなくなっていた。

サンソンを暗い夜の現実に引き戻したのは、廊下から響く足音だった。

6

「マシューー！ ロビーン！」

黄昏を過ぎた常緑樹の森の中。

立香は走りながら、力の限り二人の名前を呼び続けた。さきほど木の根っこに足を取られて転んだため、顔も服も泥だらけである。最初は二人が遺した足跡を頼りに走る方向を決めていたのだが、それもいつのまにかわからなくなってしまうた。

しかし、一縷の望みにかけて名前を叫ぶ。

「マシューー！ ロビーン！」

お願いだから返事してくれ。

さきほどからマスター権限による位置情報の共有を試しているのだが、とんと反応が無い。向こうが拒否しているのか、この特異点の性質がそうさせるのか、それとも他に理由があるのか——どうにも判断がつかなかったが、しかしその理由がわかったところで立香の焦燥が晴れないのは明白だった。

知りたいのは二人の居場所だ。

「マシューー！」

耳を澄ませるが、返事はどこからも聞こえない。目を凝らしてみても、人影はどこにも見当たらない。

徐々に暗闇が立香の周りを覆い始める。

自分がどこを歩いているのかすらわからなくなった。きよろきよろと辺りを見渡ししながら、立香は声をあげ続ける。そろそろ喉が壊れそうだった。

「ロビン……マシユ……」

足元には十分注意していたはずだったが、立香はまたもや転ぶ。何かに躓いた。手を地面について衝撃の緩和を図るが、したたかに肩をぶつけた。

「……マシユ……」

転んだまま呟いた言葉が自分の身体の下で反響する。それはひどく弱弱しかった。

何が世界を救ったマスターだ。

後輩一人救えない出来損ないじゃないか。

自責と後悔の念に押し潰され、決して流すことのなかった涙が一粒、ぽたりと大地に落ちた。

駄目だ。泣くんじやない。

ぐつと歯を食いしばり、立香は再び立ち上がる。袖で目元を乱暴に拭いた。まだ少しぼやけているが、どうせ夜だ。問題はない。

応急処置の魔術を自分に施して喉を治す。試しに「あー、あー」と声を出してみても、ほぼ完全に元通りになったことを確認すると、一度すうつと息を吸って、「マシユー！」と絶叫した。

それは『後輩が居なくなる』という恐怖に駆られての絶叫だった。すると後ろでがさりと何かが動く音がした。反射的に振り向く立香。可愛い後輩かと期待したが、そうではなかった。

「やっと見つけましたよー」

ティテユバだった。

暗がりの中に揺らめく炎の光が見える。ランタンか燭台だろう。彼女のいる場所だけが明るかった。

森には慣れているのか、あまり踏まれていない腐葉土をローファーで踏み固めながら、彼女は危なげなく立香に歩み近づいてくる。

あれ？

彼女、ローファーなんて履いていたっけ。

「夜の森は危ないですから、一人で飛び出すのは危険ですよ」

と言いながら、彼女は木の枝に引つかかった自身のスカートを素早く丁寧に片手で外す。灯りが揺れ、彼女の着ている薄紅色の制服が照らされた。

薄紅色？

そんな服、着ていたっけ？

ごしごしと目を擦ってみるが、違和感は拭えない。何かがさつきまでのティテユバと違っていた。容貌は立香の頭の中にある彼女と同じだったが——あれ？

おかしい。

彼女は黒人だったはずだ。

立香は戦慄する。

段々と近づいてくる彼女に。

「狼や先住民にでくわしちゃうかもしれないし、もっと危険な『何か』と遭遇するかもしれないから」

立香は一歩後退った。この時ばかりは溢れ出る恐怖の感情を抑えることなどできなかつた。

何だあれは。

正体不明。

理解不能。

化物、妖怪、ゴースト——

怪異。

「ひっ——」

「おっと」

駆け出そうとした立香の腕を影が掴む。強く握られているわけではないが、それはどれだけ暴れもがこうとも決して外れなかつた。無我夢中になって抵抗する立香だったが、「落ち着いて」という、影から発せられた声を契機に影の方を見る。

それは一人の少女だった。

立香とあまり変わらない年齢に見える。東アジア系の顔立ち。穏

和そうで、美少女と呼ぶに十分値する。カルデア製の制服ではないが、彼女もまた制服を着ていた。少々奇抜なデザインだが、立香には日本の学生服に見えた。

何よりも髪が特徴的だった。黒髪と白髪が混じっていて、ホワイトタイガーのような縞模様をつくっている。

「落ち着いて」

もう一度、こちらを諭すような口調で少女が言う。

「私は味方です」

私は全人類の味方だから——と。

少女は立香の腕を掴んでいた手を離れた。

第七話

0

白い。白くて白々しい。

——苛虎

1

はねかわつばさ
羽川翼の名前は立香も聞いたことがあった。海外の紛争地で平和維持活動を行う日本人がいるとあって、数年前に何処かのテレビ局が特集を組んでいたのを覚えている。なるほど確かに彼女は紛れもなく現代の英雄なのだろうが、しかし英霊の座に招かれるほどの偉業を達成していたとは夢にも思わなかった。

「色々あってね」

羽川翼はおよそ考えうる限り全ての色が溶けたような何とも言えない複雑で——それでいながら嬉しさを誇らしさが隠れている表情で呟いた。

是非その話を聞きたいところだったが、生憎今はそんな呑気なことをしている場合ではない。世界を救った話など聞いていては、世界を救えなくなる。

「申し訳ないけれど、私がこの町の異常に気づいて自分自身の正体を知ったのは昨日の夜なんだ。だから貴重な情報とか、秘密裏に集めておいた戦力とかそういうのには期待しないで。あなた達がやって来てくれなかったら、私は今でも召使いのティテユバとしてこの屋敷で過ごしていたと思うから」

「俺達がやって来たから、気づいたんですか？」

「うん。恥ずかしながら。君達の会話を盗み聞いちゃったんだよね」

『家政婦は見た』、じゃないけれど。

冗談めかして言う翼——立香は結局笑うことができなかった。

「元々、自分の境遇が何かおかしいっていう漠然とした違和感を持つ

ていたんだけれど、うまい解釈を思いつかなかったのね。それで悶々としていたら、君達カルデアのマスターとサーヴァントがこの屋敷にやって来た」

その時、ピンと来たらしい。

立香達の『偽装』は、少なくともこの女性には最初から見破られていたということだ。「だって動きが役者じゃなかったから。ロビンさんなんか、明らかにプロのゲリラか暗殺者って感じでしよう？」それに加えて、彼らが各々の本名を名乗ったのも大きかったらしい。

「ゴルキスの王女メディア、森の義賊ロビン・フッド——二人の名前はこの時代でも有名で、君達は旅の芸人を名乗っていたから、伝説上の彼らの名を芸名として名乗っていたとしても不思議は無かったけれど、藤丸立香、マシユ・キリエライト、シャルル・アンリ・サンソン、マタ・ハリの名は聞いたことも無かった——それにも関わらず、知っている名前があった。正気に戻る糸口は、その辺りから掴んだかな」

その時の立香は羽川翼の説明にただただ圧倒されるだけで、未来の名前から違和感を掴んだと言われても「そうなのか」と納得するばかりだったが、もしこの場にメディアか、そうでなくとも立香より幾分豊富な魔術知識を持っている者がいれば、それがいかに並外れた『破り方』なのか理解し、立香ほどすらすらと飲み下すことはできなかっただろう。確かに認識阻害の魔術は、何か一つ違和感に気づければ破綻させることは可能だ。というかそれだけが術中に陥った場合におけるほぼ唯一の解術法である。だがそれは、実際は歩行不可能な茨の道。

立香は魔術師としての常識など持っていない。だからその辺りで躓きはしなかった。

驚いたのは、次だ。

「ロビンさんはメディアさんを殺していないと思うよ」

その言葉は、これまで表に返された数々の新事実よりも遥かに大きな衝撃を立香にもたらした。

「え……」

「気づいちちゃったんだよね。メディアさんが『具合が悪くなった』って

言って帰って来た時、森の奥からの視線に。透明マントみたいなのを被っていたわ。十五分ぐらい屋敷の様子をずっと窺っていて、『異常なし』って判断したのかな、急に気配が消えたの。誰の視線なのか確認する為に、その後ちよつと尾行してみたらロビンさんだったから、事情を察して引き返したんだけど——だからロビンさんの不在証明は、私が保証できるよ」

「え、ええと——」

「失敗したのは、その時暫く屋敷を空けちゃっていたことね。その間に別の誰かが屋敷に入り込んで、メディアさんに毒入りの水を運んだかもしれないし、メディアさんが一人で何処かに消えたのかもしれない。そこは私にもわからないのだけれど——個人的には、やっぱりメディアさんはあの場で殺されてしまったのだと思うな。彼女があの場から立ち去る理由は、やっぱり思いつかないよ。でも——」

「ちよ、ちよ、ちよつと待ってください」

混乱したまま、立香は羽川翼を押しとどめる。あまりに混乱していて、何故自分がそこで彼女の言葉を遮ったのか、実はよくわかっていなかったのだが、それでもとめずにはいらなかった。

「なんで、なんでメディアさんが居なくなったこと知ってるんですか？　ロビンさんが疑われていたことも——何で」

何でそんなことがわかる？

羽川翼はにっこり笑うと、わざとゆったりした口調で説明を始める。

「メディアさんが居なくなったのはすぐにわかるよ。だってこの家に帰って来たのに、どこにもいないんだもん。ああでも、カーターさんとアビーちゃんはまだ気づいていないかも。君達、わりと大所帯だからね。一人いなくなっても、すぐには気づかないかもしれない。メディアさんが居なくなったことに気づけちゃえば、彼女が失踪したか、あるいは何者かに殺されたんじゃないかってあなた達が考えることもわかる。ロビンさんが疑われることも想像できるよ。今のロビンさんの行動も、その辺りが動機になっているんでしょ？」

「……」

説明されてみれば理解できた。そこに一切の奇跡はなく、一切の矛盾も無い。今ある材料を考察し、そこから見える更に遠い景色を組み立てる。カルデアに居つく名探偵の手法によく似ていた。

立香はこの時羽川翼の推理力に感嘆したが、しかしこれは羽川翼が優れているというよりは立香の推理力に問題がある気がする。羽川翼がここで解き明かしてみせた謎は、正直そこまでの難題ではない。一定の条件を満たせば、誰にでも解法を導くことは可能だ。

「でも、ロビンさんは犯人じゃない」

羽川翼は少し声の調子を落とした。

「それは私が保証します」

「……」

では、誰が。

誰がメディアを殺したのだろう。

羽川翼もその答えは持っていないようだった。彼女は残念そうに顔を横に振った。

「ごめんね」と、申し訳なさそうに呟く。

「私は本職の探偵ではないから、一番大きな謎はまだ解けていない。カルデアと連絡は取れない？ シャーロック・ホームズなら、私たちには及びもつかない考察を披露してくれるんじゃないかな」

「……すみません。何度も試してはいるんですけど」

先ほども立香はマシユと二人で試してみた。通信機の調子が悪いのか——何者かにジャミングされているのか、それとも向こう側に問題があるのか。繋がらない理由も不明なままだ。

「ふうん……」

羽川翼は思案顔で相槌を打つ。彼女なら、或いはその理由に思い至るかもしれないと期待を抱き、彼女の次の言葉を待つ。

「機材に問題はないの？」

「それもわからないんです。俺は魔術に関しては全くの素人で、マシユとメディアさんに頼んでいたんですけど——」と言いかけた辺りで、立香は一つの可能性に気づく。羽川翼も同様の可能性に辿り着いたらしく、

「それ、キリエライトさんかメディアさんが何か妨害をしていたんじゃない？」と指摘した。

何でそこに思い至らなかったんだと自分で自分を責めたくなるほどの間抜け具合だった。

「ごめんね、君の仲間を疑うような発言で本当に申し訳ないと思うのだけれど、でもそこはちゃんと確認しないといけないから問わせてもらうよ。メディアさんとキリエライトさん、どちらかが通信を試みるふりをしてこっそり妨害工作を行っていたっていう可能性はないかな？」

あつた。

物凄くあつた。

「メディアさんが偽物……」

立香の言葉を反芻する羽川翼。超高速で脳みそが回転しているらしく、彼女は小さくリズムカルに頷いていた。

「じゃあ、メディアさん殺害の動機は、あなたたちカルデアのメンバーにもあるってわけだ」

「……」

否定できなかつた。

仲間を疑わないことができない。

それが立香にとつて最も嫌なことだった。本来一丸となつて特異点に挑むべきカルデアの仲間達が、それぞれに疑いの目を向け合つて行動している。かつてなく居心地が悪い。ここへ来てからまだ一日も経っていないが、剣呑な雰囲気は確実に立香をむしばんでいた。

「……空々君が」

顔を俯かせて何事か呟く立香だったが、生憎声が小さかつたためにそれは羽川翼まで届かなかつた。だが立香自身、本当は彼女に聞かせたくない言葉でもあつた。敢えて言いなおすことはしたくなかつたが、彼女が「何？」と聞いてきたので、結局は言いなおす選択肢をとる以外になかつた。

「空々君が、ロビンは偽物だと言つたんです」

今日の昼間。

彼はマタ・ハリと立香だけに、あの義賊の正体が何であるかを打ち明けてきた。

「ロビンは偽物だ——彼は本当のロビンじゃない」

「……根拠は？」

羽川翼は冷静に理由を問うてきた。感情的になりそうだった立香にとってそれは多少アイシングの効果を発揮したが、完全に熱を抑え込むまでは至らなかった。

「空々君の宝具で、それがわかりました」

「空々君の宝具って？」

ここで立香は返答につまる。実際に空々が宝具を使っているのを見たわけでもなければ、その眼でロビンの正体を見極めたわけでもなかったからだった。加えて、空々の宝具の内容をいまだ信用しきれない彼女に教えてしまっただけなのかという疑問もあった。

だまりこむ立香を、羽川翼は訝しんで見つめる。

「君はロビンさんの正体を確認したの？」

「……いえ」

「空々君がそう言っただけなのね？」

頷きたくなかった。

感覚的にわかるのだ。あの少年が——あの小さな英雄が言っていることは紛れもない真実だと。それは他者にわかってもらおうと言語化すると途端に陳腐に成り果てる危うい確信だが、立香自身はそれを信じられる。

しかし羽川翼は立香ではない。

『じゃあ私は寧ろ、空々君の方が怪しいと思うな。偽物なのは彼の方ってことはないかな』——って私が提唱する意味は無さそうね』と。

羽川翼のセリフは、立香の予想していた答えとは違っていた。それはカルデアのサーヴァント達には決して紡ぎ出すことのできない言葉であり、ともすれば立香という人間の最奥部を揺らすかもしれない災害でもあった。

「君、変だよ」

羽川翼は言った。

「ロビンさんが偽物なのに——ロビンさんを偽物と信じているのに、何故君は今ここにいるの?」

何故。

何故藤丸立香はこんな場所にいるのか。

「ううん、それはまだわかる。ロビンさんに攫われたマシユ・キリエライトさんを救うために、単身森へ切りこむ勇猛な挑戦に出たっていうのはわかるよ。でも、それなら何故君は、あんなに大きな声で二人の名前を呼んでいたの?」

二人の名前。

マシユ・キリエライトとロビン・フッド。

「ロビンさんに考え直してもらおうと、会話の席を設けるために声をかけていたんだと思っていただけ、ロビンさんを偽物と——交渉する余地のない『敵』と判じていたのに、何故君はあんな大きな声を出しながら森の中を歩いていたの?」

それって自殺行為じゃない?

羽川翼は言う。

「変だよ」

もう一度繰り返し返す。

「君は何を考えているの?」

2

「いない?」

カーターの屋敷。

憲兵と判事はこの屋敷の召使いであるティテユバの不在に驚いていたようだが、空々とマタ・ハリは我らがマスター藤丸立香およびマシユとロビンの不在に驚愕していた。家に押し入ってきた強盗を追って出て行ったとのことだが、そんな妄言を素直に信じられるほど二人の人生はお花畑ではなかった。大きな疑問は、家主であるカーターがそれを信じ込んでいるという点だが、それはサンソンが自身も

未だ釈然としていない風な顔で説明してくれた。

「ティテユバさんが口裏を合わせてくれたんだ」

マタ・ハリと空々の頭にクエスチョンマークが踊った。

ティテユバが？

何故？

当然サンソンに問うたが、それを聞きたいのは寧ろサンソンの方だった。

「彼女は座長を追って森の中に入っていった」と、サンソンは二人に告げる。

「多分、カーターさんも今頃判事にそう言っているだろう。ティテユバさんが……その、魔女の嫌疑をかけられているとすれば、彼らは彼女の行方を知りたがるはずだ」

「……ティテユバ……」

召使いの名前を呟いたのは、物悲しい様子でベッドに腰掛けている少女、アビゲイルだった。カーターが階下で憲兵の相手をしているので、彼女は二階にあがっていた。一人が怖いらしく、『藤丸一座』の部屋へあがりこんでいた。

いたいけな少女一人をほっぽりだして密談する英雄はカルデアに居ない。マタ・ハリはアビゲイルの隣に座ると、そつと肩に手を置いた。

「大丈夫よ。ティテユバさんは良い人だから、疑いもすぐに晴れるわ」

マタ・ハリは自分の口から出た言葉が自分のものではない感覚に捉われた。彼女自身、ティテユバのことをいまひとつ信用できていなかったのだ。その疑念が伝わったのか、アビゲイルは顔を俯かせて身体を縮めた。

不憫な子だった。両親を失い、親しくしていた召使いまでもが魔女の嫌疑をかけられている。親代わりのカーターがいるだけまだましだが——それでも薄幸の少女であることに変わりはない。

一番不憫なのは、この場に集まるサーヴァント達もアビゲイルのことをどこかで疑っているということである。同情し、可愛らしい少女だとは思っているものの、何処かで彼女にも何か裏があるのではない

かと考えている——マタ・ハリと空々は特に。この部屋の空気にも僅かに溶け込むその気持ちは、決して彼女に居心地の良さを提供しないだろう。

「大丈夫よ」

それでもマタ・ハリは彼女を抱きしめる。

疑いの刃を隠して。

「大丈夫。きつと全て上手くいくわ」

それはアビゲイルだけに向けた言葉ではなかった。

マタ・ハリの抱擁を受けたアビゲイルは、恥ずかしがってサンソンや空々を見渡したが、最終的に彼女もまたマタ・ハリに——おずおずとではあるが——抱き着いた。

外は漆黒だった。

3

羽川翼の追求に立香が何か反論しようとして口を開くよりも早く、羽川は自分の口元に手をあてて「しっ」と短く立香を制した。視線はそっぽを向いており、油断なく森の奥を見据えている。初めはロビンがやってきたのかと思ったが、どうもそんな気配はしない。では昨日の狼だろうか。嫌なタイミングだが、しかし自分一人だけでない時で運が良かったとも言える。

生憎立香の立てた予想は全て外れていて、それは生身の人間達だった。まだかなり離れているのでよくわからないが男の声が聞こえる。会話をしているらしい。内容が気になったが、羽川が「こっち」と手で招きつつ男の声とは反対方向へ進んでゆくので、少し迷ったがそちらに追従する。

「あれは誰なんですか？」

「多分、私にかかっている追手」

羽川の答えは彼女について行く立香の足を止めさせるには十分な衝撃を持っていたが、そうなることはなかった。

立香は自分でも驚くほどすんなりと羽川の言葉を飲み下せた。

「何で——」

「私を魔女だと思ってるみたい」

「魔女って……何故」

「病気の女の子にアフリカ起源のお呪いを教えていたのがいけなかったみたいなの——でも、ちよつと腑に落ちないのよね。いくら自分をアフリカ系黒人だと思いついていたからって、ちゃんとしたお呪いの知識まで無くなってしまふものなのかな」

「アフリカのお呪い？」

「正確には、ナイジェリア北部に分布するお呪い。別に生贄を求めるような過激なものを使わないにしても、せめてもうちよつと効果のあるやり方を教えても良い筈よね。自分が偽物になったからって、呪術まで偽物にしなくても良い——」

「何でそんなもの知ってるんですか？」

「え？」

羽川はきよとんとした顔を立香に向ける。何を言われたのか本気で理解できないという表情だったが、一瞬で彼女の焦点は戻ったらしく、「ああ、知り合いにそういうのの専門家がいたのよ」と答えた。

『『そういうのの専門家』って、魔術師ですか？』

「魔術師——うーん、そうとも呼べるのかな。本人達は決して魔術師なんて名乗らないと思うけど。あと、実際にナイジェリアには行ったことがあるし、本で読んだ記憶もあるから。呪術に関しては私、結構詳しいのよ」

えへへと茶化すように笑う羽川を見て、そういえば彼女は一体どのクラスのサーヴァントなのか聞いていなかったことを思い出す。彼女が頭脳派であるのはこれまでの短い間に理解できたが、であればキャスターだろうか。

「ううん。私はルーラー」

裁定者のサーヴァント。

彼女はそう名乗った。

「単純なバランス調整の役目だったら私よりも適任な人を一人知っているけど、今回の聖杯戦争でルーラーはそんな立ち位置にはいないで

しょう？　だから私が呼ばれたんだと思うな。私はあの人ほど公平に物を見る人間ではないから」

冗談っぽく言う羽川を、立香はいまひとつ信用しきれない目で見る。

「魔女って思われて、これからどこに行くんですか？」

「ロビンさん達に合流するのが理想と思っていたけれど、色々事情が変わってきたからなあ……。セイレムの町は狭いから、どこかに潜むっていうのも現実的ではないから、このまま森の中に潜み続けることになると思う」

「このまま森につて、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。私、サーヴァントだし。サバイバルの心得も多少はあるから」

羽川翼のサバイバルスキルは、『多少』などという言葉で片付くほどのものではないのだが、しかしそこを強調するキャラクター性を彼女は持ち合わせていない。

「ひとつ心配なのは魔力切れだね。このままいくと多分あと四日ぐらいで消えちゃうから、それまでに決着を着けなきゃいけない」

「……俺と契約を結べばその心配は無くなるんじゃないですか？」

と、立香が提案するのはカルデアにいる者ならば誰でも察しがつく流れであり、立香の性格を象徴する行動の一つであり、大抵のサーヴァントはここでその提案を意外に思い、一瞬戸惑うも、結局は申し出を受けるのだが――

羽川翼は違った。

「折角だけど、遠慮させてもらおうわ」

「……」

黙ってしまう立香。断られるとは思っていなかった。「何故」と聞くより早く、羽川が答える。

「さっきの話に戻るんだけどね。申し訳ないけれど、私はまだあなたのことを信用できていないの。魔術師とサーヴァントの契約っていうのは、単なる出力アップだけじゃなくて、魔術師の隷下にサーヴァントが入るっていう意味もあるでしょう？」

立香は押し黙ったまま羽川の説明を聞いていた。彼女が言葉を一度区切り、反論のタイミングがやってきた時、すかさず「さっきの質問に答えることができれば、あなたは俺を信用してくれますか」と問う。

羽川は曖昧に笑った。

「内容によるかな」

彼女は嘘を吐けない人間なのだと思う。律儀に、慎重に言葉を選んでいる。「信用できない」立香に対しても、一定の誠意を通そうとしている様子が見えた。

私は全人類の味方だから。

聖母のような大言——立香も本気で真に受けているわけではない。しかし、それなりの覚悟をもって放った言葉だったようだ。

「俺はマシユを助けないんです」

立香は言う。

「マシユは俺の、大切な後輩なんです」

羽川はほのかな笑顔を浮かべていたが、その瞳はしつかりと現実を見据えていた。

4

ラヴィニア・ウエイトリの祖父は決して孫を蔑ろにしているわけではないのだが、行き過ぎた放任主義の実践者であることは認めなくてはいけない。こんな夜中まで出歩く彼女に、彼は気づきもしないのだから。

セイレムの住民は概ねして規則正しい生活を送っている。日の出とともに起床し、日没とともに眠る。日中はそれなりに賑わう町の大通りも、夜は静寂に包まれていた。

ラヴィニアは周囲を警戒しながら通りを行く。誰もいない筈だが、それ故に日中よりも入念に眼を凝らして辺りを窺う。

「それはできない」とあの少年は言った。

否定は意外だった。彼なら、相手がたとえ何の罪もない無垢な赤ん

坊だろうと必要ならば殺すと思っていたからだ。

「第一に、本当に彼女がこの異変の原因なのか、君の証言以外に確証がない。君こそが真の黒幕で、僕を騙して彼女を殺させようとしているかもしれない」

もつともな意見だ。ラヴィニアにもそれはわかった。

「今はまだ彼女を殺せない。君が自分の言葉以外の証拠を僕達に見せてくれるかしないと」

あるいは——と言いかけて、彼は口を閉じた。何かもう一つの解決法を言おうとしたのだろうが、では何故途中でやめたのだろう。これはラヴィニアの想像だが、倫理的、あるいは現実的に、相当「良からざる何か」が提案の中に含まれていたのかもしれない。

ラヴィニアは歩みを進める。

証拠を見せる為に——アビゲイルの伯父と名乗るあの怪物の正体を月光の下に晒す為に。

手には「イブン・グハジの粉末」。これをかければ、奴は人の姿を保っていられない。

——と。

道の向こう側から人影が歩いてくるのに気づいたラヴィニアは、急いで路地に飛び込んで息を殺す。人影は二つ。ラヴィニアの横までやって来る前に、彼らは道を曲がって消えていった。

憲兵……？

暗くてよく見えなかったが、どうもそんなシルエツトをしていた。何かあったのだろうか。いつもの夜とは違う匂いを嗅ぎとったラヴィニアは、大事をとって普通の道ではなく森の中に行くことにした。

道をそれる。

茂みを掻き分け、星の光も届かない樹木の間へと身体を進める。生まれつき夜目が利くので、他の人間よりは安全に暗闇を移動することができる。あの少年たちの一行には、見つけられるより先に見つかったが——彼らのステータスは常人のそれを超えていると薄々感じているので、あれはラヴィニアの過失には入らない。

彼らが森の中にいるとすればどうだろう？

思いついた瞬間はありえないと一笑に付したが、しかしじわじわとその可能性についてラヴィニアは考え始めた。彼らはよそ者で、おそらくこの町の敵となる者達だ。憲兵たちが出動する事態を招いたのは彼らではないだろうか。だとすると土地勘のない町中よりも、むしろこの森の中へと逃げるのでは――

視界の端で何かキラリと光る。

身を伏せるラヴィニア。地形の起伏に身体をおさめてしまえば、少なくとも視覚に頼る搜索方法では彼女を捉えることは非常に難しくなる。

「いたか？」

一瞬自分に話しかけられているのかと身を強張らせたラヴィニアだったが、すぐに聞こえた「いや、駄目だ」というもう一つの声を聞いて、仲間同士で喋っているのだとわかり、静かに胸を撫でおろす。誰かを捜しているらしいということはわかったが、しかし目標が誰なのかはわからない。やはりあの少年たちだろうか。

「相手は女の召使いだ。そんなに遠くには行けないと思うんだが」

「いや、奴は魔女だぜ。身体能力なんて見かけをあてにしないほうがいい」

女の――召使い？

だとすれば逃げているのはあの少年たちではない。名前が出ていないので確実ではないが、『魔女』の疑いをかけられて追われているのは、あの黒人の、カーター家の……？と。

前方の憲兵たちの会話を聞き取るのに夢中になっていたラヴィニアは、背後から近寄ってくる物音にそこではじめて気がついた。

5

立香がカーターの屋敷に帰って来たのは、深夜十一時を過ぎてから少し経った頃だった。

「マスター！ 無事でしたか」

即席の松葉杖をついて玄関まで迎えに来るサンソンに「ただいま」と言い、笑顔をつくつてみせる。疲れた顔はどれくらい誤魔化せただろうか。彼の表情を見る限り、あまり効果はなかったようだ。

アビゲイルは寝ていたが、ランドルフ・カーターは起きていた。彼はダイニングの椅子に座り、蠟燭の光を見つめながらテーブルの上で手を組んでいた。

部屋に入ってきた立香を見るなり「すまなかった」と、彼は理知的な声で謝罪をした。

「おそらくはウチに入った強盗というのも、ティテユバの仲間か何かだったのだろう。君の団員に怪我をさせてしまった——その、言いにくいことを聞くのだが、他の者達はどこへ行ったのかね……？」

強盗を追っていったカルデアの者達は、自分以外皆死んだのではないかと彼は思っているらしい。誤解を解くのも面倒臭ければ、真実を話せるわけもなく、立香は「わかりません」とだけ答えた。

「……そうか」と、カーター。

重い空気は払拭されることなく、「では、私も今日は寝る。疲れているだろうから、君も早く休んだほうが良い」と言い残して先に部屋を出ていくカーターの背中を眺めながら、立香は薄暗い部屋の中、一人ぼんやりと立ち尽くす。

「彼は地球陣です」と空々が言う。がんと反響するあの少年の言葉に反抗しようとしてみるも、立香の口からは何の音も出てこない。やっと抗議の声が出てきたと思えば、目の前にいるのは空々ではなくマタ・ハリだった。「クウの言葉を真に受けては駄目よ」——違う、そうじゃないんだと叫ぶが、ロビンはサンソンに向けて矢を放つ。どれだけ力を込めて手を伸ばしても、こちらを求めるマシユの手に届くことはない。ロビンとマシユは森の奥へと消えてゆく。「ロビンさんはメディアさんを殺していないと思うな」と羽川翼が言うが、彼女に契約を求めても決して応じてはくれない。俺はマシユを助けないんだ、どうしてわかってくれない——すべては闇の彼方へと消えていき、立香の声に歩みを止める者はいなかった。

セイレム郊外の森。

魔女の捜索は一度切り上げて、早朝に再び開始された。いかに深い森だろうと、太陽の光があればそれなりに遠くまで見渡せる。憲兵たちは疲れた身体に鞭打ち、朝露滴る自然の領域に足を踏み入っていた。

異変が起きたのは捜索開始から一時間ほど経った頃。

「うわあああああつ!?!」

憲兵の一人——比較的若い新兵が森中に悲鳴を響かせた。すわ追いつめられた魔女の反撃かと集まってきた憲兵たちだったが、彼らの期待は裏切られた。

そこにあつたのは死体だった。

緑色の服を着た、成人男性の死体。

顔は判別不可能。血だらけで形もおかしく、完全に潰されていた。近くに太い木の棒が転がっており、これで何度も何度も頭を殴られたのだと推測される。血は乾ききっており、周囲にはこの男の物なのであろうサバイバル用のアイテムが散らばっており、死体のあつた近くの木には、引き千切られたロープが落ちていた。死体に縛られたような跡が無いことから、この死体の男が、獣か何かをそこに拘束していたと憲兵たちは推理した。断定はできないが、これは魔女による犯行の可能性が限りなく高いという意見は、判事も含めて全員が一致している。

「ロビンが……?」

「……ええ」

カーター家二階、二つある客室の内の、現在は男性が使っている部屋。

マタ・ハリの報告を聞いて、サンソンは危うく杖を取り落としそうになった。サーヴァントの身体故、本来ならば一か月は歩けないであろう傷でも既に治りかけではあるのだが、それでもまだ体重をかける

ことはできない。

「キリエライトさんは見つかったんですか？」

「いえ、見つかったのは男の死体だけ。そばに引き千切ぎられたロープがあつたらしいわ」

それを聞くなり、立香は腰掛けていたベッドから立ち上がる。

「行こう。マシユを迎えに行かないと」

それをマタ・ハリが慌てて引き止める。

「待ってリツカ。森の中は既に憲兵がしらみつぶしに搜索しているわ」

「でもまだ見つかっていない。マシユは俺達が助けに来るのをどこかで隠れて待っているんだ」

「憲兵たちは魔女を捜しているのよ？ 人が隠れられそうな場所は全て入念に捜す筈。それに、今は彼らも気が立っているから、森で出くわしたらどうなるか」

既に扉に手をかけていた立香は、しかし一人で飛び出すのをギリギリで抑えたらしく、悔しそうに肩をゆっくり上下させて俯き、そしてマタ・ハリの方を振り返った。

「じゃあ、どうすればいい……？」

今にも泣きそうな声だった。

「繰り返し言うけど、死体は一つだけだったの。顔が潰されていて、憲兵たちはそれが『成人男性』のものとか特定できていないわ。もしかしたら、ロビンのものじゃないかもしれない」

「むしろ、その死体は彼が用意したダミーかもしれないですね」

空々が横から口をはさむ。たしかにそれは最初に疑うべき可能性だった。そもそも、伝説に語られる『森の義賊』を、あんな暗い森の中で仕留めうる者がいるとは考えづらい。

「ティテユバ……」

その名を口にしたのはサンソンだった。

「彼女がもし本当に『魔女』だったのなら、ロビンを殺したとしてもおかしくないのでは」

「……いや、多分違う」

立香がそれを否定する。

「彼女はサーヴァントだった」

皆の間で少しどよめきが起きた。

「彼女の名前は羽川翼。ルーラーのサーヴァントだ」

「いや、そんな……」

ありえない、と否定しようとしたサンソンだったが、自分がティテュバという女性の容姿を全く思い描けないことに気づき、黙る。外見に認識障害の術式が組み込まれていた？ いや、それこそ何のため——サーヴァント？ では彼女は味方なのか？

「羽川翼……もしかして、彼女は現代の英霊？」

「知ってるんですか？」

少しの希望を含んだ顔をマタ・ハリに向ける立香だったが、「いえ、名前から何となく想像しただけよ」と彼女は首を横に振る。

「クウなら知っているんじゃないかしら？」

三人の視線が空々に集まる。「ええ——はい。名前は聞いたことがあります。国際平和維持活動家でしたっけ、テレビで組まれていた特集を見たことがあります」

やはり実際に会ったことはないのか……。と、僅かにあった期待を立香は捨てる。

「契約はしたんですか？」

という空々の問いに、立香もまた首を横に振ってこたえる。「いや。俺達のことを信用してはいないからって、丁重に断られた」

「ってことは、完全に味方ってわけでもないのね」

「……しかし、サーヴァントならカルデアに関する知識も付与されている筈だろう。人類史側のサーヴァントなら、何故我々を信用しない？ 彼女は何か言っていましたか、マスター」

「……」

昨夜のことを全て話すかどうか立香は迷い、「……ごめん、何だかあの人謎めていて」とはぐらかす。

「でも、だからそんなわけで、彼女がロビンを殺したっていうのは、実力的にはもしかしたら可能かもしれないけど、多分違うと俺は思う」

その言葉に対する反応は三者三様で、サンソンは難しい顔をしながらうーんと唸り、マタ・ハリは困ったように笑い、空々は表情を変えず、ただ立香の眼の奥の真意を推し量るようにじっと見つめていた。「……あの、」と。

空々が何かを言いかけたタイミングで、廊下を誰かが歩く音が聞こえた。

「皆さん、おはよう……」

扉から顔を覗かせたのはアビゲイルだった。

「おはよう」とマタ・ハリ。いつものにこやかな笑顔に戻っている。

「どうしたのかしら？ 私たちに何かご用？」

「うん」

彼女は曇った表情のまま頷く。

「お客さんがいらつしやったの。あなた達に用があるみたいで……」

「憲兵かい」

サンソンの質問に、アビゲイルは顔を俯かせて「そうなの」と、再び頷く。どうもあまり景気の良いお客ではないらしい。

しかし会わないわけにもいかない。皆は無言で顔を見合わせて、誰が下に降りるかを確認する。立香とマタ・ハリ——そして空々。足を痛めているサンソン以外、全員でおもむくべきだろうと合意した。

7

マシユー・ホプキンスという小柄な老人は、猛禽のような鋭い眼力と地響きにも似た声色を持つ抜け目のない判事であり、決して油断のならない人物であるという印象を非常に強く立香に感じさせた。

「お前が旅の劇団とやらの責任者か」

立香は黙って頷く。声を出すと、緊張で上ずってしまう気がした。

その態度がホプキンスには不服らしかったが、いちいち咎めるほど小さい人物ではないらしく、「今朝、死体が一つ見つかった」と、彼は話を切り出した。

「しかし町人行方不明者はいなかった。先住民やフランスの残兵で

ないのならば、お前の劇団の者かもしれない。故に、お前が確認に来る必要がある」

「……何故、判事自らここまで足を運ばれたので？」

魔女狩り将軍の異名ならば、マタ・ハリも知っている。ほぼ間違いなくこの町に災いをもたらすであろうこの小柄な判事を、表層では柔和に——しかし内心では警戒して、慎重に質問をする。

「この家には一度足を運ぶ必要があると判断したのでな」

『魔女』が潜んでいた家。

怪しい劇団が宿にしている家。

ホプキンスはカルデア一行をはなから疑ってかかっているようだった。

「……わかりました」

立香は苦い薬を飲む時のように喉を動かした。

「すぐに行きましょう。遺体はどこにあるんですか？」

死体はセイレムの町外れにあった。処刑場も兼ねているらしいその小高い丘には、簡易的な絞首台が設置されており、そのわきに幾つかの盛り土がある。罪人用の簡素な墓だろうとマタ・ハリはあたりをつけた。

例の死体が保管されていたのは、盛り土の隣の掘っ立て小屋。遺体安置室と銘打たれてはいるが、ただの物置にしか見えなかった。すぐにでも埋められる準備がされていて、マタ・ハリは「効率的ね」と皮肉を言う。

「森に放置された身元不明の死体だ。悪意ある何かがとり憑いているやもしれぬ。警戒して当然だろう」

ホプキンスの耳はまったくもって衰えていないらしい。しっかりと聞かれていたようだ。

「さあ、確認しろ。これはお前らの仲間か」

そう言ってホプキンスが指で示す死体は、上に粗衣がかぶさっていて、ただ遠巻きに見ているも判断がつかなかった。意を決して近づくと立香。顔にかかった布の裾をつかみ、ゆっくりと持ち上げる。

これまでに幾つもの修羅場を潜り抜けて、人の亡骸というものにも

それなりに対面してきた立香だったが、それでも悲鳴を抑えるので精一杯だった。

顔が潰されている。

マタ・ハリが教えてくれた通りだった——そういえば、彼女はいつたいどこからそんな情報を得たのだろう。早くも憲兵の中の誰かを籠絡したのだろうか——と、思考を目の前の存在から逃避させてしまいたくなるおぞましきだった。既に人間の顔ではない。乾いた血が黒ずんで、歪な顔面に奇妙な模様をつくっている。首も通常より伸びていて、それが運ぶ過程なのか殴られた衝撃でなのかはわからないが、折れているのが見て取れた。

死体は服を着ていた。泥だらけだが、決してボロボロではない、深緑の装備。ロビンのもので間違いなかった。

「……顔が潰れているのでわかりません」

「そんな当然のことを聞きたいわけじゃないのはお前もわかっている筈だ。服装に見覚えがあるかと聞いている」

無論、ある。

しかしそれを肯定するのは立香にとって躊躇われた。

「……」

「その沈黙は、あたりのようだな」

ホプキンスは見透かすように言った。

「あの魔女はカーターの屋敷を襲った強盗の仲間だった可能性が高い。お前のところのこいつは、それを追って返り討ちにされた——と、そんなところか」

ありえない。

声をあげて反論したかったが、それは立香には許されていないかった。「他に強盗を追って行き、尚且つまだ帰っていない者はいるか」とホプキンスは立香に問う。「はい」と、何とか理性を保って答えられた。「俺の……俺の後輩です」

「若い女か」

無機質なホプキンスの問いが、マシユに対する最大限の愚弄に聞こえた。

拳を握る。暴れ出したい衝動に駆られる。自らを律する最後の殻が「それはやめろ」と押しとどめ、立香の内側で葛藤が起きる。

「……はっ」

勝者は外殻だった。

ホプキンスは立香からマシユの特徴、身元や出身を聞きだし（無論身元に関してはこういう時の為のマニュアルに沿って嘘をついた）、後ろに控える憲兵に共有させた。

「自分の部下くらい守れ」というホプキンスの言葉がいつまでも立香の胸に残った。

8

「もしあれがロビンさんだったとすれば、メディアさんが死んだ可能性は少し低くなりますね」

戻って、カーター邸二階。

重苦しい空気を打破しようというわけでもなく、極めて冷静で冷徹な調子を保ったまま空々が言った。

皆、空々の方を向く。

「この町に来てから僕達の身に起こった『弱体化』——、霊体化ができなくなり、サーヴァントとして現界した際に上昇したステータスもリセットされました。この状態で死んだ場合どうなるのかわかりませんが、仮にあれがロビンさんだったとすれば、僕らの『死体は残る』ということになります。しかしメディアさんの死体はベッドの上になかった」

「だからメディアが生きてもいいかもしれないと……。でもクウ、あのメディアが果たして弱体化を受けていたのか、それは微妙なところじゃない?」

マタ・ハリは言外に「あの偽物のメディアこそが我々に弱体化の呪いをかけた張本人だったのでは」という含みを持たせた。

「やはりあの遺体はロビンではないと思う。彼がこのタイミングで殺される理由がわからないし、そもそも森の中であの男に勝てる者がい

るとは思えない」

サンソンはロビン生存説を推す。

「とするとあれは誰なんでしょう。まさか死体そのものを作成できる技能はロビンさんも持っていないですよね」

空々はあくまでも現実的で、このメンバーの中では一番悲観的だ。

「マスター、マスターの権限でサーヴァントの居場所とかわかりませんか？」

空々の問いに立香は力なく首を振る。元々カルデアの英霊召喚システムは正式なものではないのだ。令呪を通じた感覚共有術すらもできない。加えて、この町は非常に特殊な状況にあるので、もしまともな聖杯戦争のマスターとサーヴァントがいたとしても、普通に通信が行えるかは怪しい。

「令呪で呼び戻すことはできないかしら？」

それはおそらく可能だろう。彼らが生きていれば（そして偽メディアアに関してはマスターである立香と彼女が既に契約していれば）という但し書きはつくが、現在地への強制転移は十分に可能だと推測できる。

だが……。

「仮に呼び出せたとして、平和にことが進むでしょうか」

空々が皆の総意を代弁する。

彼らが死んでいなかったとして、では何故彼らは姿を隠しているのだろう。その理由が、カルデアへの敵意から来るものでないという保証はない。メディアには偽物の疑惑があり、ロビンにはメディア殺しの嫌疑と、サンソンへの発砲、そしてマシユの誘拐という『前科』が存在している。

こちら側の戦力は、サーヴァント三騎と言えば聞こえは良いが、全員が最弱のアサシンクラスである。マタ・ハリは直接戦闘型ではないし、サンソンは腿の傷が完治していない。万全に動けるのは空々一人だが――

「空々君、ロビンやメディアに勝つ自信ある？」

「ありません」

即刻否定された。

確かに彼は物珍しき『現代の英雄』なのだ。サーヴァントの実力というのは基本、時代が進んでゆくに連れて弱まる。となるとあのルーラー、羽川翼にも戦力的には期待しない方が良いでしょう。

手詰まり状態だった。

どう動けば良いのかわからない。

「こんな状況で、劇なんてできないしねえ……」

シエイクスピアとアンデルセンが趣向（と悪ノリ）

を凝らして作ってくれた戯曲を手にとってマタ・ハリが眩く。たった二日で、フジマル一座は四人になってしまった。この人数でできる演目は無い。もつとも、マタ・ハリの言う通り今更劇を公演する余裕がそもそもないのだが。

「カルデアとの通信は繋がらないですか？」

「ああ。マスター達が出かけている間にちよつと見てみたんだが、うんともすんとも言わない。僕が魔術の専門じゃないってのもあるのだろうけど、さっぱりだ」

キャストは既に消えた。いったい何で繋がらないのか、立香達には皆目わからない。

「……あと、あの遺体がロビンのものだったとして」と、マタ・ハリがおずおずと切り出す。言いにくそうな歯切れの悪さからして、彼女が何について言及したいのか、立香には想像がついた。

「マシユはどこへ行ったのかしら？」

第八話

0

だから、
意味なんて……。

——鏡公彦

1

マシユ・キリエライトがロビンを殺していたとすれば——という可能性は、フジマル一座の者ならば誰もが一度は考えた。空々については言わずもがな、暗躍と裏切りの世界を生きたマタ・ハリも、正義と悪の価値観が万華鏡のように変化した時代の人間であるサンソンも——そして立香すら、一度はその『最悪のシナリオ』を頭に描いた。が、それは現実的ではないと全員が結論づけた。

何度も言うが、深緑の装備に身を包んだあの不真面目な青年は、かつて正規の軍隊を相手に壮絶なゲリラ戦をただ一人で繰り広げた伝説の弓兵なのだ。そんな男を、ギヤラハツドの力も無いマシユが、たとえ不意を突いたところで殺しきるのは不可能——不可能と断言切ってしまうのはいささか不安だが、不可能に限りなく近い。

同じ意味で、この町の住人や憲兵が彼を殺した可能性も無い。森の中で彼を殺すには、ロビン・フツドと同等以上のゲリラ兵を用意する必要がある。

では、羽川翼はその条件に該当するだろうか。

彼女の實力は未知数なので確実なことは言えないが、おそらくは否だろう。よしんばそれが可能だったとしてもロビンを殺す動機を彼女は持っていない。「ロビンさんはメディアさんを殺していないと思う」と立香に行ったのは他ならぬ羽川翼なのだ。

だから、あれはロビン本人による死体の偽装説が現時点で最も有力

なのだが――

「――ねえ、ねえ。あの」

「え、あ、何?」

思考に没頭していて、目の前にいるアビゲイルに反応するのが遅れた。立香は誤魔化すように笑顔をつくって彼女に要件を問う。

「大丈夫……?」

怪訝そうに――否、心配そうにこちらを覗き込むアビゲイル。優しい女の子だと思った。

「大丈夫だよ」

嘘を吐いたつもりはない。確かにだいたい削られてはいるが、それでもまだ大丈夫だ。立香はまだ戦える。

「本当?」

「うん、本当」

アビゲイルはじっくりと眉を潜めて立香を観察する。頭の上から靴の先まで。正直少し恥ずかしかったが、しかし堂々と彼女に自分を見せつけてやった。

胸を張ったりなんかして。

「あなたなら大丈夫そうね」

そう言ってアビゲイルは笑った。立香も笑った。

まだ戦える。

状況は依然として全く理解不能で謎だらけだが、それだけは確認できた。

2

おかしい。

約束の時間になってもラヴィニアが指定の場所に姿を現さない。空々とマタ・ハリは目を合わせ、互いに何か彼女から聞いていないかを確認する。

場所はこの前出会った路地裏。時刻は午前の十時。ラヴィニアの住む家からここまで二十分もかからない。

「何かあったのかしら」

周囲への警戒を幾分強めながらマタ・ハリが呟く。「親御さんにお説教されているとかだったらいいんですけど」と、珍しく空々が軽口をたたいた。マタ・ハリが「彼女の親は既に死んでいるわよ。肉親は祖父だけって、昨日彼女が言っていたじゃない」と、少し眉を潜めて言う。

「ああそうでした……」と空々。少し間をおいて「家に行ってみますか」と彼は言った。マタ・ハリもそれについて異論はなかった。ここに来ていない以上、何かあったと推測するのが自然だ。

ではまず、彼女が最後に家に帰ったのはいつなのか。それを探る必要がある。

「マスターには報告しますか？」

「……いえ」

空々の提案をマタ・ハリは否定する。

「まだマスターに説明できるほど情報が揃っていないわ」

「……そうですね」

二人は影のように歩き出した。

アサシנקラスの適性を持つ二人は、旅の劇団という衆目を集める配役に立ちながら、驚くほど目立たずに町の中を移動する。お互い純粹な気配の遮断は得意ではないが、しかしそれでも、彼らはプロで英雄だった。

「刺激が強いですか」

歩きながら空々が言う。主語も何もない不完全な文だったが、マタ・ハリにも意味は通じた。

「そうね——年端も行かない少女を殺すっていうのは、マスターには想像もつかない選択肢でしょうから」

「あれが嘘という可能性も十分にありませんけど」

「あの子に話せば、その可能性しか見なくなるわ」

中々辛辣なことを言う。会話の相手が空々以外のサーヴァントだったら、激高するか衝撃を受けるか、とにかくスムーズな会話は望めなかっただろう。

「何かを救いたいのなら、時として残酷な手段を選択する準備も必要よ。勿論、そちらを選ばないように最大限努力するのは当たり前前だけど」

空々に異論はない。ないのだが、何か反論を言わなくてはいけない立ち位置に自分がいる気がした。

「マスターもその選択はできると思いますよ」

口から出てきたのは、空々のキャラに沿った言葉でしかなかった。愛と平和を語ることは、今の空々には不可能だった。

マタ・ハリは微妙な顔で少し唸る。

「まあ、いざとなったら選ぶのでしようけど……できるだけその道を歩かせたくないと思うのは過保護かしら」

空々はちよつとの間沈黙すると、

「いえ」と、マタ・ハリの言葉を否定した。

「そんなことはないと思います」

それ以降の会話は打ち切られた。二人は黙って歩を進め、カーターの屋敷とはまた別の方角の町外れに構えるウェイトリー家に辿り着く。

一目、ボロ家だった。家というよりは小屋と言った方が正しいのではないかという体たらくで、いかにもはぐれ者の住宅という雰囲気漂っている。ただ、意外に敷地は広く、三世帯で暮らしても余裕で部屋が余りそうな大きさがあった。

近づいてみても印象は変わらない。寧ろ至るところに傷が目立つ。すきま風も多そうだ。

「御免ください」

マタ・ハリがノックし、声をかける。数度その作業を繰り返したが返事はない。

「誰もいないんですかね」

「そうね……」

二人は何となく視線を合わせると、マタ・ハリが取れかけたドアの取っ手を掴む。

が、彼女はすぐに手を離した。まるで取っ手が高温に染まっていた

かのように。

「防犯設備」

彼女はぶらぶらと手を振りながら言った。

「熱ですか？」

「いえ、電撃ね。科学技術のわけがないから、魔術の類いだとは思って
れど……、これはどういうことかしら」

ウエイトリリーの家系が錬金術に通じていることはラヴィニアから
聞いている。彼女の家に魔術的な何かを設置されていて、もそれほど
の驚きは無いのだが、さて、これは本当に不在なのだろうか。

何らかの理由があつて約束の場所に来られなくなったラヴィニア。
それを不思議に思つてマタ・ハリと空々はラヴィニアの自宅にまで押
し掛けた。先ほどマタ・ハリは「御免ください」と声をかけた。マタ・
ハリの声をラヴィニアは知っている。マタ・ハリと空々が敵ではな
い、今すぐ敵にまわる存在ではないと向こうは思っているだろうか
ら、彼女が中にいたとすれば扉を開けてくれる。

したがつて、彼女は家にいない。

では祖父の方はどうだろうか。

祖父と空々達は会つたことがない。だからラヴィニアのようには
いかないだろうが、しかし現実問題、家に「御免ください」と声をか
ける者を無視するだろうか。居留守もまあ、可能性はあるだろうが、
ここは二人とも家を出払っていると考える方が自然な気がする。

では、二人はどこへ行つたのだろうか。

ラヴィニアが空々達と会うのを祖父に咎められた？

では居留守を使つていふということか？

あるいは、別の何者かに祖父ともども連れ去られた……？

「アブサラム・ウエイトリリーはそこにはいない」

そう言ったのは空々ではなく、マタ・ハリでもない。無論、ラヴィ
ニアでもなかった。

「彼は今、拘置所だ」

二人の後ろにランドルフ・カーターが立っていた。

マタ・ハリと空々は何かを掴んでいる。

サンソンは確信をもってそう言うことができた。

マスターにはまだ何も報告していないようだが、あの二人は何かを——ともすればこの特異点の核心部にまで辿り着いていると、そんな匂いを彼は嗅ぎ取っている。

サンソンは聡明な男だ。それくらい察知できるし、立香や自分にそれを報告しないのは、単に情報が集まり切っていないという理由以外に、何らかの「良からざる可能性」が辿る道筋の向こう側に見えていなのだということも推測できた。

サンソンは処刑人だ。正義の剣として己の職務を全うするのが我が宿命。であるなら、あの二人が探索の結果を報告する状態に至った時、正義に沿って決断をくだし、「悪」を処刑するのがこの町に来た意味である。

腰掛けていたベッドから立ち上がり、軽く屈伸する。傷は全回復したようだ。流石はサーヴァント、弱体化されたとはいえスペースは軽く人間を超えている。右手に剣を顕現させて軽く振る。それなりの速度で振ったのに、風切り音が全く鳴らなかったのを確認して、自身の剣術に問題は無いと判断する。これなら誰が相手でも一切の苦痛なく首を斬り、あの世に送ってやれるだろう。

「座長、ちよつと出てきます」

一階でアビゲイルと一緒にソファに座っていた立香に声をかけ、サンソンは玄関の方へ向かう。「どこへ行くの」と聞かれ、ちよつと立ち止まると、「処刑場へ」と、端的に行き先を伝えた。

「え——ま、待って！」

歩みは止めない。ゆつたりとした歩調のまま、アサシンクラスのサーヴァントとして与えられた権能『気配遮断』スキルを発動する。攻撃意志を見せない限り、周囲の人間から認識されづらくなるというこの技能は、マスターである立香にも有効だろう。

僕一人の方が都合が良い。

何と出くわすかわからないから。

4

「……拘置所？」

カーターの言葉をマタ・ハリが反芻する。困惑の色の中に、多大なる警戒心が塗りこめられていた。

背広の紳士は表情を変えない。空々達との距離はおよそ5メートル。海風が常時音を立てているとはいえ、気配を察知して然るべき位置だったが、二人とも、今の今まで全く気づかなかつた。

まるで突然現れたように——初めからそこにいたかのように、彼はそこに立っていた。

「何故ですか？」

空々が聞く。

「彼が『魔女』だったからだ」

カーターが答える。

本日は晴れ——ゆったりと穏やかに雲が漂う、まさに平和を象徴するような天気だったが、上方一面に広がる青はなんだか、空々しかった。

「今朝方の話だ。アブサラム・ウエイトリーは『魔女』として告発された。もうすぐ裁判が始まるだろう。有罪になれば、町の北にある丘で処刑される」

「誰が告発したんですか？」

「私だ」

間髪入れず、彼もまた眉一つ動かさずに応答した。

「……なるほど」

それ以外は何も言わない。この場で何か言っても無駄だと、空々もマタ・ハリも思った。

「では、ラヴィニア・ウエイトリーはどこへ行ったのでしょうか」

「それは私の知るところではない」と、彼はマタ・ハリの質問を切つて落とす。「家にいないのなら、町のどこかにいると考えるのが自然だ

と思うがね」

「彼女は、祖父が告発されたことは知っているんですか？」

「私の知るところではない」

カーターは同じ言葉を繰り返す。

「ただ、今朝アブサラム・ウエイトリーが連行された時、彼女は家から顔を出さなかった」

「……」

再び沈黙。マタ・ハリも空々もカーターも、誰一人として臨戦態勢に入っていないが、一步でも動けば誰かの首が落ちるような——ひとつ何かを間違えれば、全てが崩壊してしまいそうな緊張感があった。

「何故ここへ？」

マタ・ハリが更なる問いをぶつける。カーターは僅かに首を動かすと、「それはこちらの質問だ」と言った。

「彼女を捜しているんです」

惜しげもなく自分達の目的を明かしたマタ・ハリに、空々は一瞬視線を遣るが、しかし交渉事においては彼女に一任すると決めているので咎めない。

「見かけたら、教えてください」

「……了承した」

カーターはくるりとこちらに背中を向けて歩き出す。

「何か用があったんじゃないんですか？」

「時期が悪い。また出直すことにしたよ」

こちらを見ずに彼は答えた。

「時が加速している。君達も気をつけた方が良い」

帽子を目深にかぶった彼は、マタ・ハリたちに届くか届かないかぐらいの大きさの声でそう呟いた。

同じころ、立香とアビゲイルは一緒にカーター邸を出て町外れの丘——有事の際は処刑場として使われる丘を目指し歩いていった。

「サンソンは丘に何の用事があるのかしら?」

速いペースでずんずんと進んでいく立香に置いて行かれないよう、アビゲイルは半ば駆け足で、少し息が弾んでいる。

「……彼はフランスのお役人だったんだ」

立香は前を向いたまま言う。

「彼は正義のために働いていた……何度正義に裏切られても、彼は正義を執行し続けた。今回もまた、彼はその為に動いている」

立香の言っていることは抽象的で、アビゲイルはいまひとつ理解ができなかったのだが、ここで更に質問を重ねてはいけないということは察する。

お役人。

サンソンは一体どんな仕事をしていたのだろう。

知りたくなかったが、立香に聞くのは憚られた。

「……ねえ、座長?」

立香は反応しない。ひたすらに前を向いて歩いている。一緒にいるアビゲイルのことを忘れてしまったようにすら見えた。

「あなたは、サンソンに追いついてどうするの?」

「――」

決まっている。

止めるのだ。

十字架の重みに押しつぶされないように、彼を支える。

それがマスターとして立香ができる、唯一の手助けだ。

何かを――そういった意味の何らかの何かを答えようと口を開いた時、立香の背後でドサリという音が聞こえた。慌てて振り返ると、アビゲイルが前のめりに倒れている。

「アビー!?!」

急いで駆け寄って声をかける。アビゲイルは荒い息を吐いていた。経験則で彼女の額に手をあててみる。「熱っ」ひどい熱だった。驚きとともに立香は困惑する。今の今まで熱の素振りなんて全くなかったのに……。何だ? 何が起きたんだ? 敵の襲撃があつたのかと思ひ、周囲を見回すも、そこは至って普通の畦道。周りには畑と家が

見えるのみ。不気味な敵影などどこにもない。

じゃあ急に発熱したのか？「アビー、大丈夫？　もしかして無理してた？」と、彼女を背におぶりながら尋ねてみる。

「違うの……今……突然……」

急な発熱らしい。どうしようどうしようと立香は少しの間道を右往左往し、当初の予定通りサンソンに追いついて、医者でもある彼に判断を仰ごうか、それとも一度カーターの家に戻ってベッドに寝かせようか迷う。結局、サンソンが見つからない可能性に鑑みて、立香は元来た道を急ぎ足で辿り始めた。

6

「……んん」

森の中——樹上。

羽川翼は悩まし気な顔をしながら小さく呻く。非常に難解な現在の状況を整理しようとしているのだが、これが羽川の頭脳をもつても難しい。

情報が少ない——というよりは、どれもこれも信用度が低い。羽川自身の眼で見たことは一応信じるが、この町は認識障害が起こりやすいために、100パーセント信用できる推理材料は皆無と言って良い。

魔神柱の目的はすぐにわかった。正体も、魔神の目的の為の鍵となる存在も。だから今すぐにも魔神柱の目論見は破れるし、魔神柱そのものに決闘を挑むことだってできるのだが、しかし羽川はそれをしていない。

単純に、魔神柱とタイマンを張って勝てるほど自分の力を高く見積もっていないことに加えて、そこにはもう一つ理由がある。

第三勢力の気配がするのだ。

カルデアを始めとする人理保障の勢力、ゲーティアの残党である魔神柱の他に、何か、得体の知れない何かが入入している気がする。

それがメデリアを殺した。

メディア殺しの犯人を炙り出さなければいけない。それを特定せずに魔神柱との戦いになれば、きつとその「何者か」に背中を討たれてしまう。

「それを特定することが、私の呼ばれた理由なのかな」

既に羽川はティテュバという召使いの異質な立ち位置に気づいている。カルデアに救難信号を送ったティテュバと、現在のティテュバ——すなわち羽川が同一人物ではないことに思い至っている。人類意志「アラヤ」が、カルデアへの助っ人として召喚できるサーヴァントが、この町では一騎が限界だったのだろう。だからまず羽川の前の「ティテュバ」を呼んで救難信号を送り、実質的な助っ人を羽川に任せただのだ。

しかし、何故羽川と前任のティテュバを交代させた？

前任のティテュバでは力不足だったのだろうか。「カルデアとの通信要員」、「アフリカの原始呪術」等、幾つかの材料から自身の前任者を「シバの女王」と推理した羽川は、本当に何で自分なんかが後任になったのか不思議でしょうがなかった。羽川の言う「第三勢力」の正体が扇ちゃんだったりするのだろうか。それだったら確かに納得のキヤスティングだが……。

——ロビンは偽物なんです。

思い出すのは立香の言葉。無論、言葉通りにロビンを疑うわけではないが……しかし、ひとつの指標としては最適だった。

ロビンを偽物と断定したのは確か、空々空という少年。

現代の英雄にして、日本人。

この辺りに、羽川が召喚された理由もありそうだ。羽川は寡聞にして空々空という少年を知らないが、同世代を生きた者同士、何か因縁のようなものがあるのかもしれない。

藤丸立香というあのマスターもまた日本人だが……さて、こちらにも羽川が生前出会ったという記憶はない。人理保障機関「フィニス・カルデア」には、多少なりとも関わりを持ったことがあるのだが——
……やめておこう。手繰るべき糸は「第三勢力」の痕跡だ。

第三勢力——メディアを殺し、たった一日でカルデアをバラバラに

せしめた正体不明の勢力。

しかし目的がわからない。人類を守る戦いに身を投じているカルデアの勢力を妨害して何を得たい？ 人類史側の存在でないのは確定だが……そんな者が果たして存在するのかわかるのか？

ここでもしカルデアが敗北すれば、全てが無に帰すのだから？

そんなことを望む者がいるとは思えない。

そんな、世界の終わりを望む存在など――

まるで最悪だ。

いる筈がない。

7

アブサラムの裁判は確かに行われていた。

傍聴席に顔を出したマタ・ハリと空々は、館内にラヴィニアの姿を捜しながら裁判の様子を窺う。

裁判と言っても魔女裁判である。狂気と言って良い破綻した裁判を、魔女狩り将軍マシュー・ホプキンスが取り仕切っている。

被告はアブサラム一人だけではなかった。全員で七人。全員が全員「魔女」の嫌疑をかけられた者だった。

「そなたが魔女でないというのなら、証拠を見せよ」

狂っている。あきらかにおかしい。しかしそれを「おかしい」と止める者はマタ・ハリと空々を含めて誰もいない。黙って傍聴している時点でこれをおかしいと咎める資格はないのだと、マタ・ハリは自分を苦しめるように唇を噛む。

ついに始まってしまった。

悪名高きセイレムの魔女裁判。民衆の意志で、合法的に人を吊るしていく集団パニック。「神権の崩壊」と呼ばれた惨劇。

幸いなのは、今の時点ではまだだれも処刑台に立たされていないということである。昨日の「魔女」ティテユバは依然として逃走中だし、この裁判はおそらく今日だけでは終わらない。今ならまだ犠牲者はゼロで済む。

「早めに行動した方が良さそうですね」

空々がそつとマタ・ハリに耳打ちする。

確かに裁判が始まってしまった今、のんきに証拠を探している場合ではないかもしれない。

魔神柱の候補は一人、あがっている。

他に有力な者もない。

「ええ、そうね」とマタ・ハリは答える。カルデアのサーヴァントも、現状三騎まで減らされた。そろそろ反撃の一手を打たなければ、このままずると敵の術中に引き込まれてしまう。

と、マタ・ハリの肚が決まり、空々に「ここから出ましょう」と声をかけて今後の対策を練ろうとした時、彼女の視界に知り合いの姿が映った。

サンソンだった。彼もまた傍聴席の端に立って裁判の様子を眺めていた。

「サンソン」

目立たない声の大きさを彼の名を呼ぶ。するとこちらに気づいたらしく、「失礼、ちよつとすみません」と言いながら傍聴人たちの間を駆けわけてきた。

「あなた、腿はもういいの？」

「ああ。さすがは神秘の肉体だ。傷の治りも早い」

「何でこんなところにいるんですか？」

「どうしても調べたいことがあって、半ば無理やり屋敷を出てきたんだ。その帰りに『魔女裁判』が開かれるという噂を聞いたから、様子を見に来た」そこまで喋って、彼は表情を不愉快そうに歪める。この裁判への嫌悪感を露骨に表していた。

「君達こそどうしてここにいるんだ？」

「ラヴィニアさんを捜してここまで来たんですけど、見かけませんでした？」

「ラヴィニア？」

サンソンは首を傾げる。

そういえば彼はラヴィニアの顔を知らなかった。

「アルビノの女の子です。アビゲイルと仲が良いとか」

「アルビノの……？ ああ、初日の森で君が会ったという子か。いや、僕は見かけていないよ。どうして彼女を捜しているんだ？」

空々とマタ・ハリは一度顔を見合わせる。

「とりあえず、ここを出ましよう」

マタ・ハリがそう言っただけで出口の方を向いた時、視界の外で「どきり」という音が響いた。「なんだろう」と、この時彼女は比較的呑気な調子で後ろを振り向いた。誰かが何かを落とすたのだろうか、それともホプキンスが槌を打った？ いずれにしても、そこまで重大な音には聞こえなかったために、ゆっくりと視界を動かして音の原因を探り——サンソンが倒れていた。

「……え？」

静寂。

一瞬の間の後、悲鳴。

さざ波のように割れる傍聴人たち——円形にできた即席の舞台に倒れているのは、今の今までマタ・ハリたちと会話していた青年、シャルル・アンリ・サンソン。黒いコートを着ているためにわかりづらいが、背中からどくどくと鮮血を流している。鉄の匂い。彼は青褪めた顔を、苦しそうに歪めながら後方に向ける。

視線の先に、少女。

桜色よりも薄い——儂さと脆さを象徴するかのような色の髪で片目を隠し、更に眼鏡をかけている。黒いコートの下は、ぼろ布を継ぎ接ぎで仕立てたような薄汚い、そして見慣れない服。いかにも運動が不得手そうな細腕には、至るところに擦り傷と切り傷が目立つ。特に手首。何度も擦ったような痕が痛々しかった。

両手で持つのはナイフ。

実用というよりは何かの儀礼で使いそうな、繊細な彫刻が施された銀のナイフ。綺麗に手入れされた刃は、本来ならば美しく陽光を反射するのだろうが、残念なことにはここは室内。ぼたぼたと滴る朱い液体もまた自身の色を強調するのみで、窓から差し込む光を呑み込んでいく。

刃先が震える。その振動は彼女の手から腕へと伝わり、遂には身体全体へと伝播する。眼鏡の奥に見える瞳から読み取れる感情は驚愕――、自分のやったことに驚いているような、自分が何をやらかしたのか今初めて気づいたというような、驚きの色が垣間見えた。

「――何を」

未だ混乱から脱せないマタ・ハリは、半ば無意識で口を開き、問う。

「何をやっているの?」

第九話

0

食い物は簡単に手に入りすぎる……あれじゃ食う気も失せちまう。

——ハツクルベリー・

フィン

1

マシユ・キリエライトは刃を降ろさない。

かたかたと震えながら——ナイフを腰の辺りに構え、突撃の姿勢をとる。視線の先にはマタ・ハリ——では、ない。木製の床板をふらふらとした足取りで踏みしめ、彼女は無言のまま標的へと近づく。非常に短く、一歩、二歩。ゆつたりとした足取りからは打って変わって俊敏な動作でナイフを逆手に持ち替えると、渾身の力を込めて振り下ろす。

未だ息を残すサンソンに向かって。

が、彼女の追撃は敢え無く失敗する。マタ・ハリが横から彼女に飛びついたので。

「——っ！」

飛び込みの軌道が変わる。当初の予想より左へ——当初の予想より手前へ。お世辞にも柔らかいとは言えない木目の板に転がり落ちた二人は、しかし荒事の経験値に天と地ほどの差があり、ただ起き上がろうとしたマシユと違い、マタ・ハリはまず何よりも先に彼女のナイフを拾い上げて投げ捨てた。

裁判所の柱に、びいんと銀のナイフが刺さる。近くに立っていた女が数コマ遅れて悲鳴をあげた。

取っ組み合い。マシユは標的をマタ・ハリに変更したらしい。ナイフを投げ捨てた分、マウントの取りあいはマタ・ハリが不利となった。

サーヴァントの怪力で圧倒できればよかったが、生憎今は弱体中。それでも膂力では勝てる筈だが、明らかにいつもと様子の違うマッシュに攻めあぐねる。

「サンソンをつー！」

マタ・ハリに加勢しようとした空々を視界の隅に捉え、手早く助けを拒否する。こっちは問題ない。だからあそこで倒れているサンソンを助けに行ってくれ——短い言葉で彼女の言いたいことを汲み取ったらしい空々は、取っ組み合う二人を無視して黒いコートに駆け寄る。

「背中ですか……」

素人判断で、これ以上の出血を防ぐべく傷口を手で押さええる空々。近くに突っ立っている者を指さし「医者を」と頼む。サンソンの顔色は頗る悪い。ごふりと咯血する。細かく息をしているがとても苦しそうだ。肺だろうと空々はあたりをつける。空々が押さえたから外に血液はあまり漏れていないが、内側は別だ。肺を刺された場合、そこから血液が肺に溜まって窒息する。

「ソラカラ……」

「はい」

喋らないでくださいとは言わない。そんなことは医者であるサンソンが一番よくわかっている筈だ。彼がここで喋る意味、それを空々は理解し、耳を傾ける。

「さつき……ロビンの死体を……診たんだ……」

「はい」

サンソンが更にごふりと血を吐く。空々はサンソンの顔に耳を近づける。じわじわと広がる血が膝にべったりと付着するが気にしない。弱々しい声で綴られるサンソンの言葉を聞き逃さないよう、全霊をかけて聴覚を研ぎ澄ます。

「——あれはロビンだった——」

それから間もなく、彼の首から力が抜ける。

咯血が止まる。空々の手から伝わっていたドクドクという振動が弱まっていき——停止する。

死亡。

セイレムでの、三人目の脱落者が生まれた。

2

自身の首を絞めようと近づくマシユの両腕を同じ両腕で掴み、渾身の力で食い止めながら、マタ・ハリは脚を持ち上げて身体を振じり、馬乗りになるマシユのバランスを崩そうと試みる。と、裁判所の守衛らしき男が横からマシユに体当たりをかました。第三者の乱入など毛ほども気にしていなかったマシユは、大男のタツクルに為す術なく吹っ飛ばされ、マタ・ハリの上から横に倒れた。そのまま組み伏せられる。かみつきひつかき暴れるが、守衛の男には武術の心得があるらしく、順当な結果通りマシユは完全に制圧された。

マタ・ハリは乱れた髪を撫でつけながら起き上がる。サンソンが倒れていた方を見ると、服を血だらけにした空々がサンソンの傍に突っ立っていた。それだけでマタ・ハリは全てを悟る。「そうか」と声が漏れた。何が起きたかを理解したから出ただけの「そうか」だった。サンソンの死をマタ・ハリの頭は理解した。しかし心が実感するまで、多分まだ数十秒ある。その数十秒の内に、やっっておかなければならないことがあった。

「大丈夫ですか……？」と声をかけてくる周囲の者たちに「ええ」と反応すると、マシユの方に近づく。彼女は数人がかりでおさえられ、両手両足を縛られている途中だった。

「マシユ」

マタ・ハリが声をかけても、彼女は反応しない。

「マシユ。どうしてこんなことしたの？」

彼女は何も喋らない。力を失った視線を床に垂らしたまま黙秘し続ける。

「マシユ。答えてちょうだい」

周りの者達も空気を察して動きを止め、静寂をつくる。しんとなる裁判所内で、それでも彼女の声は聞こえてこない。マタ・ハリは一つ

深呼吸をする。これ以上何を聞いても無駄だと思ったようだった。彼女は祈るように深く視線を降ろし、そしてまたマシユを見つめる。平手打ち。

左頬に一発。パアンという音が静寂の裁判所に響く。マシユの眼鏡が吹っ飛び、からんと音を立てて床に転がった。マシユは一瞬驚いたように目を見開くも、のけぞった首が再び項垂れるのと同時にまた目を伏せる。

「ふざけるな」

それがそこに立っている踊り子から出た声だと瞬時にわかった者はいなかった。

彼女は深層の海流よりも暗く冷たくて、地底のマグマよりも熱く紅い眼をしていた。

「態度に気をつける小娘。お前が何をしたのか、わからないとは言わせない」

静寂。

マシユを睨むマタ・ハリの眼から涙が伝う。

マシユも泣いた。

マタ・ハリの少し後——ぱちくりと瞬きをして二秒ほど我慢したが、すぐに決壊して「ううう」と声を発した。

ぼろぼろと大粒の涙をこぼす少女の姿に、彼女が今さっき何をしかしたのか鮮烈に記憶しているはずのギャラリーが、同情のような憐憫のような感情を持ち始めた辺りで、泣き続ける少女がえさきながら口を開いた。

意味を為さなかった単語を繰り返し発音しているうちに、それは「先輩」という言葉へと進化する。

「先輩……、先輩は、せんぱいは……！」

先輩は私が守るんです——と。

彼女は泣きながらも、力強く言い切った。

それがこの時発した唯一の意味ある言葉であり、

そしておそらくは、マシユ・キリエライトの生涯で最期となる言葉だった。

「え……？」

カーター邸。

室内は暗い——先ほどまで晴れていた空を雲が覆ったらしく、部屋の中に届く光が少ない。服を着替えた空々は戸棚からコップを取り出して瓶から水を注ぐ。マタ・ハリは疲れを隠そうともせずソファに座っていた。アビゲイルとカーターはいない。アビゲイルは彼女の部屋のベッドで横になっている。カーターはまだ家に戻っていない。リヴィングには、カルデアからの来客しかなかった。

三人——否。

正確には一人と二騎。

空々がコップの水をぐいと飲む。彼の喉を水が通る音だけが、三人だけでくつろぐには広すぎるこの部屋に響く。

「ごめん……。もう一回言ってくれる？ 変な風に聞こえてさ——ごめん、よく聞いてなくて」

「マシユがサンソンを殺した」

マタ・ハリは冷たい声で言い放った。

心なしか、苛立っている風に見えた。

「裁判所の人ごみに紛れて背中をナイフで一突き。あばらの内側に空気が溜まって、しぼんだ肺に血が流れ込んで窒息死。その後もちよつとは生きていたけれど、刺された時点で助かる見込みは無し——裁判所の床の上で彼は死んだわ」

立香は曖昧な表情のまま一筋の汗を流す。冗談でしょう？ と言いついそうになる口を必死に抑え、手に持っていたタオル——アビゲイルの汗を拭く為に水で濡らして絞ったタオルを床に落とした。

「……何で……？」

「わからない」

マタ・ハリは口を結ぶ。それ以上は何も喋る気がないことを示していた。

「キリエライトさんは今、牢に閉じ込められています。明日の午前中に裁判が開かれ、彼女の処遇が決まるだろうと裁判長は言っていました」

コップをテーブルに置いた空々がマタ・ハリの説明を補足する。「彼女が身に着けていたものや、犯行に使われたナイフは全てウエイトリー家のものでした。彼女は昨日ロビンさんを殺した後、森を抜けてウエイトリーの家に潜伏していたものと思われまます——アブサラム・ウエイトリーが連行された後ですね。多少の疑問はありますが、おおむねこの予想は当たっているでしょう。ラヴィニアさんも殺されたものだと思いますが、遺体はまだ見つかっていません。ええ、あとサンソンさんの遺体は例の、丘近くの遺体安置所に運ばれました。ロビンさんと同じで、葬式は明日執り行ってくれるそうです。まあ有料ですけど——お金に関しては心配ないですよね」

空々は窓の外を見る。空には雲がかかっているが、この厚さでは雨に降られることはないだろう。風が吹いているらしく、顔を近づけている窓ガラスがカタカタと揺れた。

「裁判所に立ち寄る前、サンソンさんはロビンさんの遺体を診たそうです」

ここで初めて立香は空々の方を向く。サンソンが最後何をしたのか。それは最も気になるところだった。

『あれはロビンだった』。それが彼の最期の言葉でした」

マタ・ハリは特に何も反応しない。帰り道で既に聞いた。ソファに座りながら、ぼんやりとした眼で虚空を見つめながらその言葉の意味を考える。

「何で……」

立香は空々に詰め寄る。

「根拠は聞いていません——そんなに時間が無かったのです」

そして、と、空々は言葉を続ける。立香の頭がサンソンの遺言を理解するのを待つことなく、「キリエライトさんは——サンソンさんを殺し、マタ・ハリさんと裁判所の守衛に拘束されたところで、『先輩は私を守るんです』と言いました」

もう一つの手がかり。

マシユの言葉を、空々は彼女の「先輩」へ伝えた。

「俺を……？ 守る？」

「サンソンさんを殺したのはマスターを守るためだったんでしょうか」

「そんな筈ないわ」

空々の予想をマタ・ハリがバツサリ切る。相変わらず疲れが見えるが、声のキレはナイフのように鋭利だった。

「サンソンが偽物だったとでも言うの？ そんなのありえないわ。もし彼が偽物で、魔神柱側の存在だとしたら、どうして私たちはまだ生きているの？ 暗殺の機会はいくらでもあった筈よ」

「今日の昼に本物と偽物が入れ替わったのかもしれない。その瞬間をキリエライトさんは目撃して、『偽物』のサンソンさんと僕らが接触したから急いで殺した——とか」

「だったらどうしてマシユは私たちにそう説明しないの？ 何で彼女は今も黙秘を続けているのかしら。そもそも何故彼女はウエイトリーの家の服を着て、ウエイトリーの家をナイフを持っていたの？ 説明のできないことがあるすぎる」

マタ・ハリの言っていることを理解しようとしたが、そもそも立香はウエイトリー家が何なのか知らなかった。「ウエイトリーって？」と、それがいかに空気を読まない質問であるかどうか重々承知しつつも会話についていけなくなる方がまずいと思って尋ねる。どちらかというともマタ・ハリではなく空々の方を見ながら。

「ウエイトリー家は『外なる神』と呼ばれる神格の召喚を悲願とする魔術師の一族です。魔神柱は彼らを脅し、外なる神の召喚を急がせ、その神の力をもってして人類史の終焉を目論んでいます」

「……外なる神？」

これはほぼ全てラヴィニアさんの受け売りですが——という前置きをして、空々は更に一步踏み込んだ説明を始める。が、寧ろ立香にとって役立つのは説明そのものよりも前置きの方だった。「ラヴィニアさん」という人物に心当たりがあったのだ。そうだ、それは確か

空々に助けを求めてきた少女の名前だ。なるほど、そこで空々とマタ・ハリが調べた道筋に「外なる神」なんてものが浮上するのかと納得しながら、いかに自分が物語の蚊帳の外にいたのかを自覚する。いや、より正確に言うのならそれは立香が遅れているのではなくマタ・ハリと空々の調査速度がおかしいのだが、たった三人になってしまった現状では、独断専行していた二人こそがアヴェレージになっている。

迅速を心掛けた方が良いなんてレベルではない。

迅速に徹しなければ死ぬ。

立香が今なお生きているのは、ただ単に運が良いから——運が良かったからというだけに他ならない。次の瞬間に絶命したとしても抗議の余地はない。死人に口なし、そもそも抗議なんてできないが。自分がどうして死ぬのか理解できずに死んでいく。

そんなまぬけになり下がるだろう。

「……サンソンは」

と、ここでふと立香の口から言葉が漏れる。気になってしまったのだ。彼は——あの処刑人は何で死んだのだろうと。彼は自分が死ぬ意味を理解していたのか？

「サンソンはどうして殺されたんだろう」

マシユはどうして彼を殺した？

「わかりません」

空々が答える。

裏も表もない——實在すら疑われそうな空っぽの声色で彼は呟く。虚構そのものの言葉だったが、立香はそれを信じることができた。信じることしかできなかった。

「先輩を守るため、じゃないの」

皮肉にも似た笑いを交えてマタ・ハリが嘯く。もう苛立ちを隠す気はなくなったらしい。彼女は怒っている。サンソンを殺したマシユに対して——そしてきつと、立香にも。

「確かに、そこには理由が必要ですね。あの裁判所にはサンソンさんだけじゃなくて、僕も、マタ・ハリさんもいた。もつと言えば大勢の

傍聴人や裁判所関係者、被告人もいた。殺そうと思えばその中の誰だつて殺せたはずです。それなのに何故、キリエライトさんはサンソンさんを狙ったんでしょうか？」

「それは——」と言いかけてマタ・ハリは口を閉じる。どうでもいい問題に見えて、案外重要な謎かもしれないと彼女も思ったらしい。

何故マシユはサンソンを狙った？

「偶々一番狙いやすい位置にいた」という理由で片付けることはできる。確かに彼は裁判所から出る前、三人の一番後ろを歩いていた。刺されたのは背中。それが一番自然だ。

それ以外に考えられる理由はないだろうか。

「戦力を削る」という考え方はどうだろうか。仮に、マシユが魔神柱に操られていたと仮定して（この仮定を立香は一番信じたい）——三騎のサーヴァントの内、最も戦闘力が高いのはおそらくサンソンだ。だから直接戦闘が始まる前に殺しておく——いや、これはいまひとつ説得力に欠ける気がする。諜報員のマタ・ハリはともかく、普通は未知数の実力と能力を持つ空々を狙うのでは？ 戦闘力が高いと言っても、サンソンはサーヴァントの中ではそれほど強力な内には入らない。即死のギロチン宝具は凄まじいが、対策の仕方がないわけではない。では、不確定要素となる空々を優先して殺すのではないだろうか。

「そもそも、キリエライトさんは誰かに操られているのか、それとも自分の意志でやったのか、どっちでしょう」

「催眠魔術、洗脳を受けた感じはなかったわ。操られている線は無いと思う。あるとすれば脅されている可能性ね」

裏切りのプロはマシユをそんな風に診断した。洗脳や催眠の類いにかかっている可能性を信じたのは山々だが、それだといまひとつ釈然としないものがある。もしそんなものがあるのなら、あの裁判所内の全員をコントロール下に置いて三騎全員を袋叩きにすればよかったのだ。

支配力に人数制限があるのだろうか？

それにしたつてマシユを暗殺の下手人にする意味がわからない。

細身で運動全般が苦手な彼女に暗殺を任せたいとは敵も思わないだろう。それこそ裁判所の守衛や憲兵のような戦闘のプロを使う筈。玄人から醸し出される独特の殺気を気取られるのを嫌ったのだろうか？ いや、それにしたってマシユより適任はいる筈だ。

マシユを使うことで立香たちに精神的なダメージを与えるのが目的だったとすればどうだろう。

——いや、そもそも催眠や洗脳をマシユに施したら、まずはこちらの陣営に潜りこませるのでは？ あんな鉄砲玉のような使い方なんてせずに、それこそスパイとして情報を横流しさせ続け、最終決戦の土壇場で裏切らせた方が効果的ではないだろうか。

「ロビンさんの検死報告……？」

その時。

空々が呟くと同時に、立香は全てを理解した。

そうか。

そういうことか。

いや、でも——

だったら何で……？

グルグルと視界が回る。天変地異に襲われたような感覚に陥り、まともに立っていられなくなる。「リツカ？」ふらふらと揺れる立香に気がついたマタ・ハリが声をかける。足がもつれ転倒。「大丈夫ですか」空々が駆け寄る。マタ・ハリも立ち上がって近づいてくる。「ひどい汗ね……」「今日はもう休んだ方が良いですね」世界が回る。空々とマタ・ハリに肩を組まれて助け起こされる。

「気をしっかり持ってリツカ。まだ決着はついていないわ」

4

アビゲイルの部屋の扉をそつと開けたマタ・ハリは魘される彼女の傍に近づき、手に持ったタオルで額の汗を拭う。「んん……」一応寝ているようだが魘されている。熱は一時より下がったがまだまだ平熱とは言えない。ベッドの横に置いておいた水は少し減っている。し

かし彼女は結局夕食を食べなかつた。チキンスープを作つてここま
で運んできたのだが、それも口に入らなかつた。

「どうですか」

入口に現れた空々が声を潜めて聞いてくる。足音で気づいていた
マタ・ハリは特に驚くことなく振り返り、首を横に振る。「駄目」と言
いかけたが、彼女の前で言うべき言葉ではないと思ひ直して沈黙を保
つ。

「そうですか」

そう言つて空々は黙る。何かを考えているようでもあつたし、何も
考えていない風にも見えた。相変わらず彼の表情からは何も読めな
い。

マタ・ハリは寝ているアビゲイルに向かつて「また来るわ」と声を
かけて部屋を後にする。空々と一緒にリヴィングまで戻つた。

日はとつくに落ちてゐる。時刻にしてみればまだそれほど遅くは
ないのだろうが、窓の外は暗黒だつた。

マタ・ハリが燭台を机に置く。ゆらゆらと揺れる灯が卓につく二人
をぼんやりと照らす。

「カーターさん、帰つてきませんね」

「そうね……」

ランドルフ・カーターがまだ帰つてこない。

ウェイトリー家の前で会つて以来、彼の姿を見ていない。彼の正体
をこちらが知つてゐることを向こうが知つていたとしても家には
戻つてくると思つてゐたのだが、予想が外れた。

「アビゲイルを放つておいてよいのかしら？」

外なる神召喚の鍵はアビゲイル・ウィリアムズ。カーターが――最
後の魔神柱「ラウム」が彼女をみすみすとカルデアの手に渡してしま
うのは不自然ではないだろうか。仮にラウムがこの特異点から撤退
を考えているとしても、彼女を置いて逃げる選択肢は選ばない気がす
る。

「もしくは既に召喚が完了したとか」

「それはないんじゃないかしら。彼女が倒れた理由が『それ』だとする

のなら——まだ召喚はできていないと見るべきよ」

召喚は未だ完了していない。『門にして鍵』が降臨した形跡はどこにもない。

「本当、ここは謎ばかりね……これまでの特異点とは明らかに違う」

マタ・ハリがうんざりしたようにこぼす。これまでの特異点を経験していない空々にとって、その愚痴に共感することは不可能だった——そもそもこの少年に「共感」などという技能が備わっているかどうか甚だ疑わしいが。

「二度現在の状況を整理しましょう。時系列に沿って——えっと、やっぱり最初の謎はメディアの死よね」

「あれはキリエライトさんがやったんですかね」

マタ・ハリは黙る。マシユがメディアを殺した——今となってはそれが一番可能性が高いのだが、しかしそれでも疑問は残る。確かにマシユはメディアが消えた時のアリバイを持っていない。アビゲイルと一緒にいたというが、立香たちと離れてからアビゲイルに接触するまでの空白の時間が彼女には存在する。

しかし、だから何だというのだろうか？

マシユはメディアが屋敷に戻っているとは知らなかった筈だ。立香もサンソンもマシユも、空々もマタ・ハリも「メディアはロビンと一緒に森に行った」と思っていた。メディアが体調を崩したと言って屋敷に戻ったのを知っているのは彼女と行動を共にしていたロビン、屋敷にいたであろうティテュバ——今は羽川翼と名乗るサーヴァント。更に追加するとすればランドルフ・カーターだろうが、彼は基本的に日中外出するのであの時家にいた可能性はそんなに高くない。

無理に筋道を立てるとすればこうだ。「マシユはアビゲイルに会いに行く途中で何か用事があったり一度屋敷に戻り、そこでメディアを発見。お見舞いか看病かのふりをしてベッドに寝ている彼女の傍らに置かれた水に櫟の実か葉を磨り潰した粉末をいれて立ち去る」……不自然だ。屋敷に戻る用事は何なのかわからないし、メディアを殺す動機も見えない。櫟の毒をどこから調達したのかもわからない。ロビンの所持品に手をつければ絶対に彼が気づく。だから毒は自分で調

達するしかないのだが、ここへ来てから彼女にそんな暇なんて——
……カルデアの疑似レイシフト空間で予め調達しておいたとか？

「計画的な犯行なのか突発的な犯行なのかわからなくなりましたね」

空々に否定される。というかマタ・ハリ自身も本気では言っていない。カルデアの修練場、種火や素材を集める為の森ならば櫟だつて腐るほど生えているだろうが、そんなに前から彼女を殺す算段を整えていたとは考えづらい。メディアの行動がイレギュラーな以上、そしてマシユが単独行動をとることになったのがイレギュラーな以上、これはどう考えても突発的な事件なのだ——いや、それでもないのか？

「マシユの単独行動は確か、リツカがメディアに会いに行くつて言つたから出来上がった状況だけれど、そうなつていなければ彼女が自分から単独行動を申し出るつもりでいたとか考えられないかしら？」
どんな言い訳を使うかまではぱつと思いつかないが、いくらでもやりようはある気がする。

「そしてメディアが屋敷に戻つた理由だけれど——やっぱり体調不良つていうのは彼女の技能的にありえないわよ。神代の魔術師が何でもない体調不良に悩まされるなんて考えづらい。マシユとメディアが何か秘密の約束をしていて、あの時カーターの屋敷で会つていたとすれば——」

そこまで言つて、しかしマタ・ハりは続く言葉を呑み込んだ。それが駄目な筋だとわかつたからだ。

彼女たちはそんな約束を交わしていない。

それは他ならぬマタ・ハリ自身が固く保障する。マシユはともかく、メディアの動向はずつと注意して見張つていたのだ。マタ・ハリだけではない、サンソン、ロビン、空々の四人体制で。

よしんばその警戒網を潜り抜けられたとしても、彼女達がいつたいどんな目的で集まつたのかがわからない。秘密の話ならあんな真昼間にしなくとも良いはずだ。やっぱり疑問にぶち当たる。答えが見つからない。

「……第二の謎はロビンの死」

マタ・ハりは思考を切り替えて次に進む。

「サンソンが『あれはロビンだった』と断言したのだったかしら」
「はい」

「それは本当?」

マタ・ハリはじつと空々の顔を見つめる。彼はもう一度「はい」と頷く。蠟燭の火に照らされる彼の表情は全く変わらない。よしんば嘘を吐いているとしても、マタ・ハリにそれを見破る術はなかった。まあ良い。

空々が敵だったとすれば、いよいよ万策尽きている。

「……ロビンが本物だったということは、つまりマシユがロビンの拘束をふりほどいてロビンを殺したっていうことかしら……? 既に無理があるシナリオだけど、そこに目を瞑ったとして、何でマシユはそのまま私たちのところに戻ってこなかったのかしら」

「警戒されると思ったんじゃないですか? ロビンさんを殺したこともですけど——メディアさんを殺したのもキリエライトさんではないかって皆が考え始めたら、あんな簡単にサンソンさんは殺せませんよ」

空々の仮説はマシユが完全にカルデアの敵にまわったことを前提にしたものだった。

警戒されれば暗殺の難易度があがる。

だから顔を出さなかった?

「それほどまでにサンソンを殺したかった?」

「殺す理由があった——んじゃ、ないですかね。その理由は皆目わかりませんけど」

理由が皆目わからないと空々は言うが、マタ・ハリはひとつ思いついた。

検死報告。

あの遺体が本物のロビンだったと皆に露呈する前にサンソンを殺す必要があった……?

「待ってクウ、他ならぬあなたが『ロビンは偽物』って言っていたじゃない。サンソンの検死と食い違っているけど、あれはどう説明するの?」

「検死程度で地球陣の擬態が露見するなんてありえませんか、僕としては今も偽物説を推しますけど……でも、サンソンさんが断言したってことは何かそれなりの根拠があると思います」

根拠。

しかしそれが何なのかは皆目わからない。空々もマタ・ハリも専門的な医学知識、それも法医学に類する知識なんてほとんど持っていない。空々は言うまでも無く、マタ・ハリも人殺しを経験したことはあるが、だからといって死体に詳しいわけではないのだ。

当時から百年先の医学を習得していた処刑人——ムツシュ・ド・パリには遠く及ばない。

「……でも、サンソンは結局私たちに検死の結果を伝えることに成功した」

厳密に成功と言えるかは怪しい。空々が聞いたのは「あれはロビンだった」という一言だけで、その根拠も何も伝わってはいないのでから——最悪、報告にはまだ続きがあったかもしれない。

『あのロビンが本物だった』という証言を隠す為にサンソンを殺したとして、それは何故かしら？ 『ロビンさんとサンソンさんは実は偽物だったんです！』って言い訳しようとしていたとか？ まともな思考じゃないわよ」

空々は黙る。何かを考えているらしい。マタ・ハリも再び頭を回転させる。ぱっと思いついた——というか思い出したのは、彼女が最後に言ったセリフ。

『先輩は私が守るんです』……か」

何故？

何故サーヴァントを殺害していくことが立香を守ることに繋がる？

わからない——全くわからない。

どれだけ頭を捻っても答えは見つからなかった。

羽川翼とランドルフ・カーターは海岸沿いの牧草地で相對していた。

いや、それは正確な描写ではない。場所は確かにあっているが、海に向かって右側に立っている人物は羽川翼ではないし、海に向かって左側に立っている人物はランドルフ・カーターではなかった。そもそも彼と彼女を

「人物」と呼称してよいか甚だ疑わしい。どちらも人間ではない。右側の人物は不知火のような美しい白髪をくびれた腰のあたりまで伸ばしており、髪の本根には異形の猫耳——「異形」と形容するにはいささか可愛すぎる気もするが——を生やしている。瞳孔の大きさも人間のそれではない。銀白の頭髮と純白の素肌、そして金色の虹彩によつてその「黒」は尚強調される。

黒い。

圧倒的に潔癖な白でありながら彼女から連想される色はブラック以外にありえない。

左側の人物は首から上が異様だった——首から下はなんてことのない、例えいきなり数百年後の未来に飛ばされたとしても群衆に紛れてしまうような地味な背広とパンツ。それが逆に頭部の異常性を際立たせる。人間の顔ではない。類似の生物を挙げるとすれば鳥——カラスだろうか。漆黒の羽毛で覆われた頭。鼻と口の位置には嘴が生えている。眼は巨大で、悍ましい赤が覗く。猫と鳥といえば街のゴミ捨て場でも日常的に目にする取り合わせだが、この場の光景に「日常的」などという言葉は最も似合わない。

「ツバサ・ハネカワ」

鳥男の嘴が動く。驚くことに人語を解すらしい。英語圏の読み方ではあるが、彼は流暢に「羽川翼」の名前を呼んだ。

「現代の英雄と侮っていたが、そうか。君にはそんな隠し玉があったのだな。それなら直接戦闘も難なくこなせる」

「俺は羽川翼じゃにゃい」

俺のにゃはブラック羽川にゃ——と、鳥男を見据えながら名乗る彼女、ブラック羽川は不機嫌そうだった。

「なるほど。ハネカワツバサに取り憑いた妖怪変化……ということろか。ハネカワツバサの肉体に君と彼女、二人の精神が共存していて、任意で『表』に出す精神を切り替えることができる——……。ジギルとハイドに似た性質だな」

「『ハネカワツバサに取り憑いた妖怪変化』っていう認識はまあ、大体合ってるにや。でも任意で人格を切り替えるにやんて、俺はそんなモタロスみたいにな便利にや奴じゃあにやい」

「……？」

烏男は疑問を意味する沈黙を保つ。ブラック羽川が例として挙げた「モタロス」が何だかわからないというのもあるが、それよりなにより、「任意での人格の切り替えができない」と彼女が言い切ったことを訝しむ。

「では何故君は今その姿で私の前にいる？ 臨戦態勢になると自動的に人格が切り替わるのか？ それとも偶々今夜人格の切り替えに成功したからか？」

ブラック羽川は黙る。心なしか先ほどよりも烏男に向ける敵意が増した。自分が出てきた理由を探られたのが不快だったのだろうか？ 彼女の分析を烏男が始めた時、

「『成功』って、にやんだよ」

彼女は決然と言った。

烏男はあからさま首を傾げる。

「『成功』以外にどんな表現がある？ 君がもしハネカワツバサのまま私の前に出てくれば、こんな問答をすることもなく首を落としている——」

言葉は途切れる。

ブラック羽川が突っ込んできた。

勿論のことそれは烏男の——魔神柱「ラウム」の想定内。首を傾げることで意図的に作った隙に飛び込ませる彼の策だった。

理由はわからないがブラック羽川は怒っている。

憤怒は軽率を呼ぶ。ならばそこを突くまで。

ブラック羽川が鞭のように振り下ろす左腕を掴んで拘束。そこに

反撃を加える——？

何だ？

「俺が出てきたことが『成功』？ 馬鹿かお前。俺以上の馬鹿がいるとは思わにやかった。あの人間でさえ、そんなにやことは口が裂けても言わにやい」

力が抜ける。

手刀の形をつくり、今にもブラック羽川のどてっ腹にぶちこもうとしていた自身の左手が鉛のように重い。

まずい。一度距離をとらなければ。ブラック羽川の腕を解き、大きく後ろへ退こうとするラウム——だが遅い。

ブラック羽川の健脚がラウムのあばらに刺さる。

重い。

サーヴァントの平均を遥かに凌駕する威力の蹴りだった。ラウムの身体は泥人形のように破裂する。

何故だ？

何故私が負ける？

私はかつてソロモン王が使役した七十二柱の魔神の一柱だ。完全体になっていないとはいえ、神秘の消えかかった現代のサーヴァントに負ける道理などない。何故だ？ まさかこの女、ただの妖怪変化ではないのか？

バーストの遣い？

「そういうことじゃにやいんだよ」

狩り取られゆく意識の中でラウムは理解する。

ああ——そういうことか。

エナジードレイン。

隠し技能があったわけだ——だから力がごっそりと奪い取られ、追撃の一発があんなにも重かったのだ。

なるほどと納得する。

気まぐれでその場しのぎの癖に、先の先まで計算し尽くしている。油断を誘って引き込み殺す——これだから猫は嫌いなんだ。

そしてラウムは、望むならまだ延命が可能な自身の命を閉ざす。ブ

ラック羽川の蹴りは強烈だったが、魔神柱を向こうに回した場合の確殺には程遠い。そしてそれは彼女の限界ではない。理由は不明だが、おそらく彼女はラウムの無力化——捕縛を念頭に置いている。それは先ほどまではつけこむ隙以外の何物でもなかったが、今となっては非常に現実的な危機となつてラウムの身に迫る。サーヴァントならば魔神柱は殺すのが普通——『人類の敵』という立場にいる魔神柱相手にサーヴァントが情けなどかけるわけがないので、生かされたからといって「会話で平和的に交渉」みたいなシナリオにはならない。そんな平和主義者どこにも存在しない。何らかのスキルで自身の情報を抜き取られるのがオチだ。ブラック羽川はエナジードレインという技能を備えていた。ならばそれに類似する、情報を吸収するような特殊能力を持っていたても何ら不思議はない。

以上の推測を組み立てたラウムは全ての演算を停止し、自身を永劫の闇の中へ葬り去る準備をする。肉体の処理をどうするか迷ったが、ブラック羽川を混乱させるためにこの場に残しておく。運が良ければ朽ちる前に元の持ち主が取りに来るだろう。

全てを閉じたラウムは、ただ願う。

最期の瞬間まで自身が倒れた後のあの無垢な少女の無事を願う。

願ひ、そして祈る。

つまるところ「それ」はブラック羽川と魔神柱ラウムの明確な相違点だった。或いは運命と物語を隔てる、決して埋まることのない溝だった。

運命と物語は相容れない。

では、伝説は——？

6

日は昇る。

例え真夜中に人類が絶滅していたとしても朝日は地平線に——あるいは水平線の彼方に悠々と姿を見せる。

静寂の夜明け。

立香はいつもの制服に着替えると一階に降りる。キッチンでマタ・ハリが朝食の準備をしていた。「おはよう」と声をかけてきたので「おはよう」と返す。

「どう？ 調子は戻った？」

「あ、うん……まあ。空々君は？」

空々は廊下から現れた。食器が置かれたトレイを前に抱えている。アビゲイルの部屋から持ってきたものだと言った。

「どう……ああ、ちよつとは食べてくれたみたいね。よかったわ。熱の方はどうだった？」

「あがってはいないみたいですけどまだ高いです。苦しそうなのは変わりませんでした」

マタ・ハリは「そう」と呟くと悩まし気な表情になって俯く。マタ・ハリだけでなく、空々の報告は立香の表情も曇らせた。そうか、アビーはまだよくなっていないのか。

一瞬、サンソンに診てもらおうと提案しかけたが寸前で口を閉じる。危ないところだった。彼はもういないのだ。

「彼女は何の病気なの？」

二人に質問してみるが答えは返ってこない。マタ・ハリの表情が更に難しくなった。空々も黙ってキッチンの流しに食器を重ねる。病名がわからないのか、それともかなり悪い病気なのか——何となく雰囲気察することができたあたりで、唐突に「そろそろいいんじゃないですか」と空々が言う。

自分に言っているのかと思った立香だったが違った。それはマタ・ハリにむけた言葉だった。

「そうね」

彼女は一言呟くと、真っ直ぐ立香を見つめる。

「アビゲイルは外なる神の憑代にされている」

マタ・ハリの言葉は最初なんだかよくわからない呪文のように聞こえた。

「え？」と聞き直す。理解ができなかった。理解できないんじゃないやなくて、本当は全身が全力で理解を拒んでいるのだということにも気づけ

なかった。というか気づかなかった。

「マタ・ハリはもう一度言葉を繰り返す——もう一度、その宣告をする。」

「彼女の体に外なる神が降臨しようとしているわ」

「——」

外なる神。

禁忌の伝説。

魔神柱の——目的。

「ラヴィニアの言っていた神……『門にして鍵』の神はまもなくアビゲイルの肉体に取り憑く。魔力の流れから見ても大いなる何か彼女に憑りつこうとしているのは間違いないわ。その力は未知数——何せ『神格』だから、どんな存在なのか想像もつかない。魔神柱はその神格を利用して人類史の焼却をするつもりよ。その魔神柱なんだけど、実は——」

「待った」

説明を続けるマタ・ハリを制する。朝っぱら早々吐きそうだったが、何とかこらえる。少しの時間をくれれば落ち着ける。

「……大丈夫。もうわかったから……」

わかった。

アビーが憑代。だったら魔神柱は彼だ。彼以外に心当たりなんてない。

「カーターさんが魔神柱なんでしょう？」

マタ・ハリと空々はこくりと頷く。

……大丈夫。

俺は耐えられる。

耐えてみせる。

アビーに降臨する神を止める方法も、二人が今まで立香に黙っていた理由を考えればわかる。つまりはそういうことなのだろう。

だが、真っ直ぐ聞く勇氣はない。

「……他に方法は」

長い長い時が経った後、マタ・ハリが「ラヴィニアちゃんかメデイ

アがいれば、もしかしたら他の、『正しい』方法を見つけ出してくれたかもしれないけれど」と、言葉の尻をぼかすように答える。

「そうか……」

正当な解術の方法がわからない。

しかし魔神柱の目論見通り、アビゲイルに神を降臨させてはいけない。彼女は既に苦しみ始めている——ということは、もうすぐ神が降臨する。それまでに何とかしなくてはいけない。

正当な解術法はわからないが、最も簡単に原始的な妨害の手段はわかっている。

憑代の破壊。

降臨の器にして目印である憑代を抹消してしまえばどんな神格も降りては来られない。門にして鍵は閉じられる。あらゆる存在の「隣人」——すべてにして一つのもの、門にして鍵が相手でもそれは同じことだ。

門を閉じれば。

鍵を折れば。

アビゲイルを殺害すれば——禁忌の庭園セイレムにおける「鍵」、アビゲイル・ウィリアムズを殺せばこの特異点は崩壊し、全てが解決する。

少女か、世界か。

小難しい理屈をこちゃこちゃと並べ立てるのは結構だが、これはつまるところそういう問題だ。単純で明快な二択。いつもの脳内選択肢だ。似たような問題が出された時、かつて正義の味方に憧れた男は前者を選択し、かつて正義の味方に憧れた男はどっちらを選択するのだろうか。人類を救った英雄「藤丸立香」は、一体どちらを選ぶ？

立香が口を開こうとしたその時——

玄関のドアがノックされた。

「ごめんください」

ほぼ反射的に臨戦態勢をとるサーヴァント二人。が、それはどうも取り越し苦労だったようだ。屋敷にやって来たのはランドルフ・カー

ターではなかった。その声には聞き覚えがある。知っている。敵か味方か未だに不明のはぐれサーヴァント。立香との契約を蹴った異端の裁定者。

「魔神柱を討ち取りました」

羽川翼がランドルフ・カーターを背中におぶって立っていた。

第十話

0

「これは最悪だ。」と言えるうちはまだ最悪ではない。

——エドガー

1

「そうね、もう時間があまりないけれど可能な限り情報を共有しましょう。私は昨日ランドルフ・カーターに化けていた魔神柱を倒しました——ああいえ、命まで取るつもりはなかったのだけれど、彼は私に負けた後すぐ自殺しました。肉体には負荷をかけない、精神の滅殺です。肉体はどうやら借り物だったようで、彼はこれをその場に残して逝きました」

と言いつつ羽川はリヴィングのソファにカーターの体を降ろす。よく見るとカーターが着ている背広の背中の部分が爆発にでも巻き込まれたかのように丸く抉れていた。

とりあえず彼女を部屋に入れた立香たちだったが困惑が隠せない。

魔神柱を倒した？

単騎で？

現代の英雄にそんなことができるのかと甚だ疑問だったが、実際彼女はラウムの抜けたランドルフ・カーターの肉体をここまで持ってきている。肉体の複製やらなにやらを疑うことはできるが、そんなことをしている時間は立香たちになかった。

「……聖杯はありましたか？」

訝し気に質問するマタ・ハリ。羽川は首を横に振る。

「いえ、彼は聖杯を持っていませんでした」

一同に驚愕の波が走る。

では聖杯はどこだ。

魔神柱が聖杯を持っていないというケースは別に珍しくない。これまでの特異点では、カルデアに仇為す英霊達がそれを所持していた。聖杯から迸る無尽蔵の魔力を霊基に貯める英霊の力は誰も彼も凄まじく、彼ら彼女らの撃破は毎度毎度苦労した。魔神柱はカルデアが奪取した聖杯を奪い返しに来る存在——だというのがこれまでの認識だった。

だが、この町に脅威となる英霊はいない。

いないと言い切るのは賢明ではないので、未だ確認できないというような表現に留めておく。ともかくにも、この特異点は魔神柱が自分の願いを聖杯にかけて作った場所だと立香たちは思っていた。その予想は外れていたのか？

「いえ、おそらく当たっていると思います。この特異点を創り上げたのは魔神柱ラウム。ただその後彼は聖杯を手放したでしょう。セイレムの一般人に擬態するのに、膨大な魔力は邪魔でしょうから」「ラウムが聖杯をどこかに隠した……ということ？」

マタ・ハリの言葉に羽川は頷き、そして一つ補足を加える。

「それか誰かに渡したか」

彼女がそう言った時、部屋の気温が少し下がった気がした。

気味の悪い沈黙が漂う。

「やっぱり魔神柱以外の何者かがこの特異点にいる」

羽川は確信的な口調で言い切る。立香は半ば無意識のまま頬に手をあてた。

魔神柱以外の何者か。

何だろう、空々の言っていた『地球陣』だろうか。もしや「それ」がメディアやロビンを殺したのか？ マッシュもその者達に操られているとか——そんな思考が頭に湧いてくる。立香が羽川にそれらの疑問をぶつけるより先に「その第三勢力がメディアやロビンを殺したとあなたは考えているの？」とマタ・ハリが聞く。「まだ確かなことは言えませんが、可能性は高いと思います」

「キリエライトさんがサンソンさんを殺害した件にも関わっているん

ですかね」と空々。羽川は曖昧な顔になる。

「それは今日の裁判を見てから考えた方が良いでしょうか」

裁判の開廷は午前十時。現在時刻はだいたい八時過ぎ。まだ時間がある。

「マシユと話したい」

立香が言う。皆が振り向いた。

裁判が始まる前にマシユと話がしたい。彼女は何も喋らないかもしれないが、それでもこちらが得た情報に向こうに話すことはできる。そうすれば何かが変わるかもしれない。これは立香の願望にも似た予測だが、マシユと立香たちは何か重大な誤解をしているのだ。それを解かないといけない。

話し合わなければいけない。

「そうね。それは必要だわ」

マタ・ハリが賛同してくれる。他の二人も異論はないようだった。「私もついていくわ。クウとハネカワさんは、悪いのだけれど留守番を頼めるかしら。アビーの容態が心配だし、カーターさんもみておかなければいけないでしょう?」

アビゲイルはもとより、ラウムが抜けたカーターの体も何とかしておくべきだというのは満場一致だった。この体はどうやらラウムが誰かから奪ったものらしい(というのが羽川の推理だった)。元の持ち主が体を探しに来るかもしれない。

羽川は元々この町ではお尋ね者である。裁判所に顔は出せない。彼女と、彼女を完全に信用できてはいないカルデア組の誰かが残る。そして立香の護衛に一騎のサーヴァント。この役割分担は順当に見える。

既に外出の支度はできている。立香とマタ・ハリはそれから五分後に家を出た。「じゃあ行ってくる」と言って扉を開け、道の彼方に消えていく立香の後ろ姿は多少なりとも活力——勇気が滲んでいた。

「さて……」

二人を見送った羽川はリヴィングには戻らず、二階に上がる。彼女

の後ろをついて行く空々。「どこへ行くんですか？」

「犯行現場」

二階には四つの部屋がある。客室、二つの空き部屋、アビゲイルの部屋。東側一番手前のドアを開けると簡素なベッドが三つ。ここは客室——女子部屋として使っている空間だ。

「メディアさんは確か、手前のベッドに寝ていたよね」

確認をとるような羽川の言葉に空々はこくりと頷く。「割れたコップが落ちていたのは手前のベッドと壁の間です」

今はガラスの破片など落ちていない。皆で綺麗に掃除したのだ。それでも羽川は床を念入りに検分する。次いで水の入った瓶が置かれていた台。ベッドのシート。

「探偵みたいですね」

「探偵ではないけどね」

この部屋での捜査活動を終えた羽川は、次に男子部屋の扉を開ける。こちらにはベッドが無い。空々たちが雑魚寝に使っていた毛布が散らばっている。ここも羽川は隅から隅まで調べた。何かを探しているのだろうか？

「可能性は消しておかないと」

ラウムの住んでいた家だ。どこかに隠し金庫でもあつたらいけないと考えての行動らしい。無尽蔵の魔力を生み出す聖杯だが、魔術的な工夫をすれば小さなスペースに隠すこともできる。カルデア一行を泊める部屋にそんな物を隠しておくとは考えづらいが、その心理を逆手に取っている可能性もある。

「聖杯がラウムの手から離れたらこの町は崩壊するんじゃないですか？」

空々はふと思いついた素朴な疑問を羽川にぶつけてみた。

「この特異点は小規模だし、とても安定しているからすぐには崩壊しないと思うけど——別に聖杯が壊れたわけでもないし」

壊れるとしたら、新たな所有者が新しい願いを聖杯にかけた時かな——と、羽川は続ける。

「じゃあ、別の人物の手に聖杯が渡っていたとしてもその人物はまだ

自分の望みをかなえていないってことですか」

「専門じゃないからのはつきりしたことは言えないけれど、うん。そうだと思うよ」

搜索ついでに毛布を綺麗にたたみながら羽川が答える。

何となく空々も整頓に加わる。

「第三勢力の狙いもその聖杯ですか？」

「うーん、そうだとすると第三勢力もまだ聖杯を手に入れていないってことになるのよね。空々君、君はどう思う？」

空々はしばし沈黙する。

「第三勢力の目的が何なのか知りたいですね。聖杯がめあてなのか、それとも他に何かあるのか。僕らをここまで崩壊したのがその勢力の仕業なら、彼らは人類が滅亡しても構わないと思っっていることになるのでしょけど、人類を滅ぼしてまで手に入れたいものって何なんでしょう？」

「君もその勢力は複数人だと考えているのね」

羽川は空々が第三勢力の代名詞に『彼ら』を使った点を拾い上げる。

「僕らも魔神柱も集団でしたから」と空々。

羽川はにこりと微笑む。

「人類を滅ぼしてまでって言うけれど、別に『彼ら』も人類が滅んで良いとは思っていないかもしれないじゃない？ 自分達の目的を果たした後で人類も救おうと思っっているかもしれない」

「優先順位の問題ですか？」

「違う。手順の問題」

毛布を畳み終えた羽川は立ち上がり、窓の傍に寄る。

「人類を救った後じゃ彼らの目的を達成することができない——彼らの目的に、何か時間制限のようなものがあるとすればどうかな。例えば、この特異点には過去のセイレムが再現されているわけだけど、この時代、この町のある商店にしか売られていない品物を買う為に君達の人理修復を妨害して、その品物がこの町に入荷するのを待っている……とか」

空々はまた黙り込んで羽川を見つめる。外の景色を見るのかと

思ったが、彼女は窓枠の検分を始めた。どうしてそんな箇所を詳しく見る必要があるのか空々にはさっぱりだったが、咎める気もなかった。

「まあ、本当に人類が減んでもいいやって考えてるのかもしれないけどね」

空々の方を振り返ることなく彼女は言った。

2

現代風に呼べば拘置所ということになるのだろうか、有り体に言つてそこはただの牢獄——不衛生で無骨な、陰気極まりない檻だった。

「マシユ」

鉄格子ごしに立香は名前を呼ぶ。固そうな木の寝台に座っていた彼女は俯かせていた顔をあげる。ひどい顔だった。頬は赤く腫れていて、右目の上にこぶをつくっている。眼鏡はかけていなかった。前髪が乱れている。こちらを見る瞳に、いつもの柔らかな色は失せていた。

「マシユ」

立香はもう一度名前を呼ぶ。面会時間は十五分。マタ・ハリの同行は却下された。背後に守衛が一人。怪しい話をすれば即刻魔女の烙印を押されて立香も牢獄の向こう側に叩きこまれる。そうやって中に潜り込もうかとも思ったがマタ・ハリに全力でとめられた。

「マシユ、俺だ」

マシユは何も答えない。また視線を下げてしまった。それは立香にとって意外だった。鉄格子ごしに泣きつかれるかもしれないと考えていたが、彼女は立香に対しても無機質な反応を通した。

「マシユ。こつち向いてくれよ」

声をかけるが彼女は頭をあげてくれない。マタ・ハリが、マシユが洗脳や催眠魔術にかかっている感じはなかったと言っていたが本当だろうか？ 目の前にいる少女からいつものマシユらしさはほとんど抜け落ちている気がする。

「羽川さんが魔神柱を倒したんだ」

守衛にも聞かれたが構うことはない。何か、何でもいいから彼女の反応が欲しい。立香はマタ・ハリから止められていた「怪しい話」を切り出した。その甲斐あってかマシユは再び顔をあげる。

「ラウムを倒した。この町の脅威は去ったんだ。あとは聖杯を見つけて帰るだけだ。マシユ、一緒に帰ろう」

彼女は困ったように頭を僅かに揺らす。首を傾げるというには少々大げさな動作。

「羽川さんっていうのはその、ここで会ったサーヴァントなんだ。ルーラーでさ。味方だよ。彼女がやってくれた」

マシユは動かない。立香の言っていることは理解しているだろうが、それを示す反応がない。だが信じて話し続けるしかない。

「マシユ、お願いだよ。ここでお別れなんて俺は嫌だ。頼む、足掻いて。俺にはまだマシユの力が必要なんだ」

立香の悲痛な声が暗い牢に響く。

マシユはまた下を向いた。

3

ラヴィニア・ウエイトリーは既に死亡しているというのがカルデア組、およびセイレムの住人の共通見解だった。

下手人は勿論マシユ・キリエライト。アブサラムが連行されたあとウエイトリー家に潜伏していたのだとホプキンスは推測した。そこで彼女はラヴィニアを殺し、森か海に死体を捨てたのだ——と。

だが実際は違う。

ラヴィニアとマシユは森の中で邂逅した——ボロボロのまま森の切れ目を探して走り回っていたマシユと憲兵たちから身を隠していたラヴィニアはお互いに吃驚しかけた。

「……えっと」

相対し、硬直する。

互いの正体がわからなかった。敵か？ 味方か？ ラヴィニアは

生存本能に叱咤されるがまま相手の格好を観察する。泥だらけの服だが、どう見ても森の中を歩くには適していない。どこかの研究者のような装い。眼鏡の奥の瞳から読み取れる感情はラヴィニアと同じ、驚愕の色。自分をつけ狙って襲ってきたという感じではない。もつとも、見た目から察するに彼女はそれほど戦闘力が高くない。ラヴィニアが言えたことではないが、か弱いインテリの少女という印象が全身から滲み出ていた。息もあがっている。もし彼女が力づくで襲ってきたとしてもそんなに脅威ではない。

と、一応は無害判定を押しした彼女を多少余裕のできた頭でもう一度よく見ると、彼女とは初対面ではないことに気がつく。いや、もしかしたら向こうはこちらのことを覚えていないかもしれないが、でもラヴィニア側には見覚えがあった。

「ソラカラの……？」

ラヴィニアが何か言おうとした時、彼女は意外な速さでラヴィニアに飛びかかってきた。しまった油断したなどと後悔するひまもなく後方に押し倒される。相応のダメージを覚悟したが後ろに生えていた草木がクツションとなってふんわりと倒れる。

「声を出さないでください」

既視感。

正体不明の他人に喉元を押しさえつけられる嫌悪感は何度味わっても慣れないが、それでもあの少年の時ほどの恐怖は感じなかった。彼はやはり別格なのだろうか——おそらくはそうなのだろう。他者を組み伏せる時に一切興奮せず高揚せず冷静でいるのは難しい。素人がやれば相手に自分が感じている恐怖が伝わってしまう。

ちようど今の彼女のように。

「……っ、はア」

ラヴィニアを組み伏せながら、この女は何か怯えていた。身体が接触している分よくわかる。彼女は何かを怖がっている。それがラヴィニアではないことは明白だが、ある意味ではラヴィニアを恐怖の対象だと思っている気もする。

「……あなたは」

「喋るな！」

自分で叫んでからきよろきよろと落ち着きなく辺りを見回す。素人だ。明らかに場慣れしていない。先ほど近くにいた憲兵が気づいてくれないかと期待したが、彼らは既にどこかへ移動してしまっただけだ。誰かがやってくる気配はなかった。誰もやって来ないことを確信したらしい彼女は息を整え、眼下のラヴィニアを見つめる。

「……ラヴィニア。ラヴィニア・ウェイトリーですね」

そう言っただけでラヴィニアの眼を睨む。同意のサインが欲しいらしい。ラヴィニアは一度大きく瞬きをした。

「そうですね……」

彼女は沈黙する。ラヴィニアをどうするか考えているのだろうか。彼女にはどんな選択肢が見えているのだろう。まさか殺しはしないかと思いたいが、どうも今の彼女は冷静さを欠いている風に見える。冷徹なプロも恐いが、正気を失った素人もそれはそれで怖い。どうしよう、こんなところで殺される気なんてさらさらないのである——何とか自分が空々達の協力者だということをわからせなければ。この様子だと彼女はラヴィニアと空々の関係を知らない。

「あなたは」

と。

唐突に彼女が口を開く。何を言うのだろうかと注意するが、彼女はそこで迷うように視線をラヴィニアから外す。彼女の視線が忙しくなくラヴィニアと隣の地面を行き来する。迷っている——逡巡している。だが結局彼女は意を決したようにラヴィニアを見据えると、震えを抑えた声で言う。

「あなたは私の殺人に付き合ってくださいますか？」

4

それから数分後——時刻で言えば午前零時四十三分。ラヴィニアとマシユはお互いに警戒し合いながら夜の町を並び歩いていた。

ラヴィニアはマシユの誘いを受けた。というか受けるしかなかった。

た。あの場で断つていけば逆上されて殺される未来が見えた。

隙があれば逃げ出そうと思う。ただマシユがいかにも運動音痴と言えど、純然たる走力勝負で振り切れるほどラヴィニアの脚も速くない。

「私はもう先輩のもとに戻れません」

さきほど「私はマシユ・キリエライトといいます」と名乗った彼女が唐突に話を切り出す。「仲間を殺したんです」衝撃的な事実をさりりと言うのであやうく聞き逃すところだった。

「いえ……本当は仲間でも何でもなかったんですけど」

「だ……、誰を……？」

誰を殺したのか——誰が死んだのか。

それは確認しておかなければならない。万が一あの少年が死んだとなると、せつかく決めた計画と覚悟を全部白紙に戻すことになってしまう。

「ロビンさんです」

ロビン。

ラヴィニアが名前を知っているのは空々とマタ・ハリ、それからリーダーの藤丸。ということはロビンというのはあの怪しげなローブの女か、黒いコートの男か緑のフードの男のうちの誰かだ。ラヴィニアには「ロビン」という名前が男性のものであるという先入観があったことと、英国本国に伝わる義賊の伝説を知っていたので何となくあの緑色のフードの男がロビンじゃないかとあたりをつける。

いずれにせよ、空々は健在のようだ。ラヴィニアは内心で胸を撫でおろす。

「それで、最低でもあともう一人殺さないといけないんです」

物騒な発言だった。だが突っ込むのも怖いので黙っておく。

「サンソンさんっていうんですけど……、ああそうだ。この町に有能なお医者様はいますか？」

突然質問が来たのでラヴィニアは一瞬面食らう。「医者……？」どんな高熱に罹っても医者など行ったことがないラヴィニアにとつては難しい問である。果たして彼女の言う「有能な医者」というのがど

のレベルまでを指すのかはわからないが、まあ、この町にまともな医者
者は居ない気がする。この町の住人は病気を患っても医者ではなく
教会の門を叩くのが普通だ。

たどたどしくもどうにかそれを伝えると、マシユは「そうですか
……」と呟いて悩まし気に眉を潜める。この回答は彼女にとって都合
が良かったのだろうか、悪かったのだろうか。いまひとつ表情が読め
なかった。

「明日まで森の中に隠れていたかったですけど、憲兵が来たので隠
れていられなかったんです」と、聞いてもないのに説明を始める。「ど
こかに隠れられる場所を知りませんか？」

この女は馬鹿じゃないのかと思った。自分を脅した相手に立て籠
もりの場所を見繕ってもらおう犯罪者がいるわけないだろうと怒鳴り
たくなった。上手いこと誘導されて捕まるとは考えないのだろうか。
頭がお花畑すぎる。

仲間を殺したと言うが、そんな悪のイメージが彼女からは全く感じ
られない。

絶望的に善人のおいしかししない。

「……何で殺したの？」

気がつけばそんなことを口にしていた。はっとするがもう遅い。
ラヴィニアの好奇心は知らず知らずのうちに膨れ上がっていた。

「彼は偽物だったんです」

マシユはきつぱりと言い切った。

その時だけは彼女の表情から不安の色が消えた。

「……」

よくわからない。

彼女の妄想だろうか？ いや、本当に偽物が紛れ込んでいることも
ある……のか？ わからない。彼らがこの町に潜む「何か」を倒す為
にやってきたことはラヴィニアも何となく知っているので、おそらく
は彼らの敵が仲間化けていたということなのだろうか……。

「何でわかったの？」

どうやって見破った？

これもまたラヴィニアの純粹な疑問だった。問われるのは当然のこと、マシユにとつても予想済みの問いだったと思うのだが、しかし彼女は虚を突かれたように硬直した。「え？」とマシユ。そんなことを聞かれるとは夢にも思っていなかったという顔でラヴィニアを見つめ返す。

「え？」

ラヴィニアも疑問符を頭に浮かべる。何だ、まさか偽物だという証拠無しに仲間を殺したのか？ そうだとすれば狂っている。その口ビンとかいうのが偽物かどうかは知らないが、少なくともこの少女は本物だ。本物のイカレだ。

「……あ、えつと。いえ、証拠はありますよ？ でもすみません。それは教えられないんです」

嘘だ。

そんなのは口から出まかせだ。きつと自分勝手な想像で仲間を偽物だと判断したんだ——いや、待てよ。仮にそうだとすれば、その「自分勝手な想像」がそのまま仲間を偽物だと判断した理由になるんじゃないか？

何故自分の意見を主張しない？

即座に嘘と切って捨てるのはまずいと考え直したラヴィニアはもう少し様子を見ることにする。

この女が果たして狂人なのか、それとも彼女なりの何かがあつての行動なのか。

決めつけるにはまだ早い。

「……そ、そのサンソンっていうのも、に、偽物なの？」

吃音の自分が恨めしい。せめて態度だけでも怯えている風に見られないよう普段通りを心掛ける。が、そんなラヴィニアの演技を見ていられるほどマシユに余裕があるわけでもない。ラヴィニアの心配は杞憂だった。

「はい。偽物です」

……嘘臭い。

多分違う気がする——いや、マシユの物言いに嘘っぽい感触はない

のだ。本気でそれを信じている迫力が感じられる。ただ何というか、彼女が誰かに騙されている気がしてならない。たかだか十数分の付き合いで伝わってしまう底無しの善性から察するに、騙されて犯罪の実行犯にされている可能性が視界にちらついて離れない。どうしよう。

彼女をどうすれば良い？ このまま町の兵舎まで連れて行って憲兵に突き出すこともできるが、それで事態が好転するだろうか？ 新しい厄介ごとを抱えたくないという気持ちも小さくないが……。

「……ほ、他に……」

彼女をこのまま生かしておくには、どうしても聞いておかなければならないことがある。

『最低でもあと一人殺さなければいけない』とさきほど彼女は言ったが、では最大では何人殺さなければいけない？

その中にあの少年は含まれているだろうか？

「……他に、誰か殺す予定はあるの……？」

「あ、はい。できれば空々さんも殺したいです」

5

マタ・ハリと立香は港の酒場で昼食を摂った。港付近の区画はセイラムの町でも最も薄汚く、尚且つ活気に溢れている。立香の沈んだ気持ちも紛れるのではないかとマタ・ハリが誘ったのだが、あまり効果は無かった。

「……どうだった？」

道中我慢していたがとうとう耐え切れずに問うてしまう。マシユの様子がどんなだったか。立香の表情から大方の想像はつくが――

「……ぼろぼろだった」

立香は先ほどから全く量の減っていないアップルパイを見下ろしながら答える。

「そう」とマタ・ハリ。こんな時にかけるべき言葉はさすがの彼女でもすぐに出てこない。

「何も……何も答えてくれなかった」

かなりシヨックを受けているらしい。無理もなかった。立香になら何か打ち明けてくれると思っていたのだが、その期待は裏切られた。

マシユは何も喋らなかつた。

誰かに脅されているのか、それとも本当に彼女の意志でカルデアを裏切ったのか——その真意は立香にもマタ・ハリにも読めない。彼女は沈黙を守り通している。おそらく取り調べでもずっとあの調子なのだろう。黙秘権が尊重されるような時代ではないので、だいぶ酷い目に遭っている様子だったことを立香はマタ・ハリに伝える。

「それでも何も喋らない……」

マタ・ハリの頭に羽川の提唱した「第三勢力」という言葉が浮上する。マシユを脅す者がいるとすれば、魔神柱が既に討ち取られている（無論羽川の言葉を全面的に信用しているわけでもないが）以上、その勢力しかない。だがそれは一体なんだ？ どの誰で、何が目的だ？

犯人候補として最初に思い浮かぶ人物はマシユ・ホプキンスだが、彼を第三勢力という役に割り当ててみてもしっくり来ない。次に名前があがるのは、マタ・ハリの個人的感情としては羽川を推薦したのだが、それだと彼女の行動理由が支離滅裂になってしまう。

空々が言っていた「地球陣」？

彼はロビンが「偽物」だと言っていた。さてもし本当にあのロビンが偽物だったとして、ではロビンを殺したマシユはこちらの味方なのか？ ということはサンソンすらも偽物だった？ いや、空々はそんなこと言っていない——サンソンが偽物だったとしたらロビンを偽物だと告発した時に一緒に名前を挙げる筈。いや、昨日の空々の予想が当たっていたとしたらどうだろう？ 本物のサンソンが偽物のサンソンと入れ替わる瞬間をマシユが目撃していて、だから彼女はサンソンを殺した——と。

……いや駄目だ。それは他ならぬマタ・ハリが否定している。それでは今のマシユの行動に説明がつかない。

何故マシユは何も喋らない？

結局はこの謎に戻ってしまおう。これ以上考えても何もわからなそうだと見切りをつけたマタ・ハりは思考を切り替え、未だ沈んでいる立香に声をかける。

「ねえ、もしマシユの行動に深い意味なんてなくて、ただ彼女が狂ってしまったってとしたら——リツカ、あなたは彼女をどうするの？」

残酷な質問をした。

慰めようと思えば慰められたが、そんなことはしない。

する意味がない。

「……わからない」

立香はゆっくりと首を横に振った。

じれったい。

甘いこと言っているんじゃないと叱咤してしまいたくなるがぐつとこらえる。それは甘さじゃない。弱さではなく強さなのだ。マタ・ハりは思いなおす。その躊躇いこそが平和な住人であることの証左なのだ。尊いものであれ、軽蔑すべきものでは断じて無い——と。

マタ・ハ리가「そろそろ行きましようか」と立香に声をかけた直後。

それは響いた。

それはセイレムの中央に鎮座する時計台が午前九時四十九分二十三秒を示してから午前九時四十九分五十一秒を示すまでの二十八秒間に渡って鳴り響いた謎の怪音——一言で表現するのならばそう、

悲鳴。

6

マシユ・キリエライトと名乗る女をどうにかして止めなければいけない。

できれば空々も殺したいとマシユが嘯いてから、ラヴィニアの中に彼女への慈悲というか同情というかそういう感情は全て掻き消えた。

こいつを先に殺してやろうかとさえ考えた。

マシユと遭つてから一時間ほど経つた後、表向きは彼女に迎合し、彼女の注文通りすぐには誰にも見つからない隠れ家——町はずれの空き家を紹介してやった（ちなみに説明するとそこはウェイトリー家の隣である）。替えの服も調達してやった。パンと水だけでなくナイフとフォークまで持つていつてやった。

替えの服は、今は亡き母親の形見だ。無くなったところですが、祖父も気づかない。ナイフとフォークは普段使わない儀式用の物で間に合わせた。祖父にはバレていない。故にこのまま彼女を隣家で葬り去つても誰にも気づかれぬ。

「ありがとうございます」

林檎を調達してきたところ礼を言われた。

そして彼女はその場でむしやむしやと食べ始めた。毒味も何もさせない。警戒がすぎる過ぎる。殺されると思わないのだろうか。

それともここで殺されてもいいと思つていいのか。

そういう観点から見ると、確かに彼女は何処かがいい加減になつていた。服も着替ええないし、食事も適当に摂る。「サンソンを殺す」という目的を口にしてはいるが、どうにでもなれというようなスタンスが垣間見える。

自暴自棄ではないが——しかし、自棄ぐらいには陥っている。

隣家に押し込めた彼女をそんな風に分析しながら、夜明け前の家路をゆっくり歩いていたら、

「よお」

彼は現れた。

「……？」

背丈が高い。6フィートと……3インチくらいだろうか。ラヴィニアの周りにはこんな高身長の間人はいない。あの女が殺そうとしている黒いコートの男よりもおそろく大きい。かと言つて横幅はあまり無く、尚且つ細すぎてもいない。ちょうどいい体格。ラヴィニアが生まれてこの方一度も見たことのない奇妙な白い一枚の布を羽織り、これまた長いタオルのような布（ベルト代わり？）を白い布の上から腰の辺りに巻くことで体に固定している。書物の挿絵で見たア

ラブ人を連想したが、しかしどこか違う。その衣の形は中東圏というよりはもつと東の民族のものに見える。

なんといつても奇妙なのはその男の顔だ。夜明け前なのでいささか見づらいが、それは人間の顔には見えなかった。一瞬驚いたが、仮面を被っていることに気づき、どうにか自分を落ち着かせる。それもまた見たことのない仮面だった。先住民族のものにはどうしたって見えないし、ヨーロッパ圏にもそんな仮面の文化は無いだろう。天に向けて鋭く立つ二つの耳と、キツイつり目。とんがった鼻。コヨーテ？ ウルフ？ いや違う。あれはきつと――

狐。

その男は狐のお面を被っていた。

「初めまして」

彼の口から出てくるのは流暢な英語だった――ラヴィニアが違和感を覚えることのない、この時代、この地域の英語だった。それはひどく歪ではあったが、ラヴィニアは何故かすなりとその現実を受け入れてしまった。歪な感覚を歪そのままに受け入れた。高性能翻訳機を通して宇宙人と会話しているような感覚――「そういうものか」と呑み込めてしまう妙な説得力が狐面の男から感じられた。

何だろう。

この男は、何というか。

これまで出会ったどんな人間とも違う。

何かが違う。

「は……初めまして」

面喰いながらも挨拶を返す。挨拶なんてしたのはいつ以来だろうと頭のどこかで考える。自分がまだ正常である証拠を探していた。

「なんつーか、あれだな。鏡に映った自分を自分だと理解できてねえって感じだ」

唐突に男が喋る。彼の口調は意外に乱雑だった。

彼の言っている意味がよくわからず、ラヴィニアは沈黙する。

狐面の男は今さつきラヴィニアが出てきた空き家を指さす。

「あそここのあいつをおかしいと思うか？」

あの女を匿っているのがばれている。ラヴィニアは一瞬焦るが、しかしこの男がその程度のことを通報するだろうかと思いなおす——
どうでもいいと思わせられてしまう。彼が意識的にやっているわけではないのだろうが、「まあいいか」という気分させられてしまう。
些細なことがどうでもよくなる。

彼の問いかけだけがラヴィニアの頭に響く。

「目的があるのにも関わらず、あいつは自分の命を適当に扱っている。あいつが口で言う通りサンソンとかいう大男の殺害を目論んでいるのなら、もつと慎重に潜伏するべきじゃあねえのかって思ってたんだろ？ 森で会った得体の知れねえガキに世話させるなんて言語道断——矛盾してるって、壊れんじゃねえかって疑ってるだろう？」

ラヴィニアは沈黙する。
実際その通りだった。

「でもなあ、それはお前が抱いちゃいけねえ疑問なんだよ。他の奴——森に引きこもった猫娘とかロリコンのゲームキーパーとか、そういう奴が頭捻つてうんうん考えるべき謎だ。お前がそれを謎と思っちゃいけねえ——そんな投げやりな殺人犯を健気に匿っているお前にその資格はない」

「——」
ラヴィニアの何かが壊れた。

破壊され——決壊した。

……え？

いや——私は、そんな、
別にそんなつもりじゃ——

「あいつは空々ってガキを殺す気もあると言ったはずだ。それを聞いた時点でお前はあいつを殺してなきや駄目だ。絶望的なこの状況で、お前は空々に一縷の望みをかけていたんだからな。空々の妨害を企てる奴が目の前に現れたのにぼーっと見ているのは明らかにおかしい」

それは、いや、

そうだけど……でも、私だって、

隙を見てあの女を殺そうと――

「隙だらけだった」

狐面の男は言う。

逃げ道を塞ぐように。

「殺そうと思えばいつでも殺せた。さつき渡した林檎に毒でもぬつときや今頃あいつはこの世にいない。毒物の調達だってできた筈だ。お前ん家の地下室にはその手のモノがわんさかある。なのにお前はそうしない――あいつを殺さない。何故かって、本当はあの女に空々を殺してほしいからだ――お前はアビゲイル・ウィリアムズに死んでほしくないと思っている」

違う。

違う違う違う。そんなわけない。あんなやつどうだっていい。どうだっていいんだ。ただ利用してただけだ。大して珍しくもない憑代の娘だ――しかも失敗作。

アビゲイルなんて死ねばいい。

死ねばいいんだ。

殺してやりたいんだ。

狐面の男はふんと馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「今はそう言い続けるだろうさ。最後の最後までお前はその姿勢を崩さないだろう。そんでいよいよアビゲイル・ウィリアムズが死ぬっていう時になって、お前はあいつを助ける。自分の命と引き換えかなんかだな。そんでお前は最期に認めるのさ――『一緒に鯨を見た』と」

「違うー！」

ラヴィニアは叫んでいた。

叫ばずにはいられなかった。

「そんなことにはならない！ 鯨なんて見ていない！ あれが嘘だつて私にはわかってる！ 私は、私は絶対に――」

「絶対に認める」

狐面の男が断言する。

力強くもなく、特に大きな声でもないそれは、しかしラヴィニアにとって何よりも巨大な現実だった。

「うう、うう、うう………！」

涙が出てくる——あふれ出す。くそう。何でだ。どうしてこんなにも悔しいんだ。

どうして私はそう（、）なんだ。

——あなた、とても綺麗ね。まるで星の妖精みたい……

「やめて………」

——このぬいぐるみをあなたにあげる。ミーゴっていうのよ……

「嘘よ………こんなの全部嘘だから………」

——おんな、じ………箒星の、年の、子……

「嘘なのよ………全部偽物なの！」

——牧草地、から………一緒に、海を………見たわ……

「違う！ そんなことしていない！」

——また………二人で、鯨を………

「そんな………そんな、そんなの………」

そんなの——………

もう何も考えたくなかった。何もしたくなかった。頭が割れるように痛い。楽になりたかった。これ以上進みたくなかった。未来で待つ、幸せな死を享受する自分がたまらなく怖かった。

「そんなのはどちらでも同じことだ」

狐面の男は言う。

変わらぬ調子で。

気取るでもなく皮肉るでもなく。

口癖のようにすんなりと彼は言った。

「本物とか偽物とか、思いとか殺意とか一つとか全てとか、そんなのはどうだっていい。同じだ。根本の部分では全て繋がっている………全て一緒だ」

「あ、あなたは………」

ぐしよぐしよの眼で彼を見上げる。

狐面の奥に控える彼の表情を窺い知ることが叶わない。彼は最初と変わらない姿勢のまま——こちらを見ているのか、それとも遥かどこかを眺めているのか、全く読めない。

「なあ、ラヴィニア・ウェイトリー」

狐面の男が彼女の名前を呼んだ。

「俺と来いよ。こんなところでそんなことをやってんじやねえ。そんな誰でもできるような役割なんざほっぴちまえ。お前の役は俺が決めてやる」

俺と一緒に世界をひっくり返してやろうぜ。

」

夜明けの到来。

ありつたけの白光がラヴィニアの顔を照らす。

世界が始まる。

世界が終わる。

そしてまた一人、役者が舞台から消える。

不揃いの演者たちの誰にも知られず。

ラヴィニア・ウェイトリーは黒幕へ退いた。

第十一話

0

どういうことだ。説明しろ、潤。

——西東天

1

生き残りはごくわずか。

港付近の料理屋——店内で生き残ったのは藤丸立香ただ一人。

「マタ・ハリ……、マタ・ハリ……？」

目の前に突っ伏す女性を揺する。反応がない。どうしたのだろうか。辺りを見回す。カウンター席に座っていた客も円卓を囲んでいた客もマタ・ハリと同じように机に突っ伏している。いや、背もたれによりかかっていたのけぞっている者もいる。食器を回収しようとしていた店員は床に倒れ込んでいる。カウンターの奥でコップを拭いていたマスターらしき男の姿が無くなっている。奥で倒れているのだろうか。

何が起きた？

理解ができない——本当に、何が何なのかわからなかった。「マタ・ハリ……マタ・ハリ！」先ほどより強くマタ・ハリを揺する。彼女はずるりと動き、そのまま横に倒れた。受け身も何も取っていない。ただただ物理法則に従っただけの転倒。

彼女の瞼は開いていた。

「マタ・ハリ！」

席を立ち、彼女の下に駆け寄る。立香はもう一度周りを見渡し、また視線を下に戻す。

「やばい……」

なんだ？ わけがわからない。人形のようになったマタ・ハリを強

引に背負うと机の上に駄賃を置き、足の踏み場に気をつけながら店を出る。

店の外も同じだった。

「ああ……」

ここにも、あそこにも人が倒れている。動いている人間は自分以外に居ない。いやそんな筈ない。きつとどこかに、まだ誰かが――

道を曲がる。大通りに出る。

静寂が立香を外向かえた。

風の音だけが聞こえる。セイレムの町の、物静かながらも賑わいを見せる人々の話し声はどれだけ耳を済ませても聞こえない。

「ああ……そんな……」

歩を進める。

背負っているマタ・ハリが心なしか冷たく感じ始めた頃、立香は裁判所に辿り着く。ぎいと入口の扉を開き、更に廷内へと続く扉も開ける。

「やっぱり君は死ななかつたか」

一人、いた。

室内。折り重なるように人が倒れている傍聴席、座ったまま動かないマシユー・ホプキンス、関係者各位。

裁判長席の前に置かれた机に腰掛ける少年は「やあ」と立香に笑いかけた。

「こんにちは。カルデアのマスター」

まだ幼い。十三、十四歳くらいだろうか。それは立香がとてもよく知る少年だった。

そう――立香は彼をよく知っている。

本人を除けば、きつと誰よりも知っている。

だが同時に彼は立香がよく知る彼とは明らかに別人だった。目の前の彼は彼ではない。何故かはわからないがそう確信できる。

「空々君じゃない……。誰だ？」

「君はあの愉快な英雄とは少し違うみたいだね――なるほど。人類を救うには君みたいなやつの方が都合がいいんだろうね。彼はやつぱ

り変な英雄だったというわけだ」

立香の質問を無視し——彼はとうとうとわけのわからないことを語る。そのまま何も答えないのかと思つた矢先、

「僕は、まあ……地球だ」と。

彼は平然と言つた。

文章として破綻も甚だしいその科白を、しかし何故か立香は呆気なく理解し呑み下すことが出来た。

そうか。

彼は『地球』なのか。

「君達の世界観で説明するのならばそう、『ガイアの意志』と形容するのが適切かな。真祖ですらない。正真正銘、星の化身だ。珍しいだろう。サイン要るか」

全く笑えない冗談を飛ばす彼からは——しかし、立香とは比べ物にならない圧力と迫力を感じた。

四十七億年の歴史を持つ、およそ 6.0×10^{24} kgの偉大なる惑星。

騎士王など、征服王など、英雄王など物の数ではない。

母なる地球は格が違う。

そんな存在が——何故、こんなところに。

「『こんなところ』、ね」

彼は少し不服そうに言う。

「こんなところも何も、ここは僕の上なんだけどな——まあ、そういう風に言われるのは慣れてるけど……。そんな大したことは目論んじやいないよ。狐と違って僕は友情出演程度に出番を留めておこうと思つているんだ。君達の世界観にメモリを合わせると僕の存在はどうしても大きくなりすぎるから。今回のこれだつて、突発的な自然災害だと考えてくれればそれでいい。嵐の山荘が嵐でぶっ壊れたつてところだ。殺人犯に全員殺されるよりはましな結末だろう」

「『今回のこれ』って……、じゃあこの『これ』はお前の仕業なのか？」
「そうだよ」と彼は言う。

悪びれる様子は皆無だった。

「……何でこんなこと」

「何でって、今言っただろう。自然災害だよ。あとはそう——君を殺そうという魂胆も少しはあったかな」

まあ予想通り君は生き残ったけど——と。

何の感慨もなさそうに彼は呟く。

「俺を、殺す？」

彼は何も言わない。

「俺を殺すって、何で……何でガイアが俺を……」

「僕が人類を滅ぼそうとしているからさ」

——……。

何が。

何が「大したことは目論んじやいない」だ。

ふざけるな。

「君は人類を救うんだろう？ 顔を見せたのは、言ってみれば挨拶みたいなもんだよ。宣戦布告とも言うのかな。『それじゃあ今後ともよろしくお願いいたします』ってね」

そう言って彼はじっくりと立香の顔を見つめる。思わず後ずさりたくなるような威力を備えた視線だったが、多大な精神力を使ってそれを無視し、彼に近づく一步を踏み出す。

「君、いい加減それを降ろしたらどうだい。気づかないふりはダサいぜ」

地球は立香が背負うマタ・ハリを顎でしゃくる。

「うるさい」

双肩にのしかかる何かを跳ね除ける為に強い言葉を使う。

こいつにはどうしても聞いておかなければならないことがある。

「メディアを殺したのはお前か？」

『第三勢力』。

羽川の予想は見事に当たっていた。こんな存在がいるなんて想像もしていなかったが、彼女だけは「地球」という勢力の存在を予言していた。だったら確かめなければならない。

メディア殺しの犯人は地球か？

「メディア？ 誰だいそれ。ここで倒れている内の誰かだったら、そりゃあ犯人は僕だろうけど」

「俺達の仲間だ。青紫のローブを被っている。一昨日の午前中から姿が見えない。お前が殺したのか？」

「知らないな。そんなのいたっけ？」

「とぼけるな！ お前が殺したんだろう——」

「そろそろ演技をやめたらどうだい」

彼は先ほどよりも少し低い声で言った。

再び静寂が廷内に戻る。立香も彼も、何も言わない時間が僅かに生まれた。

「……『演技』って……俺が殺したって言いたいのか」

「そんなことは言っていない。君の仲間が誰に殺されたなんてこの際どうでもいい。言っている意味は伝わってるだろ？ あの英雄のようになしてくれよ藤丸立香。もっと建設的な掛け合いをする段階に入っていると思うんだけど——」

「どうでもいいってなんだよ！ メディアなんかどうだっていいっていいのか——」

「そう思っているのは君だろう」

……。

あれ？

おかしい。

続く言葉が出てこない。

声帯が、言語野が、うまく機能していない。

「そのメディアとかいう奴が誰に殺されたか。どうでもいいと思ってるのは僕じゃない。それは君だ。『真実なんかどうだっていい。目の前のこいつを犯人ってことにしよう。カルデアに悪者がいないということになればそれで万事解決だ』——そう思っているのは他ならぬ君だ」

「……違う、」

「僕の登場に寧ろ君は感謝している。ああよかったやっぱり敵は外に

いたんだと安堵した。セイレム中の住人を虐殺したのが『意志ある者』だとわかり、怒りの矛先を向けられる相手がいることを喜んだ」
「違うつ！ そんなこと思っちゃいない！」

「マシユ・キリエライトは生き残った」

唐突に。

何の脈絡も無く彼は話題を変えた——全く別の、しかし現在においては非常に重要な意味を持つ情報を彼は口にした。

「さつき慌ててここを出て行ったよ。アビゲイル・ウイリアムズも生き残った。まあ当然の結果だ。さつきの『あれ』は生ける屍を墓に追リライヴグデッドい返す為のものだったからね。屍鬼は即死……サーヴアントとかいう死人も原則全滅だ。やれやれ、不死殺しは誰か他のやつのだ名なんだけど」

「……何で」

問いかける立香に、彼は面倒くさそうに答える。さつき言っただろう。自然災害だ——と。

「あとは自分で考えてくれ。何でもかんでも答えを教えてくださいるのは良くないからね。そうでなくとも僕は放任主義なんだ」

じゃあ、と。

彼は軽く勢いをつけて腰掛けていた机から飛び降りた。だが着地する足音は聞こえない。そこには誰もいなかった。目を離してなんかいないし、瞬きもしていないのに、彼は忽然と姿を消した。煙のように——というか、初めから存在していなかったように、まるで全て夢だったかと錯覚してしまうほど。

そこには立香だけが残された。

ふと彼が座っていた机を見る。綺麗な平面の上に、ひとつ異物が乗っていたのに気づく。近づいてそれを拾い上げる。

眼鏡だった。

片方のレンズが割れている。弦は折れていないので一応まだかけることはできるが、かけることができるだけ。その眼鏡を通して見える景色は歪だった。

何故こんなところにこれがあるのだろうか。

疑問に思う。だが深く考えることができない。

「あれ……」

そうだ。

彼女に返してやらないと。

立香は入口の方に振り返る。薄暗い室内から光差す外へと一步、また一步と歩みを進める。ずるずると何かの背中から落ちたがそれを確認する気は起きない。肩が軽くなった。少し歩調が速くなる。

死体だらけの裁判所を後にした。

2

ランドルフ・カーターが意識を取り戻した時、まず困ったのは自分が今いる家がはたして自分の物なのか他人の物なのかわからないということだった。

ソファから起き上がり、ざっと辺りを見回す。それなりに豪華な調度品。自分の趣味と一致するが、それらを揃えた記憶は無い。そもそもこんな家に定住した覚えが無い。一体ここはどこだと思窓の外を見てみるが、大して特徴的なものは見えなかった。家の造りや気温から察するに、十七世紀の英国植民地のどこか……と言ったところだろうか。だとすればアメリカ大陸の可能性が高いが、さて。

カーターが寝ていた部屋に人はいない———と思ったが違った。彼はテーブルの影に誰かが倒れているのを発見する。うつ伏せの———白髪と黒髪が混じった奇妙な白黒の髪をしているが、どうもそれほど年齢を重ねていないように見える。少女のようだ。警戒しながら近寄り、声をかけてみる。

「大丈夫かね？」

返事はない。いきなり飛びかかってくる心配は別の心配にまわした方が良さそうだ。

とんとんと肩を叩く。反応なし。これといった外傷は見当たらない。背中に手をあててみる。心臓が動いていない？ 死んでいるのか？ 仰向けにひっくり返し、瞳孔の開きを見てみようとしたところ

で硬直が始まっているのを確認。間違いない。彼女は死んでいる。

カーターは一度立ち上がったため息を吐いた。

病気だろうか。どこか釈然としないものがあるが……一応の理屈をつけて自分を納得させる。彼女の瞼を閉じてやると、先ほどまで自分が寝ていたソファまで運び、寝かせる。本当はもつと色々してやらなければいけないことがあるだろうが、こちらも状況がまだつかめていないのだ。リヴィングの扉を開き、廊下へ出る。

そこでまた別の少女と遭遇した。

遭遇したというか見かけたというか。彼女はカーターに背中を向けており、今まさにこの家を出ようとしていた。外の光が眩しく、逆光で顔がよく見えなかったが——あのシルエットは少女のものだ。さつきりヴィングで死んでいた彼女と同じか少し幼いぐらい。右手に何かを持っていて、それがキラリと陽光を反射した（カーターは直感的にそれがナイフではないかと推測した）。

「――」

彼女が何かを呟くが室内まで吹き抜ける風がそれを掻き消す。風圧に目を開けていられなくなり、手で顔をガードする。

扉が閉まる。

バタンという音と共に静かな薄暗さが廊下に戻ってくる。少女はいない。外に出たのだ。慌てて扉に駆け寄り開けてみるがそこには誰もいなかった。家の角を折れたのだろうか。早足で周辺を搜索してみたが無駄だった。諦めて家の中に入り、この家が一体何なのかを探ることにする。

一階の奥にあった書齋をひっくり返して書類を読み込んだ結果、ここはランドルフ・カーターという学者の屋敷であることが判明した。自分はもう長いことここに住んでいるらしい。しかし全く身に覚えがない。私は長いこと旅を続けていたはずだが……。

アビゲイル・ウィリアムズという姪っ子と一緒に暮らしていたということだ。一瞬、ソファに寝かせた少女と玄関で目撃した少女を思い出すが、しかしどちらも違う気がする。アビゲイルは十三歳だという。どちらの少女もそこまで幼くは見えなかった。

そういえばまだ二階を探索していなかった。一度書齋を出ると、廊下にある階段を昇って未知のフロアに足を踏み入れる。ドアが四つ——一階の間取りに考えて部屋も四つ。一番手前の扉を開けると、そこには三つのベッドが置かれていた。寝室だろうか。いや、雰囲気的には客人を泊める為の部屋に見える。先ほどの二人の少女が泊まっていたのだろうか。

次の扉を開ける。その部屋にはほとんど物が無かった。綺麗に折りたたまれた毛布が数枚あるだけ。一つ前の部屋より幾分広い空き部屋だった。

三つ目の扉。その取っ手に手を伸ばした時、カーターは直感的に「何か」を感じ取った。決して説明のできない、良からざることが起きるお告げのような何か。扉を開く前に、そっと耳をあてて中の気配を確かめる。何か動く音はしない。静寂そのもの。それが却って不気味さを引き立てている。意を決して扉を開けた。そしてゆっくりと歩を進める。

西向きの窓から差し込む光。

気流の無い、沈殿した空気。

部屋の隅の箱に入れられた木製や布製の玩具。

ベッド。

ベッドに乗った奇妙なぬいぐるみ。

そして——アレクセル・ウィリアムズ金髪の少女。

彼女の胸に突き立てられた銀のナイフ。

純白のシャツに丸く広がる朱い染み。

一種神聖とも言える光景を前に、カーターはしばらくの間ぴくりとも動けなかった。

第十二話

0

ホームズ？ ああ！ あのホラ吹きで、無教養で、コカイン中毒の妄想で、現実と幻想の区別がつかなくなってる愛嬌のかたまりみたいなイギリス人か

——御手洗潔

1

「——なるほど」

シャーロック・ホームズは啞えていたパイプを手に取ると座っている椅子の背もたれに体重を預ける。書物や化学実験器具が煩雑に置かれたテーブルを挟んで座る空々は膝に手を置いたまま身じろぎ一つしなかった。

ホームズの部屋。

煙草の臭いが充満する密室で、空々は自分の見聞きした体験をホームズに語っていた。

否、今ちようど語り終えた。

ホームズは基本的に何も喋らず——稀に時刻や場所に関する質問をした以外は黙って空々の話を聞いていた。全てを聞き終え、彼は僅かな間沈黙すると、「犯人はマシユだね」と言った。

「何故そう思うんですか？」

「消去法さ。彼女以外に犯行が可能な者がいない。特に第一の事件は至って明快だ。メディア殺し——いや、正確にはキルケー殺しと言うべきか。当時彼女に毒を盛れた者はマシユ・キリエライトただ一人だ。カルデアの他の者には全てアリバイが存在し、キルケーはカルデア以外の者が用意した水を飲まないだろうからね。特に、あの屋敷の人間を信用してはいなかったはずだ。それは彼女の言動から推測で

きる」

「でもメデアさんが——キルケーが屋敷に戻っていることを彼女は知らなかったはずですよ」

「いや、マシユはそれを知っていた」とホームズは断言する。

「朝食の料理はティテユバが用意していたそうだが、飲み物を注いだのはマシユだろう？　彼女はキルケーの飲み物に微量の毒を仕込んだんだよ。決して死ぬほどではない、しかし万全の体調ではいられない程度の毒をね。森の中で自身の異変に気づいたキルケーは、それをティテユバの仕業だと勘違いする。そこで彼女はこう考えたのだろう。『第二の拠点を作るよりも、あの屋敷の召使いを見張っておかなければならない』と。ロビンから既に疑いの眼差しを向けられていることに気づいているキルケーは正確な理由を告げず、体調を崩したと言って屋敷に戻る。この言い訳はある意味では真実だったわけだ。キルケーが屋敷に戻ってきた頃を見計らい、マシユも屋敷に戻る。今回は運よく自分から申し出ることなく単独行動ができたが、そうでなければ自分から単独行動を提案したのだろうか」

「つまり、キリエライトさんもメデアさんが偽物だということに気づいていたと」

「そういうことになるね。そして——まあ、それが犯行の動機だろう」

ホームズは頷いた。

「屋敷に戻ったマシユは二階のベッドで寝込んでいるふりをしているキルケーのもとへ水を持っていく。今度は即死級、致死量の毒を淹れてね。ティテユバが実はサーヴァントで、ロビンが暫くの間屋敷を見張っていたことも知らなかった彼女だが、運のいいことにロビンが見張りを切り上げティテユバがそれを追いかけた時に家に辿り着いた。『使用人にばれてはいけない』と一応は警戒して動いていたマシユは、誰にも見つからずにその任務を達成できた」

「死体が消えたのは何故ですか？」

「それは私の専門外だが——彼女だけはセイレムに降り立った時『弱体化』を受けておらず、肉の器に押し込められていなかった為に殺された直後霊基が崩壊して消滅したという仮説がまず一つ成立し、私は

これを推している。もう一つ、謎の勢力——例えば君の言う地球陣が何らかの理由で彼女の遺体をあの場から盗み出したという仮説も立つには立つが、こちらは荒唐無稽すぎるね」

空々は「そうですか」と言った。納得しているのかしていないのかよくわからなかったが、ホームズは話を続ける。

「第二の殺人——ロビン殺しは情報が少ない分どうしても想像で補わなければならない部分があるが、あれはおそらくロビンがマシユの拘束を解いた時に起こった事件だろう。サンソンがロビンは本物だと断定している。君の言う『地球陣』も、自分では自分を本物だと思い込んでいるんだろう？　ロビンは自分を本物だと信じているが故に、マシユと二人で町の外から遊撃隊のように行動しようとしたのではないだろうか」

「じゃあ何で彼はキリエライトさんを一度拘束したんですか？」

「彼女が暴れたからだろう。『この男は私が犯人だと知ってあの屋敷から隔離したのかもしれない』——連れ去られた直後、彼女はそんな恐怖に襲われたはずだ。そりやあ必死で抵抗する。だからロビンは一度彼女を拘束し、そこで自分は犯人ではないと主張して彼女へ協力を申し出る。彼女が落ち着くまでの緊急措置だ。そして彼女は第二の犯行に出る。『こいつも偽物かもしれない』と、何かをきっかけに考えたのだと思うが——そこについては何とも言えない。君の見立て通りロビンが本当に『地球陣』だったのだとすれば、言動に違和感が出ていたのかもしれないね」

地球陣は人類を絶滅させる方向に動く。

それは空々のサンングラスを通さなくても判別することのできる基準だ。

「第三の殺人はサンソン殺し——ああいや、その前に彼女はラヴィニア・ウエイトリーを殺しているのかもしれないが、彼女の死体は見つかっていないから今は置いておく。サンソンの殺害だが、これについては大した謎も何も無いだろう。犯人はマシユで決まりなんだからね。問題は動機だが……そろそろ私にはマシユこそが『地球陣』ではないかと思えてきたよ。君はどう思う？　君のゴーグルを通して見

たマシユは本物かい？ 偽物かい？」

「さあ」

空々は膝に手を置いたまま言う。

「本物が偽物かを確認できたのはロビンさんとマタ・ハリさんだけだったの——何なら今から見に行きましようか？」

「いや、いい」

空々の提案をホームズは断る。

「マシユに言わせれば、サンソンも『偽物』だったから殺したのだろう。これも確認はできない。彼女の言い分は正しかったのかどうか……、今となっては霧の中だ。では第四の殺人に行こう」

ホームズは深くため息をつく。喋り過ぎて疲れたというわけではないのだろうが、それでも快調には見えなかった。この事件は彼も堪えるものがあるのだろうか。

「君たちが屋敷に戻った時、二階の客室の一番奥のベッドには羽川翼の遺体が寝かせられていて、アビゲイル・ウィリアムズの部屋のベッドにはアビゲイルの遺体と同じように寝かせられていた。羽川翼の遺体に外傷はなく、アビゲイルの胸には心臓まで深々とナイフが刺さっていた。ランドルフ・カーターの遺体は消えていた。おそらくは本来のランドルフ・カーターが体を回収しに来たのだろう。書斎が荒らされていた形跡は自分の体を使っていた者が今まで何をやっていったかを知るにカーターが調べたことによりできたものだ。ミス羽川の遺体をベッドまで運ぶあたり、彼はそれなりに分別のある人物なのだろうね。では彼がアビゲイルを殺したのだろうか？ 否。アビゲイルの胸に刺さっていたナイフはサンソンを殺したのに使われたものと同じナイフだった。それは当時、サンソン殺しの証拠品として裁判所にあつた筈だ。『悲鳴』に乗じてマシユは裁判所から逃げ出した。その時にナイフを持って行ったのだろう。カーターがアビゲイルを殺す為にわざわざ裁判所に保管されていたナイフを使うとは思えないから、これもまたマシユの仕業だ——そして最後の殺人。マシユ殺し」

ホームズの声が沈む。それは空々にもわかった。

「では、マシユを殺したのは誰だろう」

「それは僕にもわかりませんよ。自殺です」

間髪入れずに空々は言う。

「処刑台で首を吊っていたんですから。殺そうと思えばもっと楽なやり方がいくらかでもありますし」

「その通り」

ホームズが言う。

「一人で絞首台から落ちるには少し工夫がいるが……これまでの自身の行いを悔いて自殺を試みたというのが最も自然なシナリオだ。彼女はセイレムの魔女として自身の終焉を受け入れた。自分自身を裁いた——だが知っているかい空々君」

「何をですか？」

突然自分に話を振ってきたホームズに空々は質問を返す。煩雑に物が置かれたテーブルを挟み、ホームズは手に持ったパイプを弄っている。

空々は姿勢を変えない。人形のようにだった。

「魔女っていうのは大抵が冤罪なのさ」

ホームズはさらりと言ったのけた。

空々と視線を合わせない。彼の眼は自分の左手でクルクルまわるパイプに向けられている。

「どういう意味ですかね」

「そういう意味だよ」

間髪入れずに答えるホームズ。

ようやく空々と視線を合わせる。

「ひとつ教えてくれ。君はどうしてこんな事件を引き起こしたんだ？」

2

「まるで僕が全ての黒幕みたいな言い方ですね」
少年が言う。

「僕はしががない英雄ですよ。こんな複雑で面倒くさい殺人事件の計画なんてたてられません」

「私はそこから疑っているんだよ。君は本当に英雄かい？ 僕には君がただの十三歳の少年に見えるんだが」

「それはまた手厳しい」

少年は笑う。膝の上に置いていた手をあげると、ぐいっと伸びをする。「ヒントは自分の身の上ですか？」

「そうだね。恥ずかしながら」

紳士はニコリともせず少年の言葉を肯定する。煩雑なテーブルにパイプを置いた。

『初歩的なことだよ、ワトソン君』……』

少年が独り言のように呟く。

「ちよつと露骨過ぎたんじゃありませんか。鹿撃ち帽といい、決め台詞と言い……シャーロックに怒られても知りませんよ」

シャーロック・ホームズを相手にまわし、互角以上に立ち回った犯罪者はごくわずかだが存在する。

「仕方ないだろう。彼を演じるには彼よりも彼らしくならなければならぬ。キャラ付けの極端化は二次創作で日常茶飯事だ。君こそ途中から自分のキャラを忘れていた風に思えるけれど」

「やっぱりそうですか？ 演じすぎは良くないと思っただんですけどね」

最初に挙げられるのは何と言ってもジェームズ・モリアーティ教授だろう。犯罪界のナポレオンと呼ばれた彼は、かの探偵と同等の頭脳を有する悪のカリスマである。

「まあ、教授の眼を欺く手腕には感心しますよ。推理能力まで完全に模倣してのけるとは」

他には、ホームズの天敵——宿命の女、アイリーン・アドラー。

「推理というのはいかにして犯罪者の気持ちに同調するかにかかっている。私のようなコソ泥にこそ、最も向いている仕事なのだよ」

そしてもう一人。

たった一度だけの勝負。

かの名探偵の捜査を掻い潜った泥棒がいる。

「まあ、私の話はいい。今は君とセイレムの話だ。改めて聞かせてもらう。どうして君はこんな事件を引き起こしたんだ？」

「……おっしやる意味がわかりません」

「ではもつと具体的に聞こう。セイレムについてから最初の朝食で、何故君は君とメディアのコップを入れ替えた？」

「……」

少年は何も言わない。

「マシユ・キリエライトが殺そうとしていたのはメディア——キルケーではない。当初の予定では、彼女は君を殺そうとしていた」

「……」

「裏切りの魔女に微量の毒を飲ませたところで体調を崩す筈が無い。魔術を使えば一瞬で回復してしまう。わざわざ屋敷に戻ってくる可能性は本来ならばゼロだ——しかし君なら話は別だ」

「……」

「現代の英雄である君ならば毒を盛られては満足に動けない。合理的な空々空の行動基準に照らせば、君は体調不良を感じたらすぐに屋敷に戻った筈だ。そこに毒入りの水を運ぶというのがマシユの本来の殺人計画だった」

「杜撰ですね」

「ああ杜撰極まりない。君が誰かと一緒に屋敷に戻る可能性をこれっぽちも考えていないし、犯行予定時刻に自分が単独行動をとれると信じ切っているのが駄目だ。『空々が屋敷に戻るのはイレギュラーな出来事』と錯覚させるのがこのトリックの肝だが、こんなものは別にホームズじゃなくても解ける。体調不良を起こす毒と殺害に使う毒を同一の種類にすることで検死を誤魔化すなんて目論む前に、もつと他の要素を考慮すべきだと私は思うね。殺意を君に気取られるべきではなかった」

「……」

「ロビン達と同じように、君はあのメディアが偽物だと見抜いていた。そしてあの場で彼女に毒を回せばこの状況が作り出せることもわ

かっていた。魔力を温存するためにキルケーがベッドの中で変身を解くことも、彼女の体格が君とあまり変わらないこともわかっていた。故に君はキルケーに毒を回し、マシユに彼女を殺させた。しかし何故そんなことをさせた？」

「……」

少年は答えない。

「答える少年。何故マシユ・キリエライトを利用した？」

「……」

「何故サンソンの検死報告を偽った？」

「……」

「彼はこう言ったはずだ。『あれはロビンだった——そして、彼は自殺だった』と」

「……」

「何故だ」

「……」

「答える少年。何故ミス藤丸を破壊した？」

3

空々空という少年の言うことなら何でも信じられる。

空々のことなら何でも知っている。

空々と俺は一心同体だ。

空々は俺を理解してくれる。

空々は俺を受け入れてくれる。

つまるところ、俺は空々にどうしようもなくいかれているのだ。

俺は空々を愛している。

愛している。死ぬほど愛している。

空々には俺の全てを捧げてもいい。

あの時——俺を英雄と呼んでくれたあの時から。

俺は空々のものになった。

誰にも内緒のまま、俺は空々の所有物になった。

人類の奴隷だった俺を、あいつは解き放ってくれた。
本当、大好き。

大好きで大好きで、大好きなんかじゃ俺の気持ちは言い表せない。
空々は全て正しい。

空々が白って言ったたら黒でも白だ。

空々が黒って言ったたら白でも黒だ。

空々が偽物って言ったたら、例え本物でも偽物なんだ。

だから殺した。

ロビンは俺が殺した。

あれは偽物だ。だからさっさと殺した方が良い。

令呪で自害を命じた。誰にも見られない時に。

本当は森の中で直接死ぬのを確認しながら殺したかったんだけど、
それは無理だった。

日付が変わる直前。令呪が減ってるのが他の皆にばれないように。

マシユ？ ああ、あいつはいいんだよ。

俺が空々にいかれてるように、あいつは俺にいかれてんだ。告発な
んかするわけない。

『マシユは大切な後輩だった。でも空々君の方が大切だった』——」
紳士は煙草を吹かす。

「ロビンが自害する様子を見たマシユはそれがミス藤丸の仕業であると
瞬時に理解しただろう。さて次に彼女は どうするだろうか。サン
ソンやマタ・ハリにこのことを打ち明ける？ 否。彼女はミス藤丸に
惚れている。あの感情は恋愛を通り越して依存や妄信の域にまで達
している。そんなことは絶対にしない。寧ろ、ミス藤丸の罪を被る方
向に動くだろう」

先輩は私が守るんです。

全ての罪を被り——首を括る。

立香を守るために。

「本当なら他殺の偽装工作を施した後、土に埋めるか海に沈めるかで
もしたかっただろうが、生憎そんな時間は無かった。森の中には憲兵
がいたからね。おちおちしてはいられなかった。精々顔を潰して捜

查を混乱させるのが関の山だった。ロビンの死因はわからないが――毒を煽ったと考えるのが自然だろうけど、自分の首を絞めたのかもしれない。真相は闇の中だ。首を絞めた痕から目を背けさせるための顔面殴打と考えれば納得できるから、この可能性が一番高いかな。そして次の日、彼女は検死の結果を報告されないように法医学のスペシャリストであるサンソンを殺した。第一の犯行で君を狙ったのはまぎれもなく嫉妬の感情だろうね。最後、悲鳴が響いた後も彼女は君を殺す為に動いたはずだ。もつとも、そんな簡単に殺されてあげる君でもなかったわけだが――」

何故そこまでミス藤丸を自身に依存させた？

紳士は落ち着いた口調で問う。

「特に目的なんかありませんよ」

少年は訥々と応答する。

「僕の行動原理はいつだって変わりません。囲われた世界を打破する為、僕は僕にできる些細なことをせっせと積み重ねるだけですよ」

「……」

今度は紳士が黙る番だった。

「正直、君には戦慄している」

紳士は椅子に座りなおす。テーブルに置いたパイプを手にとって置きなおし、再び少年を見つめる。

「今回だけで四人の脱落者が出た――今まで一人も欠けることなかったカルデアのサーヴァントが四騎も死んだ。マシユと羽川翼を合わせれば六騎。これは非常に恐ろしい結果だ。何の力も持たない十三歳の少年にここまで掻きまわされるなんて想定していない。君はカルデア史上最悪の敵だ」

「最悪ですか。それはそれは……僕には過ぎた称号です」

紳士が立ち上がる。それと共に複数人の戦士が姿を現した。少年を取り囲むように――ゆらりゆらりと幻影を払い、一人また一人とその場に顕現する。

朱槍の猛犬。

絡繰りの忍。

カウボーイハットのガンマン。

そして、万能の天才。

「空々……」

レオナルド・ダ・ヴィンチは憤怒の感情を隠そうともせず少年を睨む。

「君は……君が何をしたのか、わかってるのか？」

「僕は何もしていませんよ。探偵役も犯人役も被害者役も、全部他の誰かに任せましたから」

少年は椅子から動こうとしない。もともと、少しでも動けば四方から即死の攻撃が殺到するので、動きたくても動けないというのが本音だろうが——それにしても彼はひどく落ち着いていた。

「そう殺気立たないでくださいよ。僕は挨拶に來ただけです——こんなただのジャブ程度のノリだったのに、冗談が通じないなあ」

そう言いながら少年はテーブルに一枚の紙を置く。手裏剣と弾丸が喉元を掠めるが、特に気にしない。

「僕の名前は串中^{くしなちゆうし}弔士。名前に一本筋の通った男と御記憶ください。それではまた——」

「待てー！」

クー・フリーリングが朱槍を突く。

加藤段蔵が双拳を飛ばす。

ビリー・ザ・キッドが引き金を引く。

レオナルド・ダ・ヴィンチが退路封鎖の結界に集中する——だがしかし、そのどれもが虚しく空を切り、串中弔士を捉えた者はいなかった。

「くそおー！」

クー・フリーリングが惜しげもなく悔しさを露わにして部屋の壁を叩く。ダ・ヴィンチはすぐさま管制室に追撃の指示を飛ばすが、その表情は苦かった。

ホームズは串中が置いた紙を拾う。

「罾かもしれませぬ」段蔵が横からそれを諫めようとするが、ホームズは「大丈夫」と彼女を制する。葉書サイズの紙に印刷されているのは

人の名前のようだった。

一里塚木の実

右下るれる

濤標高海

濤標深空

真庭喰鮫

萩原子萩

ふれあい

バゼット・フラガ・マクミレッツ

青崎橙子

間桐慎二

ラヴィニア・ウェイトリ

串中弔士

以上、『十三会談』。

お見知りおきを。

西東天。

4

セイレム。

丘の処刑場。

首を吊りかけたマシユは誰かに引き止められた。

「マシユ」

笑う。

誰だろう。顔が見えない。

知っている声だ。

誰だろう。

思い出してはいけない。

彼女との記憶を取り出せば、死ねなくなる。

彼女の為に死ねなくなる。

何かを手渡される。

「マシユ、これ忘れてったでしょ」

それは眼鏡。

自分のものだった。

「先輩……」

眼鏡をかけて、愛しい立香の顔を見あげる。

「もう大丈夫。全部終わったから」

立香の笑顔だ。

「ありがとう」

ああ……。

そうだ。

この一瞬の為に私は生まれたんだ。

「ごちらうございまして。先輩」

レンズが割れているから立香の笑顔が歪んで見える。

でも気にしない。立香は立香だ。

さようなら。

今までありがとうございました。

……

……

……。

「——かはは、この絵面は流石に傑作だ」
運命は終わらない。

次回予告 冒頭

0

僕の思い通りになったら許さないからね？

——墮落王

1

コツコツと無機質な複数の足音がカルデアの廊下に響く。外界を覗く窓は左右のどちらにも存在せず、薄暗い。特段、カルデアが電力危機に陥っているというわけでもないのだが、この廊下には不吉な空気が溜まっている。

向かう先はカルデアの監獄室。トレーニングルームや居住区画から離れた場所に設置されている。サーヴァントや職員でもここに来ることはほとんどない。今この道を歩いている彼らは、久方ぶりの来客だった。

「……本当にこんなところにいるのか」

先陣を切って歩く——しかしその割にはこの廊下の雰囲気には怯えた様子を隠さない恰幅の良い金髪の男性が、少し後方を歩く女性——レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画、「モナリザ」がそのまま現実世界に飛び出てきたような絶世の美女に尋ねる。

「うん。彼女はこの先にいる」

少しも笑わずモナリザは言った。その答えには妙な迫力があつた。金髪の男性はごくりと唾を飲み込む。歩調が少し遅くなる。

「どうしたんですかカルデア新所長。こんな時こそご自身の勇気を見せつけるチャンスですよ」

モナリザの後方を歩く、眼鏡をかけたピンク髪の女性が媚びた声で

金髪の男性に話しかける。あからさま馬鹿にしていたが、緊張の極致にある金髪の男性にとつてはそんな言葉でも救いになったらしく、「う、うむ。そうだな」と何度も頷く。

だがそれ以上減速こそしないものの、元の速さには戻らない。

「さつきも話したし報告書にも書いたけれど、彼女は精神が非常に不安定だ。ここに収容されてから、カルデアの人間及びサーヴァントが彼女とのコミュニケーションに成功したことはない——会話自体は成立するけど、まともな会話は望めない。それでも良いのかい？」

金髪の男性の隣に進み、歩調を合わせながらモナリザは彼の顔を窺う。怯えているのは簡単にわかった。「ううむ……」と唸り、一度歩みを止めかける彼だったが、ぶるぶると首を横に振り、闇に包まれた廊下の前方を睨む。

「いや！ 彼女とは一度話をしなければならない——話をしようとしたと私が努力した記録は残さねばなるまい。正気を喪っているとは言え、所長がマスターと一度も顔を合わせないというのは無しだ」

今度は思い切り歩調を速める。もはや半ば走っていた。「私に続け！」と、特攻隊長のようなセリフを叫びながら。その場を歩く誰一人として、自身のあとを追って来ていないのを確認する余裕はなさそうだ。

モナリザはやれやれとため息を吐く。

「臆病なのか勇敢なのかわからない人だね」

「臆病なだけですよ……。自分が勇敢でない事実を直視するのが怖いだけ」

先ほど猫なで声を出していたピンク髪の女性は辛辣な毒を吐く。彼に毛ほども魅力を感じていないのは明白だった。

ピンク髪の女性の後には三名の兵士。見るからに手練れ。無機質で陰鬱なこの廊下が、これ以上なく似合っている者どもだとモナリザは思う。

「彼らに出番が回ってくるような事態はこの先にありますか？」

モナリザの視線を咎めたピンク髪の女性が聞いてくる。「無いよ。彼女は嚴重に拘束されている。暴れ出した彼女を取り押さえるなん

てシナリオは万が一程度の可能性しかない」

「万が一はあるのですね」

「可能性の話さ」

その時は頼りにしているよ——と、モナリザは心にもないことを言う。

「その場合は生け捕りがお望みですか？」

ピンク髪の女性の問いにモナリザは沈黙する。僅かなタイムラグの後、彼女は「——いや」と答えた。

「生死は問わない」

彼女は何かを諦めたような顔をしていた。